
ネギま！ 塩派！

昂昂昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 塩派！

【Zコード】

N3792W

【作者名】

昂昂昂

【あらすじ】

サル・スプリングフィールド。それが彼女の名前だった。

知らぬ間に『ネギま！』世界に転生していた彼は彼女となり、多くを犠牲にして生き存えるも、麻帆良にて息絶えようとしていた。そんな彼女を救つたのは、前世で想いをよせていた、いないはずのお姉ちゃん（？）。

サルは彼女（？）の助力を得て、過激だつたりゆるゆるだつたりな学校生活と復讐劇を始める。

（（現在色々とタイトル詐欺やあらすじ詐欺状態です））

第1話・序幕

少年が枯れ葉のベッドからむくじと起き上がる。

自然と、「うあー」なる言葉が口から漏れでていた。

彼は軽い酩酊感の中、頬に着いていた枯れ葉がぼろぼろと崩れ落ちていくのを見て、数秒ぼうっと意識を飛ばし、現在の（・・・）彼自身のこととか、これまでの苦惱とか、ここで起きた出来事とか、なにやら色々なものを詰め込んだ息をふうと一口吐きだした。

そして胸元にある違和感を拭おうとわざとさすり。

拭えず、一度シャツの上を開けて見てみると、一重丹とそこから広がる鱗のよくな痣が浮かんでいた。もう一度をする。すると今度はあつさりと消えた。シャツを直す。

十月の空気が冷たかったのか、ひびと呻き自分で自分を抱くよう肩や一の腕をする。

それからやつと周囲へと意識を向けた。

木、木、木、三つあつて森。それがいつぱい。

「……以降、昼間だらりと森に入るのは自重しよう。もう秋も深いし、寒いし、麻帆良の森広いし。……はあ、それにしても……」

ふと、とある一方に向かって視線を向ける。森の奥、まだ彼が踏み入れたことがない区域。でも彼は知っていた。この先に死体がある。一度も会ったことがないし、意思疎通をしたこともないが、苦悶に顔を歪めた出来たてホヤホヤなのがあると知っている。距離がありす

きて肉眼では到底見ることができないが、それが今の彼にはよく理解出来た。

「んー？」

と、またぼうっとしていると、なにやら死体のある方へ人の気配が向かっていることに気付く。現在の彼の認識エリアに引っ掛けたその灰白色スーツの人間のことを記憶から引き出す。タカミチ・T・高畑。通称

「……ひゅう、デスマガネですね。の人もあちら側なんだ」

ぐう、と切なげに彼のお腹が鳴つた。
お腹をさすりさすり。

「……まあ、ほっときやデスマガネか誰かがどうにかしてくれるよ
ね」

独り言を呟くだけ呟いて、彼はその場を後にした。

「学園長、失礼します」

「入りなさい。どうじやつた。高畑君」

入室と同時に問いかに、高畑は聞き終わる前には首を横に振り始めていた。

麻帆良学園学園長、近衛近右衛門はこれ見よがしにはあと溜め息を吐きだす。

「神木と繋がる地脈を利用した時空間魔法か。まさかとは思つたが、わざわざ本国から来て本気で実行するとは」

「属性などを持たない世界樹の魔力ならと考えたんでしょうね」

「穴だらけの理論じや。大昔からあるのに誰一人成功者はおらん。生存者もまた、のう。第一、あれは成功しても時空間魔法とはいえるよ」

「平行世界の自分とのバス接続と、他世界観測による未来の知識の獲得ですか。要約するとその最終目標は……これはまた大層な内容ですね……。僕は魔法理論はからつきしですのでわかりませんが、学園長がそういうのですからそなんでしょうね」

先日来たばかりで、若く才があると評判であつた客員の部屋から見つかった資料をぱらりと捲りつつ、高畠は煙草に火を点けた。

「それ、燃やさんでくれよ。重要な証拠なのじやから。他に報告はあるかの？」

「特にはないですね。僕らでも失敗して解けるまで気付けないほど認識阻害結界が張られていたので、目撃者はありませんでした。ああ、そういえばエヴァが魔力に気付いてやってきましたが、事情を説明したら死体を確認してすぐに帰つて行きました。ところでおの方の死亡に関する責任関係の方は？」

「すでに手は打つてあるよ。本国から問題を寄越しておいて、こちばかりに被害も責任もとらされたんではたまつたもんじやないからのう。遺体の方は無傷なんじやろ？」

「回収してあります、無傷というわけでは……。その、胸に奇妙な痣のようなものが出来てきました」

「ほつ。説明が足りんかったの。それでいいんじや。それが術を行

使した証のようなものでの。わしらが関知しておらん証明の一つになる。あの魔法は使用者の意志と魔力でしか行えんものじゃし、催眠魔法などで他者の魔力が混じるとその癌も出でこなくなるんじやよ」

「そうなると、癌が出ているなら世界樹の魔力を利用した発想は間違いではなかつたということですか」

「そうじやな。じゃがそれでも失敗したんじや。問題は必要魔力量ではないと言われてあるし、発光現象のときにやつても同じ事じやろ。あの魔法は夢物語なのじやよ。神になる魔法なんぞの」

「糞ツタlena人生だつたぜ。オレがなにしたつてんだ。まつたくよお」

悪態を吐いても変わらない自身の容態に、少女は笑みを浮かべた。

もうすでに指先を動かすこともままならない。魔力はすでに枯渇していて、もう数刻すれば命も削りきつて右目から塩化していくことだろう。そして最後には塩の柱となつて崩れ消える。

最初にケチが付いたのはいつだつたろうかと少女は自問した。だがすぐに浮かんだ思考は、彼女に生まれたときからだと答えてきた。クカカツと乾いた笑い声が夜に紛れて消える。

少女には前世の記憶があつた。

一才を過ぎた頃にはすでにその自覚があった。そして、前世から持ち越した特殊な能力と知識で、この世界の正体と身の上の歪みを知った。

いつの間にやら転生し、彼女が生まれ落ちたこの世界は、前世の世界で『魔法先生ネギま!』というタイトルで刊行されていたマンガと酷似していた。

そして彼女はそのマンガの主人公役、ネギ・スプリングフィールドのいないはずの双子の片割れ、サル・スプリングフィールドとして生を受けていた。

彼女も最初は何を馬鹿なと思ったが、以前の人生で仲の良かつた近所のお姉ちゃんが話してくれた多元宇宙論や創造性の彼方、集合的無意識の海の話を思い出し、無理矢理現状を自分に理解させた。考えてもみれば以前の世界のときから少女にはあんな特殊な才能があつたのだ。彼女が元々いたあの世界も、なにかしらのゲームやアニメにマンガ、小説の世界だったのかもしれない。

だがそれを理解したからといって、納得は出来なかつた。

以前の世界のころから持ち合わせていい特異な才能、他者の状況や能力を観測でき、自身の設定能力値の分配及び開発ができる『ステータス』が、彼女の理解を補助しつつも納得するのを拒ませた。

『ステータス』とは、少女が転生前から持つっていた超能力のようなもののが呼び名だ。

正確には『情報統合利用化能力』といい、能力範囲内の存在情報をとして捉えて知覚処理し、自身も一つの情報体として捉えることで内在するエネルギーを任意に書き換え出力する能力であった。

この能力で人間を捉えた際、その人物の身体能力や所有する能力、^{スキル}

現在の感情などを知ることができ、その表示のされ方がゲームなどで見るような数値化された項目に似ているため、ステータスと呼ばれていた。

また自身の項目を改変することもでき、発達習熟した自分自身の身体能力やスキルを下げることで下がった分の能力値を他の才能に割り振り、強化することも可能であった。

この能力のせいというべきかお陰というべきか、少女にはこの世界がハリボテの世界などではなく、少なくとも現在の自分と同列に存在している世界であると理解せざるを得なかつたのだ。

英雄の子と呼ばれ、ウェールズにある辺境の村で育つたネギとサル。

過去にあつた大戦最大の英雄とされる父とよく似た容姿のネギと、秘匿されていたが前世知識で知っていた、『災厄の魔女』と呼ばれる戦争犯罪人の母によく似た白金の髪と吊り目オッドアイのサル。

強大な魔力という父親譲りの才能を持つネギと、人並みの魔力しか持たずなぜか精霊からの助力を得られないサル。

村では表立つて邪険にされることはなかつた。それでもステータスで自動表示される彼らの感情値をサルに隠すことなど出来るわけもなく、前世からの経験があつたので彼女もなるべく気にしないようについていたが、日に日に母に似ていく幼子の姿に大人達が危機感を持ち、未来への恐怖を感じていたことに気付かないわけがなつた。彼女の容姿は魔法世界において、悪い意味での広告塔になる。個人的にも社会的にもサルの命を狙う輩は多く、英雄の息子として将来有望であるネギの足を、容姿や才能、表沙汰になつていない彼女達の血縁問題で引っ張ることになるのは明白であつたからだ。なに

より英雄の息子を匿うのはまだなんとかなるが、魔法関係者全般に大量殺戮の首謀者と認識されている者の子を匿うのは、さらに大きな危険を伴うことになる。村に住む者達の命の問題でもあったのだ。そして単純に、子どもらししい子どものネギと、前世の記憶と能力があるせいで子どもらしくないサルとでは、大人ウケが違うというのもあった。

親代わりの従姉であつたネカネは、子どもらしく構い甲斐のあるネギについて回つた。単にネギがよく問題を起こし、その尻ぬぐいをよくしていたからとも言えたが、好意を感じとれるサルはそこに明確な差があるのをよく知つていた。

村で数少ない歳近い子どもであつたアーニャの好意もそうだ。元々の世界で年頃の男の子であつたサルはネカネやアーニャにネギがやるようなスキンシップを恥ずかしく思つていたため、あまり彼女達に近づこうとしなかつた。それが悪かつたのだろう。さらにネギやアーニャが問題を起こせばネカネ以上に論理的に叱つていたのもよくなかった。気付いたときには常に一步退かれた状態となり、アーニャどころかネギからも遊びに誘われることはなくなつていた。

だがそんなこと、前世から能力を持つていた彼女にとつて慣れたものであり、気にはしていなかつた。

ネカネが頑張つてサルを好きになつてくれようとしていたことを彼女も知つていたし、アーニャやネギは当時まだ幼児期だ。前世の経験があるサルとは違つて、叱つてくる者を怖く思うのは当然のこと。サルとしてはネギで手一杯のネカネに負担をかけたくはなかつたからこのままでも良かつたし、むしろ無理してサルを好きになる必要なんてないと思つていた。その気持ちだけでお腹いっぱいだ。実際にサルはその気持ちを彼女に伝えていた。アーニャにも将来ネギを支える一因になつて欲しかつただけで他意はなく、一緒に居る時間がそれほど多かつたわけでもないので親近感もそこそこしかな

かつた。サルは自身が嫌われても構いはしなかつた。

疎ましく思われるのも、忌避されるのも、恐怖を感じられるのも、なんら問題は無かつた。以前の世界でも、こちらの世界でも、人がある限り、人にはない才能を持つサルは自身が受け入れがたい存在であると知っていた。それにサルの中には常にあちらの世界でサルを支えてくれた近所のお姉ちゃんがいて、不思議と寂しくはなかつた。

問題は村が悪魔に襲われてからだ。

襲われることは知つても正確な日時では憶えていなかつたサルは、雪がちらつくようになつてから度々村を抜け出し、逃げる算段を立てていた。ステータスの能力で自身の能力値をいじり回し、魔力や気を小動物並にまで下げて偽装。その分の能力値を気配遮断に回して森に隠れるつもりでいた。ステータスある程度は自己を強化できるが、開発できる才能も振り分けられる能力値も限度がある。どうしても開花しない能力もあるし、条件がきつすぎて実用性がないものもある。悪魔の群に対抗できるほどの戦闘能力など、どう振り絞つても彼女は生み出すことが出来なかつた。だから逃げるだけを考えていたのだ。

将来的にあの永久石化は解けるかもしぬないし、解けなくて死んでいるのと何も変わらなくなつたり、むしろ襲撃時点でサルが知る事象とは違う事が起こり、イレギュラーで大量の死亡者が出来る可能性も充分にあつたが、彼女は気にしていなかつた。優先的に狙われる可能性が高いのが自身であることは村人達の反応から理解していたし、下手をすると人身御供で裏切られかねない。むしろサルの危険性を理解している者達が無事に生き残ると、襲撃を受けた責任を全てサルに被せてくる可能性もあつた。最悪の想像だが、ありえない未来であった。こんなサルだからこそそういう対応になるのだと彼女もわかつていただが、だからこそサルもそのように思考と行動をせざる得なかつた。

だがその企みも失敗に終わった。

目を離すとすぐいなくなるようになつたサルを、村人達が監禁したのだ。

襲撃を予期していたとは思えないことから、サルが村の外に出て外部の者にその容姿から出生を悟られないようにするための処置だつたのだろう。サルが感じたりステータスで確認した彼らの感情に忌避感はあつたものの殺意は無かつたので、もしかしたらネカネが帰つてくるのにいなかつたら彼女を悲しませるからとか、案外そんな理由だつたのかもしれない。今となつてはもう知る方法はない。

そしてそのタイミングで悪魔はやつてきた。

偽装や気配遮断のお陰で悪魔がサルに気付かずすぐにその場を離れたのはいいが、彼女が出て行かないよう見張つていたアーニャの親が石化した際に巻き添えをくい、右目から石化が進行。彼女はすぐにも全身が石化してしまった状況で、一瞬で対処法を見つけてステータスをいじくり回し、完全石化は免れたものの、右目は石化したまま。しかも石化進行を抑えるために使用できる魔力がそれまで以上に少なくなってしまった。

それからほどなくして祖父に引き取られメルディアナ魔法学校へ入学したものの、親が石化したのはサルを庇つたからだと勘違いしたアーニャとの関係は悪化の一途を辿ることとなり、逆にネカネは殊更サルに優しく接するようになったが、彼女は彼女で襲撃の際突如現れた大戦の英雄にしてサルとネギの父親、ナギ・スプリングフィールドに悪魔から助けられており、ナギにも気付かれないまま一人サルが自力で生き残つたことによる後ろめたさがその優しさの理由でしかなく、その理由が重荷となつて、彼女は気付かないフリをしていたが心の底ではサルを疎ましく感じるようになつていつた。サルが望んだものではないとはいえ、ネカネ自ら望んで向ける好意と、理由があつて向けさせている好意とでは、疲労の度合いがまるで違う。その結果だつた。

そしてネギだ。それまで散々妹にその危なっかしい言動を注意され続けたのが癪だったのだろう。サルには魔力も魔法を使うための精靈と交信する才能もないとわかると、小言を言つようになつた。

「そんなんじや、『立派な魔法使い』になれなによ」「だから僕がサルを守つてあげる（・・・）よ」などと。

確かな優越感を彼女に見せつけながら。

その辺りで少女は彼らがどうでもよくなつてしまつた。

すでに薄くなりつつあったマンガの印象が美化されていたのか、ネギはもっと純粹でひたむきな少年であつたとサルは記憶していた。だがそれがこの世界においては間違いであり、その記憶がすでに意味のないものであると理解したからだ。

そしてサル自身がその記憶の意味を無くして歪みを産んだのであろうと理解しながらも、だからこそ自分も自分勝手に生きて良いのだと思えたというのが、どうでもよくなつた最大の理由であつた。

彼らは彼らなりに生きている。だからこそ、オレもこの世界で生きていいいのだと、逆説的にサルは思いついたのだ。

サルは彼女を無言で責めるアーニャの姿に、村人が向ける視線を努めて無視する自分を幻視した。何も言おうとしない自分を見つけた。

無理してまで好意を寄せようとするネカネの姿に、彼らの近くにいつつも離れていた自分を幻視した。身勝手な好意を向けていた自分を見つけた。

優越を抱いたネギの姿に、ネギに注意をしていた自分を幻視した。知識を嵩に上から目線である自分を見つけた。

彼らの姿に、趣くままに生きる自分を幻視した。自身を何かに当

て嵌めようとしたしながらも、自由でもあらうともがき、生きる自分を見つけた。

ネギまにも、ネギにも、スプリングフィールドにも、災厄の魔女にも、石と化した村人達にも、その生き残りにも、気兼ねする必要なんて無い。

サルとしては最初からそのつもりであったが、まだ認識が足りなかつたのだと実感した。その時の気分ほど晴れ晴れとしたものはなかつたと彼女は思う。

授業をサボリ気配を遮断して、ネギとかち合わないようにながら禁書庫で必要な知識を叩き込んだ。

学校で習つような基礎の西洋魔法理論なんて、とっくに村にあった書物で終えている。前世から彼女は非常に頭が良かつたし、このサルの体はその前世を上回るスペックを持っていたから憶えるのは簡単であった。

自己ステータス設定でも精霊との相性が絶縁しているいえるほど最悪なのはわかつていたから、通常の魔法は最初から捨て置いていた。相性が悪すぎて精霊の設定項目を生み出すのにも、改造するのにも、必要な数値が大きすぎたのだ。これはおそらく、サルの前世が精霊が存在しない他世界人であつたからだろう。だから禁書漁りはすぐに終わり、呪物や呪符に関するなどを調べてステータス欄に追加、それらを必死に極めた。西洋魔法使いの拠点では大した呪符の知識は得られなかつたが、シジルと呼ばれる悪魔などの印を知ることが出来てその知識を呪符に応用、後々随分と役に立つた。

そうした中で落ちこぼれだと宣い、あまつさえ直接手を出してきた魔法学校の者達を返り討ちにするようなこともした。

同じように落ちこぼれていた者や、他とはソリが合わなかつた者などと連むようになり、それまでになかつた友人を作つた。

そしてサルはどこからか差し向けられた暗殺者にその友人達を殺され、返り討ちにして、世界に飛び出した。

それから三年ほど経ち、今、サル・スプリングフィールドは死を迎えるとしている。

命を使い切つたことが最大の原因だ。

解呪不可能な永久石化の呪いを御するのには大量の魔力が必要だつた。それを彼女はステータスをいじくつて命で代払いしていたのだ。多少制御しやすくするために呪い本体をいじり、石化から塩化へと反転させたりもしたが、焼け石に水であった。古来から『呪い』による変化の代表とされる『石化』の反転により、同じく古来から世界各地で『祓う』効果を持つとされた『塩』という神聖性へと交換しても、魂への有毒性は変わらなかつたのだ。それだけではない。追つ手や暗殺者から逃げたり返り討ちにするために、さらに命をベットにして自身の精神や肉体が感じとる時間を引き伸ばし、常に体内と外界との時間差を物理的に三倍にまで広げて対処し続けた。そのせいで対外的には九年しか生きていなければならぬのだが、肉体は、実質十五六年生きている状態になり、それ相応にまで成長した。だが体内と体外の差が生み出す負荷で体は芯からぼろぼろだ。維持しようと手は尽くしたが、それ以前の問題としてすでに掛け金の命 자체がなくなりつつあつた。そして最後の手段を講じようと麻帆良侵入を計画し、結界にも感知されずに侵入は成功したものの、結局体力と命が尽きて倒れてしまつたのだ。

「糞ツタレだ……糞、糞、糞、クソクソクソがあ！ ああ、ほ

んど、嫌なんなるぜ……」「

彼女は悪態を吐き続けていたが、気分は悪くなかった。この悪態は放浪の三年間で身についてしまった口癖のようなものだ。

現に瞳は未だもつて爛々と輝き、言葉とは裏腹に心の底からの笑みを口端に浮かべている。

わざわざ麻帆良くんだりまで来ておいて、最後の手段もなにもあつたもんじゃないまま倒れてしまつたが、妙にやりきつた感触が彼女の裡にあつた。

元を辿れば、彼女にとつて目的も何もない人生だったのだ。あちらの世界であつたならお姉ちゃんがいて、彼女の幸せを願つていたところだつたのだろうが、こちらには悔いがない。自己犠牲がどうとかなどではなく、生きる目的意識が欠けているのだから当然なのかもしないし、生まれた状況を考えれば生き抜けるだけ生き抜いたのだから、よくやつたと自分を褒めてもいいだろうと考えていた。

少女は誰かに殺されるのではなく、自分の意志でここまでやってきて死ねるのだ。

スタートラインや経過を考えれば僥倖といえる。

(憐しむらぐは、最後に彼女にまた会いたいといったところか)

一番最後にある彼女との記憶は、一緒に買い物に出かけてはぐれたといつものだ。前世のサルは携帯を持たない彼女を見つけるために方々歩いて、気付いたらこの世界にいた。

(まあ、異世界転生があつたんだ。魂の旅路の果てに、また会えるかも、しれねえな……。あの能力も、まだ消してない、し。案外、探して、る、あの場面から、再スタート、か、も、しれな、い……)

そしたらすぐにでも見つけよう。いつも見つけるのは彼女の方からだったけど、今度こそオレから見つけるんだ。そんな決意を閉じそうなまぶたの裏に想い描く。

(……ああ、会いた、い、な。なごむ、姉、ちゃん……)

少女の右耳から、ビシリと酷い痛みが走った。
呪いを押さえつけるだけの命がなくなつたのだ。

暗くなってきた左の視界に、サルは大好きななごむ姉ちゃんの姿を思い浮かべた。

彼女は奇妙な人だつた。顔立ちは普通なのに、見ているだけで妙にそわそわさせたり、ほっこり落ち着かせたりする、不可思議なオーラを纏つた人物だつた。いつもふらふらとしていて、危なつかしい女性であつた。

そのイメージから生まれたばかりの滲んだ人型が、枯れ草を分け入りシャクシャクと落ち葉を踏みつけて近づいてくる。

(　ああ、ああ　)
「　なご、む、ちゃ　みい、つけ　た　」

擦れた声。彼女が側に寄り、昔からずつと変わらない、ぱっちりと開いた眼で倒れ伏すサルを覗き込んでくる。

幻であろう彼女の姿はやつぱり滲んでいて、でもその視線や表情だけは不思議とはつきり認識できていた。

もう体感時間で十年以上会つていなかつたから、イメージ補正がかかつてゐるかもしない。サルはなぜか、大好きなお姉ちゃんが

格好良くなっている気がしていた。

「ひゅう。」これから森歩きは止められないんですよ」

やはりまだ口笛は吹けないらしい。吹く真似をして、ニッコリ、「なごむ姉ちゃんが笑う。

「おシオ、み~つけた」

前世で彼女だけが使っていた渾名で、なごむが指をわす。そんな彼女の様子に、オレが先に見つけたんだ、とサルは笑つて、意識を闇に落とした。

ザツと影が一つ、夜に塗れた森の中に降り立つた。

一つの内小さな影の方がきょろきょろと周囲を見回し、ふんと鼻を鳴らす。

「逃げたか。感じた魔力反応すらもう欠片も残っていないとはな。場所はこのあたりで間違いないはずなんだが。何か痕跡はあるか、茶々丸」

「熱反応感知。その木陰に熱量残滓を発見しました。残滓に連續性がないことから、転移などの方法でこの場を離れたものと思われます。また、熱量の状態から推測して、一人ないし一人ほどの人間

がいたものと思われます

言われた場所に屈み込み、わずかばかりに残つた何者かの体温を小さな影が探る。

「……そだらうな。先ほど感じた魔力は転移の際のものだらう。ちつ、やはりもう魔力は感じられんか。ジジイ共から報告は？」

「現在のところありません。問い合わせますか？」

「いや、構わん。どうせ先ほどの魔力にも気付かなかつたのだらう。私ですら近くだつたから気付けたようなものだ。……結界には侵入者の反応もなかつたというのに、突如現れた未確認の魔力か」

月明かりに映える長い金髪が地に着くのも構わず、小さな影が屈んだままその場で考え込む。

思い出すのは五日ほど前に起きた、本国から客員として來たという魔法使いが無断で行つた実験のことだ。実験そのものは失敗し、その魔法使いはすでに死んでいる。だがその際、少女、エヴァンジエルン・A・K・マクダウェルは、不審な魔力反応を感じとつていた。

時系列的にその魔法使いが死んだ後になつてから発生したとしか思えない、今のように残滓も残らないほど淀みなく綺麗な魔力反応だつた。

転移魔法を使う方法は、転移符、転移特性を持つ魔法具及びアーティファクト、もしくは純粹な魔法の三つに分かれる。その内転移符は魔法具の中に含まれるため、本質的には一つともいえるかもしれないが、魔法使い達の認識ではその三つに分けられていた。

そして三つそれに特性がある。

最もよく使用される転移符は値が張るが誰でも使って、転移距離に応じて価値が高くなる傾向がある。だが簡易に利用できて移動することのみに特化されているため、隠密性が非常に悪い。転移元もそうだが、特に転移先には大きな魔力反応が生まれるのだ。常時感知結界を張っている此処、麻帆良領内に転移しようものなら、すぐに大まかにでも場所が割れてしまう。だが結界の管理者である学園長から連絡がないということは、それもないのだろう。考え込むエヴァンジエルン自身も結界を応用し、麻帆良の中は感知出来るようしているため、転移先反応の見逃しはありえない。そしてこれは転移符がそうであるように、ほとんどの魔法具にも当てはまる特性といえた。つまりこの状況で転移符を用いて転移を行っていた場合、転移先は自然と麻帆良郊外となるのだ。

次の例となる、アーティファクトと呼ばれる個人専用の特殊魔法具の類には、非常に稀だが効果性や隠密性が高いものもある。その場合、麻帆良内部に転移されても気付かない可能性があるが、それほど強力なアーティファクトを生み出せる魔法使いの場合、ほぼ確実に結界に本人の潜在魔力が反応してしまい、麻帆良関係者の知るところとなる。それにそれほどの代物となると、世界に一つか二つしかないだろう。危険視しても防ぎようがない類のため、考えるだけ無駄だ。

そして最後の純粹な魔法に関してはさらに難しい問題となる。転移者は一人ないし二人。元来転移魔法は個人レベルで使うには非常に難しい種類の魔法であり、集団転移のために手間のかかる儀式魔法を使うことはあっても、個人で使うことはほとんどない。ありえないではないが、出来る者がいるとすればそれは相当上位の魔法使いか、転移魔法に特化した特殊タイプだ。しかもこの麻帆良全域にかけられた結界や少女の感知を欺けるほどの者となると、隠行におい

ては確実に最強クラスの存在となる。転移先にも転移の際に感じた魔力しか反応を残さないのであれば、麻帆良領内であろうと少し距離があるだけでエヴァンジエリンでも感知出来ないかも知れない。いや、最悪の場合近くであろうと、転移先の人口密度が高いと紛れてしまうかも知れない。今回気づいたのは近くであったことと、森という人が来ない場所であつた要因が大きい。さらに一人以上で行動していく、複数で転移可能となると

「 ククク、面白いことになるかも知れないな」

枝葉に蝕まれた月明かりの下、少女は牙を見せるように笑った。

第2話・和塩

「サル・スプリングフィールドがあ。サル、お猿、さる？ ラテン語で塩じやんか。じゃあやつぱりおシオでいいね」

「いや、元はウシオ……ああ、もうなにも言わねえよ。好きにしてくれ、なごむ……兄ちゃん？」

サル・スプリングフィールドは困惑していた。

半ば思考を放棄するために先ほど煎れてもらつたジンジャーティーを啜る。市販の葉で煎れた紅茶に砂糖たっぷりと下ろし生姜にゆるめのホイップクリーム、そしてシナモンパウダー。これは前世から彼らが好んでいる飲み方だつた。甘い香りと味が拡がる。色々と変わってしまった二人の間に、変わらない空気が生まれる。

「なごむでいいよ。兄ちゃんととか、こっちじゃ姉がいるせいか、なんかむず痒い。それに肉体年齢的にはおシオの方が上っぽくない？ あ、おせんべい食べる？ 揚げせん？ サラダせん？ それとも海苔巻き？」

少年が座卓の反対側から煎餅類が山盛りになつたお茶請け皿を勧めてきた。

「……まあ、本人がそういうのなら、なごむで。でもこれに煎餅はないだろ。クッキーとかねえの？」

言いながら手は伸びて獲物を口へ運ぶ。海苔巻きだ。

「昨日焼いたけど、焼きたてが美味しくてすぐに全部食べちやつたんだよね。クッキー」

「あ、この味、煎餅も手作りじゃん。変わつてない。」少ちでも菓子作りが趣味なんだな。言わないと自分で粗方食べちまうのも変わつてねえのか

はにかみ、気恥ずかしそうに頷く彼もジンジャーティーを啜り、ほっと息を吐く。

不思議な印象の少年であつた。体型はやせ氣味。少々長めに伸びた前髪。男性としては大きめの目と、それを強調する睫毛。顔の作りはそれなりに整っているのだが、目の大きさの割に何故か派手さがまるでなく、化粧なんかを施して衣装を変えれば女の子にも見えるかもしれない。かといって目を惹く美形ということではなく、あくまでそこそこ程度であり、なんというか、色々と薄い感じがする少年だ。

だがその印象は前世から変わつていない。彼は『なごむ姉ちゃん』であったときからこのよつたな雰囲気を纏つっていた。この奇妙なチグハグ感が薄いのに濃いという印象となり、顔はなかなか思い出せないのに印象はしつかり憶えているという、不思議な感覚を他者へ植え付ける。いうなれば微少年。微少女といったところか。

だからこそサルはすぐに気づけたのだ。なごむ姉ちゃんだ、と。

実際のところ確信した理由はそれだけではないのだが。

「それにしてもあのおシオがこんな別嬪さんになっちゃうなんてねえ。ビックリした」

だが対するサルも見た目といつ点での印象は強烈だ。

ショートに刈られた白金の髪。恐ろしく小作りで整つた顔の左側にはまつた、意志の強そうなエメラルドの瞳。右半分は大きな眼帯でほとんど隠れているが、むしろそれがアクセントとなつて左右非対称の造形美を際立たせている。先ほどまでかきついていた肌や唇

も治療によって細胞レベル以下の単位で再生しており、シャワーで身を清めたことで本来の肌理と潤いを取り戻し、湯上がりのせいもあって白の奥の赤が引き立ち輝くようである。細くしなやかな女性を発揮する体躯も、驚くほど均整がとれていた。

なごむにとつておシオは自分の後ろをついて回っていた愛らしい男の子である。それが今やどこに出しても恥ずかしくない絶世の美女となっていた。

「嬉しくもねえ。この見た目のせいでどれだけ苦労したことか」「魔法使いの英雄の父と災厄の女王の母とか、すげーね。どこのロープレの主人公だよって感じだ。あ、でもマンガでこの世界觀があるんだっけか。同じようなものか」

「オレとしちゃ、なごむもこっちにいたことに驚きだけどな。しかもそんな『タラメ』な力まで持つてるしよ。まあお陰で助かったけど『自分も』なごむを知っているおシオがいることに驚きだよ。すでにこの世界以外の『なごむ』は『自分』が存在した可能性を取り込んじやつたから、どの世界でも存在しなかつたことになっているはずだからね。別の分岐世界からの転生とかあっても、おシオは『なごむ姉ちゃん』を知らないはずだっただけど」

「その矛盾を解消するためにこっちにオレが喚ばれたんだろうな」「あれ？ そんなこと出来るような能力だったっけ？ おシオのステータスって」

「ステータスいじって作ったんだよ。なごむとはぐれたあの日、なごむを捜すためにな。『エンカウンター』って名付けた。会つたことがある相手のことを考えるとまた会えるだけの能力だ。出会い運を上げてちょっとといじつただけで固有能力としての形が出来たよ。こっち来たときもそのこと思い出して使おうとしたけど、なごむの反応自体がなかつたから諦めて最小値まで能力値下げて半封印してた。こっちに来た原因があるとしたらこれの効果だな」

サルは語らなかつたが、反応が無かつた時点でエンカウンターを完全に消して、他のステータスに回せる残存数値に戻すことも出来た。だが彼女がそれをやらなかつたのは、一度消してしまつと登録されているなごむの名前が消えてしまうからである。そして登録できたのはこれまでなごむだけ。他者を避けるために逆利用できなかつたかとネギや悪魔を登録しようとしたこともあるつたが、出来なかつた。本当に会いたいと思っている人物しか登録できない、少々使い道に困る才能であつた。

「オレが九年前に転生してきたのにその原因が五日前ってのはおかしな話だが、なごむが能力を得た経緯を考えると、まあありえそうだろ。世界が別もんだし、時間とか無視できそうだ」「なるほど」

サルがこちらの世界に来てエンカウンターを使おつとしたときに『なごむ』の反応が無かつたのは、当時まだサルの知る『なごむ姉ちゃん』がこの世界に来ていなかつたためである。

だがここにいるこの世界の『なごむ』に、サルの知る前世の『なごむ姉ちゃん』が引き寄せられ統合されて、『五日前』同一人物となつた。そしてサルは『九年前』その引き寄せに巻き込まれ、この世界へ來たのだ。

全ての原因は、五日前に行われた儀式魔法にあつた。

『魂繋ぎの儀』『妖精環の縁』『i-fの未完詩篇』『神々の例え話』等々、呼び名は幾つもあれど、その儀式魔法の内容は同じである。

通常、人間にとつて未来とは知らないが故に、確定していないが

故に、未来たり得ている。そのため、もし予知で百パーセント完全な未来を知ることが出来るとなると、逆説的にその未来は確定していることになつてしまつ。そうなるとどんなに避けたい未来も、変更したい未来も、如何なる予防策も対抗策も存在しなくなり、唯々受け入れるしかなくなるだろう。そこに予知の意味はない。未来を確定させる（・・・・）予知など、視点を変えると他の未来を殺すことと変わりない。本当の意味での未来を観測するとはそういうことなのだ。

だがこの魔法は違う。

「ここ」は違う時間を歩み進んだ、もしも世界にいるあり得たかもしれないもう一人の自分。その自分と直通のパスを繋げることが目的の魔法であり、直接この世界の未来を知るのではなく、他のそつくりな世界の未来の事象を観測することで、結果的に極めて近似で変更可能な未来を知れるのではないか？ というものであった。成功すれば、どんな物事も自分の意のままに出来る魔法と言える。

だが五日前、この魔法を使いした魔法使い本人は魔法の効果によつて得た『死』の知識に耐えられず、ショック死した。

当然といえば当然であった。

三千大千世界の自分の知識を一度に得れば人一人分の脳では到底処理しきれず、文字通りパンクする。特に神秘に関わる知識はそれだけで魔術世界的な質量を持つ。それが複数同時に収納される、その意味は脳や魂の変質では收まらない。ちょうど重力が収束され偏重をきたすと空間を変異させるブラックホールが生まれるように、周辺世界の改变もありえる事態だ。それを回避するために知識を直接得るのではなく、あくまでパスを繋げて同期させ、任意に必要な

もののみを得るという内容の魔法であったが、このバスは『死んでいる自分』にも当然繋がるのだ。そして今この瞬間『死ぬ自分』とも繋がる。全ての世界の自分に繋がるとはそういうことだ。知識や知恵に制限をかけても、繋がり、同期した感覚に紛れ込んでくる『死』には対応できなかつたのだ。そしてしこれに制限をかけても、繋がつた感覚がないことにはどのバスからどんな知識や知恵が得られるかすらわからない。それではこの魔法の意味はなく、いつかは繋げないといけなくなる。それ故の魔法使いの死であつた。

それはこの世界で不死者となつてゐる者でも同じ事である。全ての他世界でもまったく同じ不死である可能性はない。これまでこの魔法を使ひした不死者達は、不死の中に生と死の概念が紛れ込み、永遠と眠り続けるか、不死を無視した新たな矛盾を解消するために不死が解消され、改めて死ぬかの一択であつた。

だが例外は存在した。

魔法使いが試した、属性を持たない世界樹の魔力を利用するという方法。これによつて起きたイレギュラーは魔法範囲の広域化であつた。そしてそこに巻き込まれてしまつた存在がいたのだ。

なごむだ。

この世界にいた『なごむ』も含め、サルの知る『なごむ姉ちゃん』などの分岐世界上の『なごむ』はサルのよとにとある特異な才能を有していた。

『信受』

サルのステータス上にはそのような名前で表記されるそれは、ステータスのように使い勝手のいい代物ではない。その特性を述べるならば、るべき答え以外の「誤魔化しは効かなく」なり、その「答えを受け入れる」ことができる能力という、なにを答えとするか

も曖昧な、非常に不安定で取り扱いに困るものであった。

だが確かなことは『なごむ』はこの異能故に認識阻害結界をぐぐり抜け、儀式魔法に巻き込まれて、そこで生まれたバスで繋がった全てを受け入れた（・・・・・）。

結果、それぞの世界にいたはずであった『なごむ』の過去から未来までの全てを受け入れた彼は、全から一へと返還、帰結し、三千大千世界の『なごむ』が存在した可能性を取り込み一つとなつて、唯一無二の『なごむ』となつた。

そして『そうであつたかもしれない可能性』などという時間的制約をもたないものを取り込んだが故に、それに巻き込まれたサルもまた、時間に捕らわれずにエンカウンターの設定通り（・・・・）九年前に転生を果たすこととなつた。

まだ九才であった前世のサルが、十四才の『なごむ姉ちゃん』に会いたがつた通りに。

「なあ、なごむはこの世界の未来を把握しているのか？」

談笑と共にちびちびとジンジャーティーを楽しみつつ、その中の一いつとしてサルがなごむに問う。内容は非常に重要なことであつたが、現在のサルにとってはそれほど重要なことではなかつた。ここでなごむに会えたことで、ある意味すでに思い残すことがないような心境に彼女はなつていた。

「把握しているといえば把握しているし、分からぬといえば分からぬよ。この体はあくまで人間だからね。思い出そうとしなければ思い出せないんだ。それに、『なごむ』と『おシオ』がいる世界は完全に『ここ』だけだから、思い出しても十全じゃないはずだよ。

なにか知りたいことでもあつた?」

「いや、そういうわけじゃないんだがな。だがそうか、その様子だと、あんまりその知識を使うつもりもないんだな」

「ぶっちゃけ未来なんて、一部の事柄以外どうでもいいからね。人の身としては知つてしまつと楽しめない事柄が多くさるし、ほとんどのことをあえて忘れているよ。人間の体でも、不老不死や若返りを望めば幾らでも可能だし……。といつかすでにそんな感じになつちやつてるのか。今気付いたよ。魔法の影響で改变起こしてゐる。あ、じやあ自分に接続して、向こう側に情報置いて治したおシオもじやん」

「うげ、オレも不老不死なの?」

「うん」

事も無げになごむは頷く。

「接続切るとまた元に戻るけど、どうする?」

「他にあつたかな? おシオの状況で助かるようなの……」

「あー、いや、とりあえずこのままでいいよ。わかつてたけど、まあやつぱ無茶苦茶だな、なごむは。全てのなごむが持つていた『力をまとめて使えるとか、無限大に近い可能性なんだし、実質出来ないことはないんじやないか?』

「多分ね」

本当に事も無げである。実際になごむひとつそんなどとはぜつでもいいのだらう。

「その割には使う力は最小限なのな。さつきの転移とか、魔力消費してたし魔法ぽかつたけど、効率化が凄まじかつたじゃん」

「一応この世界に合わせて魔法もどきでやつたけど、精靈を介して

いなかつたから。自分自身を媒介にしたらああなつたんだよ

「自分自身を媒介？ 精靈の代わりにか？」

「そそ、ほりこれ」

となごむが上着を脱ぎ、平たい綺麗な胸を撫でた。すると何もなかつたそこに、一重円と全身に広がる鱗のよつな痣が浮かんだ。さらに下も脱ぎ、下着一枚になる。

「これが最初に繋げたバスの名残でね、時空間術式の基礎になるんだ。これを元に全身に なんで赤くなつてるの？」

その下着すらも脱げていていたなごむをじつと見ていたサルの顔が真っ赤になっていた。

言われて、怒ったようにサルが睨む。

「いや、あのな、一応オレ今女として十五年ほど肉体的には生きているわけよ。少しは察したりしないのか？ なごむも女だったことがあるわけだし」

「自分は前から気にしてなかつたでしょ。一緒にお風呂入つてたじやん。 あー、でもそつか、あつちでは九才の男の子だつたけど、おシオはこつちだと女の子として十五年分生きているんだもんね。

……思春期か

「ほんと察しるよ。殴んど。 気にしなかつたなごむ姉ちゃんがおかしかつたんだ」

「え、じゃああつちでも気にしてたんだ？」

ふふつ、となごむはサルに含み笑いを向ける。挑発のつもりなんか、女性的な笑い方だ。下着一枚で男がやつていい笑い方ではない。サルはとりあえず「きめえ」と吐き捨て、嫌悪も露わに視線を逸らす。

なごむは見た目絶世の美少女から向けられた侮蔑の感情に崩れ落ちた。それがちょっと楽しかったことは彼だけの内緒であったが、しつかりサルはその感情に気付いていた。

そんなお遊びも終え、なごむが服を着ると空になつたカップにまた紅茶を注ぎ、砂糖に生姜やクリームを入れていく。もちろん、サルのカップにも一緒にだ。

「ところで、これからどうするの？」

シナモンをかけながらなごむが訊く。

「あー、すぐに麻帆良を出るつもりだ。手段は変わっちまつたが、ここに来た目的の延命はなごむのお陰で果たせたからな。今後の予定としては……そうだな、MMの元老院とか、オレに悪意向けたヤツらにとりあえずお礼参りしとくかなあ。放つておくのも負けたみたいで癪だし」

「じゃあここにいたらいじちゃん。どうせ行くところないんでしょ？」「そういうわけにもいかねえだろ。なごむは問題ないだろ？けど、麻帆良にオレがいたら何かの拍子にオレのことバレかねーい。っていうかオレお尋ね者だし。そんでオレからなごむへ、なごむから家族や友人へつて、迷惑かけちまうかもしねえ」

「それなら心配いらないよ。予知とかはしてないけど、さつきのこの世界の話から考えるに、このままいけば家族と友人が巻き込まれるの確定しているから。まあ嫌々じゃなければ巻き込まれる当人達にそこは任せるとして、この状況を上手く使えばおシオの報復も嫌疑解消とともに全部一辺にできるでしょ？だから介入してみたらどうかなつて。できれば頼みたいこともあるしね」

サラダせんを頬張っていたサルの頬袋が動きを止め、彼女は眉根を寄せた。次にはそれをさつさと噛み砕きのみ込んで、さらに眉を

聾める。

「いや、まあ、嫌疑とかはわかるとして、でも巻き込まれるってそれ、どうこう」とだよ。まだなごむの」と麻帆良にバレてないんだろ? なごむなら隠匿可能だらうが

「あー、あのね」

なごむはきつくなつたサルの視線に手を振り、受け流す。

「自分ね、数度しか会つたことないけど姉がいるんだ。父の再婚相手の連れ子で、生まれが早かつたから便宜上の姉だけど、同じ学年なんだ」

「まで。ん? なごむつて今いくつ?」

「十四。麻帆良男子中二年」

「……名字は?」

「富崎」

「……マジかよ」

サルが眉間に指をあて、揉んだ。彼女にとつてそれは非常に思い当たるものがある名字であった。

頷いたなごむが説明を続ける。

「義理の姉の名前はのどかさん。西崎のどか、ていうんだ」

「では私は案内してきますね。失礼しました」

女子中等部教員源しづなの声を後に、学園長室の扉が閉まる。それを合図に室内に残された一人が視線を合わせた。

「どうかね、タカミチ君」

先ほどまで散々念話でも話し合つた内容を改めて問う麻帆良学園長近衛近右衛門に、女子中等部教員にして学園の裏のN.O.・2、タカミチ・T・高畑は近右衛門の前面、机の上に置かれた一枚の履歴書に視線の先を変える。

「幾分やんちゃなようですが、特別不自然な点はなかつたかと思います。ただ……」「ほつ？ ただ？」

□「もつたタカミチを近右衛門は促す。

「……どこかで会つたことがある気がしましたね」
「……裏かどうかは？」
「すみません。そこまでは……」

ふむ。と近右衛門が頷いた。その様子を察するに、大して気にしてはいないのだろう。

「そうか。他人のそら似ということもあるから。儂の方でも読心をしてみたのじゃが、気の強い性格じゃというだけで不審な点は見つからんかった。しかし」

近右衛門の視線もまた、履歴書に移る。

左上部の『めどき目時詩緒』と記載された名前欄。

そしてその隣には黒髪黒目の美しい少女の顔写真がある。本当に美しい人の顔は左右線対称であるという雑学通りに、写真の主たる少女もまた、そのまま中心で半分に折れば線対称を証明できそうなほど完璧な顔立ちであった。

だがその下、履歴書の保護者欄や世帯主欄には名前が載つていなし。それらに関する事情や連絡先は全て一枚目の下になっていた二枚目、近右衛門が一枚目を捲つた先にまとめて記載されていた。

「孤児……のう。両親を数ヶ月前に海外での事故で亡くし、本人もその事故のショックで一部記憶障害とは……。身元引受人がおらず、年齢的な問題もあり孤児院にかたちだけ入り身元を立て、現在は両親の保険金で一人暮らし中。そして奨学金を頼りに麻帆良へ。一般人としてはなかなか壮絶じやの……。しかも調べてみると、その出自は東北の古い呪術の血脉に連なる最後の者であつたと。これは、保護せねば（・・・・・）なるまいの」

「両親の代からすでに魔法関連は伝えられていなかつたようですか、本人は血筋どころか裏のこともまったく知らないみたいですね。魔力量も多少多いぐらいで一般人とそう変わりありませんし、魔法的覚醒もまだなようですから」

「まさかこの経験とこのタイミングで転入希望とは、なにか運命的なものを感じるの」

「彼が来る前に彼女の身辺を整えておきましょう。入寮に関する問題もありますし」

「そのつもりじゃ。その為の早期転入受け入れじゃからの。早くあのクラスに慣れてもうひとつしよつ。期待数は多い方がいいことじやしな」

「元気がいいですかね。2 Aは」

「ほつほつ。ではしづな君の案内が終わり次第、教室まで頼んだぞい、タカミチ君」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは溜め息を吐く。

彼女は今日も今日とて望まぬ籠の中の生活を送らねばならず、一人隅で頬杖をつき、籠の中を眺めていた。

朝日を反射し金に輝く髪。鬱屈とした現状に憂いを込める青い瞳。血が足りていないのでは思わせる白く透き通った肌。可憐な薔薇のつぼみを思わせる紅のくちびる。物語の中から抜け出してきた深窓の令嬢や囚われのお姫様もかくやなその姿に、だが目を奪われる者はいない。

ここは麻帆良女子中等部2 A教室内。すでにそこに集まつたクラスマイト達はそんなエヴァンジェリンの姿など、とうに見慣れているからだ。

十かそこらにしか見えない体躯の彼女の身分は麻帆良女子中等部二年生であり、この中等部に通い始めて十五年ほど経つ歴戦の中学生である。

十五。それは日本では一般的に中学三年生か高校一年生の年齢だ。それと同じ年数を中学生として過ごしているという事実に、エヴァンジェリンは飽いていた。十五年前と変わらぬ姿のまま。

ここに通い始めたころに生まれた少女達と共に一つの教室にまとめられた彼女の正体は、真祖の吸血鬼と呼ばれる本物のおどぎ話の存在である。すでにその齢は六百年を超えており、世界最古の吸血鬼の一人にして、最強の魔法使いの一人であった。

であった、のだ。

現状はこの麻帆良の地に封印され、『登校地獄』なる呪いをかけられた、不老の少女にすぎない。魔法の元となる自身の魔力は粗方封印されて使えず、不死性も失われ、呪いのせいで中学生活から十五年も抜け出せずにある。その間に出来た友もなにもかも、中学を卒業すると同時に彼女の事を魔法効果で忘れて進級していき、彼女はまた一人中学校に通い出す。そんな十五年である。如何に永きを生きた彼女といえど、飽きない方がどうかしているというものだ。

そのため学校生活以外の点で些細な楽しみを見つけてはそれに一喜一憂するのが彼女の常になっていたのだが、二ヶ月ほど前に見つけた『楽しみ』の前兆も最近は息を潜めているのか、度々感じとつていた魔力反応を感じなくなっていた。

（活動範囲を私の森付近から外しただけかもしけんが、何もないのは少々面白くないな。ジジイが言っていたアレが来るのもまだ少しだ。その前の暇潰しになると思っていたが、このまま消えてしまうのか。……それともアレに関連して仕掛けてくるのか）

エヴァンジェリンが騒がしいクラスメイトの一団に視線を向ける。複数人の女子生徒があと数日で冬休みというタイミングでやつてくる転校生について噂をしていた。

ただこの手の情報に一番早い麻帆良のパパラッチこと朝倉和美といふ生徒でも、その転校生の素性は知らないらしい。

（転校生か。ジジイからは聞いていないな）

彼女の視線の先で、教室前の扉が開く。

現れたのは灰白スーツに眼鏡の男性教諭、タカミチ・T・高畠で

ある。

イタズラ好きの鳴滝姉妹などによつて仕掛けられた黒板消しのトラップやその他諸々を回避しながら、タカミチはいつも通りの朝礼を済まし、転校生を教室へ迎えられた。

いつもは何事にも無関心であるエヴァンジエリンが珍しく転校生に興味を示し、追つっていく視界の端で、眼鏡をかけた生徒が一人、溜め息を吐いていた。

なんだかわからぬ「1・2話」を読まぬ「3話」を読んで3話から読んだ方がわからぬ

1・2話で出していなかつた設定等も尽量に含みます。

タイトルにあんなこと書いてますが、これでもきっと分かり難いのは確定的に明らか。

なんだかわかりづらい・2話を読まずにこれを見た人がわからぬ

主人公ズ紹介

目時詩緒・メトキシオ（サル・スプリングフィールド）

♪・ι 3 2 3 6 8 — 4 0 7 5 ♪

一人称『オレ』

ネギ・スプリングフィールドの双子の妹。一般的な魔法使いよりも魔力も気も同等か若干少ないくらいで、その上精霊の加護を極端に受けにくい体质だったため、おちこぼれと呼ばれ蔑まれている。転生者であり、前世は九歳の男の子であった。精霊がいない世界からの直接転生だったことが精霊の加護が得にくい原因であると思われる。

原作知識を多少保有（この世界がマンガにあつた世界であること）を自覚・及び主要登場人物を認識と、多少のイベント知識）。容姿は母アリカによく似ているが髪をショートにしており、村襲撃事件で右目を石化されたため顔の三分の一を覆う眼帯をしている。なごむに特性眼帯をもつてからは黒髪黒目。眼帯も事象変異で普通の目になつている。母親似の見た目を邪魔に思つており、髪型などをわざと左右非対称にするなどして似ないよう苦慮している。口が悪く乱暴な男言葉で話す。以前の世界にいた幼馴染みの近所のなごむ姉ちゃんを非常に懐かしく感じており、現在の親族や村の人間を自分のホームだとは考えていない。ただ最初に生み、育ててくれた恩はあると考へている。

前世世界から『ステータス』と呼んでいる特殊な能力を持つており、こちらの世界でもそのまま継承している。

体術の才能はあるがネギほどでもなく、兄より優れているのは魔力や気の操作技量、知識量、思考能力、単純な意志力である。ただし操作技量は努力の賜物であり、才能も本来のものであればこれもネギより劣る。右目に宿した永久石化の呪いを反転制御し、永久塩化の触媒にしている。ただし制御の為に自身の命を削つており、使う度に寿命が減っていくという反動がある。

転生や生まれ持った能力のせいで妙に聰く、子どもらしいネギとは対照的なその在り方や母似の容姿に隠し村の人間が怯えていたことを自覚しており、村襲撃事件以降ネカネとの仲はぎくしゃくとして、アーニャとの仲は悪化の一途を辿った。

魔法学校入学と同時に自身の魔法の才と大人に褒めそやされたことを覚えたネギの言葉により、彼をどうでもいい存在として見るようになる。それ以外にも片目を石化されたままのサルがすぐ側にいるのにも関わらず、その才能を治療魔法などに微塵も向けようとしなかつた点も、サルにとつて彼を家族として見る視点を失わせる要因となっている。

メリディアナ魔法学校地下に石化した村人達が補完されていることは知っているが、治療ができないのではなくしない可能性を加味し、彼らの治療を積極的に行う気はない。

自身や本当にに入った人間などの安全を優先する。

魔法学校時代に複数の友人を持つも、サルを狙い派遣された殺し屋によつて全員殺されており、復讐後行方をくらますこととなる。

その際公式には（存在自体が元々秘匿対象であったが）死亡したことになつてゐる。

それ以降追つ手から逃れ生き残るために自分の体感時間を二倍ほどに増加させて生活しており、原作開始時点で十五~六歳相当の肉体年齢となつてゐる。これもまた自身の命を削つて行つており、体感時間以上に寿命を消費していたため、原作開始少し前に寿命が尽きて死にかけていたところをなごむに助けられることとなつた。

逃亡中は正体不明の高額賞金首として有名になつており、『塩害

『白化碎人』、『穢れた塩竈』、『白銅の鼎』などの異名で呼ばれていた。

正体不明であつたのは賞金首にも関わらずなぜか本名や顔写真等は出回らなかつたためで、その特徴である白金の髪と緑の左目、右の眼帯の少女だということと、固有技能『永久塩化』の魔法のみが情報として出回っていた。原作開始時点での『塩害』の賞金額は百万ドル。三年前の登録時点で賞金額が三十万ドルとなつており、依頼達成項目も生死問わずではなく、残つた遺体及び遺品の全回収となつていた。

『ステータス』

詩緒ザルが前世から持つていた能力。

一定範囲内（半径50Mほど）の情報を知覚する能力で、人間を見た際にその人物が持つ能力や現在の感情などを知ることが出来る。また自分自身のステータスを改変することもでき、発達習熟した自分自身の身体能力やスキルを下げることで下げた分の能力値を他の才能に割り振り、強化することが出来る。

正確には『情報統合利用化能力』といい、能力範囲内の存在を情報として捉えて知覚処理し、自身も一つの情報体として捉えることで内在するエネルギーを任意に書き換え出力する能力。

例

魔力量100を魔力量50まで下げ、
余剰分となつた50の数値を、
気量100に足して気量150にする。

他に、存在しない才能なども大量に能力値を割り振ることで無理矢理生み出すことも出来る。生み出すために必要な能力値は、本来持つている才能との関連性や習熟度合いから決まる。故に元から才能がない分野はその分だけ大量に能力値が必要になる。

例

魔力量100を魔力量50にまで下げ、

余剰分となつた50の数値を能力開発で光属性の才能に割り振り、光属性の才能1が生まれる。

能力値は詩緒が生まれ持つたものや努力によつて習熟したものに限り割り振り可能となつており、スキルを下げて余剩能力値にするのも先天性や習熟したものに限る。

努力によつて各種能力値は上昇するが、一度努力で習熟した数値はその上昇した数値状態からしか増えることはない。

例

努力によつて得た剣術スキル100を剣術スキル1にまで下げ、素振りをし続けても剣術スキル1のまま。

剣術スキル100に戻し、

剣術スキル100に見合つた鍛錬をすることで上昇を始める。

『永久塩化』

村襲撃時に受けた右眼の永久石化の呪いを詩緒がステータスを使い命を削ることで制御、反転させて『祓う』意味を持つ塩化にさせたもの。

ステータスの能力と連動させることでヘルマンを超える制御性を有しており、ビームなどとして撃ち出すまでもなくステータスの能カ圈内の物体を任意に塩化させることができる。使用された箇所には強い光が走り、塩化する。ただし使用の度に寿命を削るために、逃亡中の奥の手だった。

『体感時間三倍』

これも自身の命を削ることでステータスで作り上げた能力。

精神と肉体の体感時間を三倍に引き上げ、異様な基礎知覚能力を得ることができる。筋力などは変わらない。肉体の体感時間も三倍のためお腹が減るのも三倍速。成長も三倍速。声も三倍速。詩緒が

そのまま喋ると声が超高音高速になり、他人の声は超低音低速で聞こえるため、普通に聞こえるように慣れまるまで苦労した。その上でステータス内に『三分一速发声』『二倍速聞き取り』なるスキルが発生した。

『エンカウンター』

登録した人物にその内会えるだけの能力。

前世ではぐれた『なごむ姉ちゃん』を捜すために作り出した。作つて発動した直後で記憶が途切れおり、気付いたときには転生していた。詩緒が本当に会いたいと願つた人物しか登録できないため、ほとんど死にアビリティ状態であつた。だがこの能力となごむが得た『時空間』と『可能性』の能力の影響により、転生したと詩緒は解釈している。

『不老不死』

なごむに助けられた際に気付いたら得ていた特性。

吸血鬼などが持つ不死性とは別種のもの。

『眼帯』

幾つかの事象変異と多胞体術式が仕込まれたなごむお手製眼帯。失われた右眼の機能回復と髪色や光彩色の変更を事象変異で行い、同列で右眼の呪いそのものは残しているため永久塩化なども使用可能となつている。

付けていても蒸れないどころか事象変異でその部分の肌も右眼も存在していることになつており、むしろ眼帯の存在が在るようない状態となつているため、付けたまま生活可能。解除や内包された多胞体術式使用は詩緒の意志一つの便利アイテム。

宮崎なごむ・ミヤザキナゴム

♪・△・3・2・3・6・6 — 4・0・7・5 ♪

一人称『自分』

田時詩緒にとつての前世の『なごむ姉ちゃん』。こちらの世界では男として生まれた。転生者とは少々事情が異なる。

原作開始四ヶ月ほど前に『魂繫ぎの儀』『妖精環の縁』『i-fの未完詩篇』『神々の例え話』などと呼ばれる特殊な儀式魔法に巻き込まれ、この世界以外の全ての平行世界から『なごむ』の存在が失われると同時に事実上の現人神となつた。

一年ほど前に父が婿入り再婚し、麻帆良学園女子中等部2 Aの宮崎のどかと同学年ながら義理の姉弟となつた。旧姓は岩崎。麻帆良学園男子中等部2 B所属。やせ形体型の黒髪黒目。前髪が少々長めで目が男の割に大きいが、美形というほどでもなく顔の印象が薄い。だがどこか妙にちぐはぐな空気を纏ついているためか、一度会えば名前と雰囲気を覚えられるという変な特徴がある。

原作知識はなし。なんとなくそんな漫画があつたよね程度。お菓子作りや絵を描くことを趣味としており、認識阻害結界年内では成績がトップスリーに位置している。

先天的に『信受』と詩緒が呼ぶ能力を有しており、認識阻害結界などが効かないという特徴を持つ。『なごむ姉ちゃん』も同様の能力を持つていた。

宮崎なごむ本人の魔力量、気量はともに少なく、体術の才能ももつていない。ただし後天的に得た力によつて超常の存在となつた。

『信受』

仏教用語。るべき答え以外の「誤魔化しは効かなく」なり、その「答えを受け入れる」ことができる能力。

なにを答えとするかも曖昧な非常に不安定で取り扱いに困る能力だが、物事に対する習熟速度や理解速度をある程度向上させる効果を持ち、嘘も効かなくなる。

また、認識阻害結界などに代表される脳機能阻害や知覚阻害を起こす魔法、薬品、催眠術などが効かない。記憶操作も効かないが、脳細胞を殺す類の記憶消去は有効。

『事象変異』

『魂繋ぎの儀』により得た固有能力。

『魂繋ぎの儀』の結果、全ての平行世界中に存在する『なごむ』達が存在した可能性をなごむが『信受』で受け入れ、吸収したことにより、この世界のなごむに統一されて生まれた能力。

なごむに内在している他世界の『そうであつたかもしれない』事象の可能性を利用することにより、過程を無視して結果のみを出力することができる。これにより存在しないはずのものを生み出したり、ありえない事象を起こしたり、消失したものを再生することが出来るようになった。

なごむの存在そのものが事象変異であるため、彼を傷付けても全自动でなかつたことにされる。なごむや詩緒の『不老不死』はこの能力に起因している。

『神の顯現』の現人神化により能力制限がされており、事象変異は局所的なものに限定されている。

それでもこの能力で大概のことはできるが、なごむ本人はこの能力を応用して作り出した多胞体術式で行動することの方が多い。

『神の顯現』テオファニー

ピエール・クロソウスキーが提唱した神の表現方法。

超常の存在である神を人間が知覚できるはずがないという思想から生まれた考え方。その神を神話上の姿として人間が捉えられるのは人間がそのように神を解釈し、神自身が人間が思うとおりの存在たるうとした結果であるとした。

目に見えない神を現人神として顕現させる方法。

無限に等しい『なごむ』達と統合したことにより神に等しい存在になつたなごむが宮崎なごむで居続けているのは、詩緒を初めとしたどこかの誰かが人の形としての宮崎なごむの存在を願つているからである。

なごむの行動指針もその願いに起因している。

だが詩緒が知つていたのは『なごむ姉ちゃん』であり、この世界のなごむを誰が願つたのかは不明。

『予知』

本来『魂繫ぎの儀』で得られるはずであった能力。完全な形での予知であり、ほぼ百パーーセントの的中率を誇る。はずであつた。

『信受』によりこの世界にしかなごむが存在しないことになつてしまつたため、すでに近似値を計る対象がなくなり不完全化している。

さらに『神の顯現』で制限されており、限定されている。

『他世界知識』

他のなごむとしての知識。この中にはネギま！の知識も含まれているが、なごむ本人はネギま！知識を使う気があまりない。いいところ多少の人物知識だけある。使わない理由は『予知』と同じでこの世界にしかなごむが存在しないため、すでに事象が大きく異なっているためである。

だが必要とあらば他の技術知識などを使うことに躊躇いはない。

『神力』

他世界での『なごむ』が持ちえた全ての力を扱うことが出来る。魔力量や気量もなどその『なごむ』達を足した量に準拠するかたちになるため、ほぼ無限大の魔力などを扱うことが出来る。戦闘技術などもそのまま継承されている。

『神の顯現』で大きく制限されており、魔力などのエネルギー関係はエヴァンジェリン達よりも少ないくらいまでしか出せない。

『天才』

超鈴音とは別種の天才。超が論理思考の末に行き着く天才であるならば、なごむは直感が行き着く先の天才といえる。

思いつきで他世界知識を流用しないまま四次元体としての多胞体術式を独自に構築するほどぶつとんديる。普通の人間の脳ではまったく理解が出来ない域。理解出来ても意味がわからない。

『魂繋ぎの儀』前からなごむの頭は良い方であつたが、天才といふほどでもなかつた。だがそれは記憶消去の弊害もあつたうえで頭が良いというレベルに甘んじていたのであり、『魂繋ぎの儀』により消去された記憶部分や脳細胞部分を事象変異で再生、さらに時間パスの影響で思考そのものが上位次元化したため後天的な天才となつた。

『多胞体術式・魔法』

なごむが考案した特殊な術式及び魔法。

基盤となつているのはなごむの体に刻まれた時空間パス。

四次元以上の構造体による魔法式を組むことにより、三次元的な限界を超えた魔法を行使することが出来る。なごむ固有である事象変異の一部をこれを使うことで詩緒やエヴァにも再現可能にした。主なものは転移魔法や結界・障壁魔法、またはそれらを応用した幻覚魔法などであり、完全な攻撃用のものはなごむが構築していない

ため存在しない。

精靈式や詠唱式魔法ではないため、なごむ以外の人物が行使するには事前にこの術式を組み込んだにかしらの道具が必要となる。

精靈への魔力譲渡もなく、使用時の魔力をほぼ完全に消費して発動するため、ほとんど魔力反応がでない。また少量の魔力で発動可能であり、逆に使用時に込める魔力量が非常にシビアなため込めすぎると発動しない。使用には高い魔力操作技術が必要になる。

自身の本当の力を隠すため、なごむは事象変異よりもこちらの術式を使うことの方が多い。

「 つつかれたああ」

どさつ、と詩緒は公園のベンチに腰かけ、だらりと四肢を投げ出した。

首にまわした白いマフラーがふわりと一瞬浮かんで、ぱたりと主同様にだれる。頭はだれすぎてベンチの背もたれを通り過ぎ、逆さまに後ろを向いていた。大股開きの脚は厚手の黒ストッキングに覆われているが今にもその先が見えそうだ。

サル・スプリングフィールド改め、日時詩緒。それが今の彼女だ。初日の授業を終え、2 Aによる歓迎会という名に託けたバカ騒ぎも終えて、一人アパートまでの道を辿っている途中で一休みである。安いところが少々遠くにしかなかつたのだ。

諸々の事情からあのクラスに潜入することとなり、幾つもの小細工を使って正式に麻帆良女子中2 Aに入るまでに一ヶ月を要してしまっていた。危うく『彼』が来るのが先になるか同時になるかといふところであつたが、なんとかなつた。なごむに認識改変でもしてもらえば楽だつたろうが、そこまでやる必要はないし、やれることは自分でやつておきたかった。それにあまり人の記憶をいじるのは好きじゃない。なごむも『例の件』で記憶を消す等の処置に対してもだけは非常にシビアだ。故になるべく魔法を使いない範囲内に収めて、小細工に小細工を重ねた。主に住民票偽造とか、犯罪行為で記憶をいじると詐称などの犯罪とどちらに軽重を置くかは、詩緒の感性として詐称の方が軽かつた。それだけだ。

都合良く廃れた呪の血に連なる一家が海外で亡くなつていたのは、

本人達には悪いが運が良かつた。名前も詩緒であつたあたり、なんとなくだが彼女がこの世界本来のおシオだつたのかもしれないと思は思つていた。

戸籍を入れた後は多少の偽造だけで近右衛門達は詩緒を2Aにあつさりと入れてしまつた。それほどまでにあそこに関係者を纏めてしまつたかつたであろうことが窺い知れる。

しっかりと手順を踏めば、魔法を用いない方がここに住む魔法使いの大半にはバレにくい。認識阻害結界に染まり、魔法を信望するあまり万能だと勘違いし、読心すらも予想していれば多少の技術でどうにかなることを彼らは知らないからだ。そしてここではまともに警察機構が機能していないため、詐称などからなる犯罪群が判明しにくいという場面が多々あつた。

さすがに現段階で意図や正体まで彼らにバレるのは面白くなかつたので、今回の近右衛門達に限つては普通に魔法で対処したが。

(……アルビレオ・イマは出しゃばっては来なかつたが、いつかは接触することになるだろうな。まあ、こいつの前じゃあ意味ないだろうが)

だれた頭を起こし、顔の右半分を撫でる。手の触覚が訴えるのはしつかりとそこにある肌と、眉毛や睫毛、右目の感触。存在しないはずの視覚すらある。

そこにはその魔法を理解している詩緒本人すら騙す特殊な魔法が仕込まれた、なごむ特製の眼帯があつた。これによつていくつかの魔法や特殊技能を無効化し、髪や瞳などの色を変えていた。

これの効果により心を読んでも過去を読んでもその事象を改変される。認識阻害などといつ生半可なものではなく、局所的な事象変異なのだ。時空間や可能性といつもの操るなごむだからこそ出来る芸当であった。この魔法具自体の魔力反応も精靈を介さないこと

やなごむによる効率化によつて誤魔化されており、気付ける者は極一部だけであろう。気付けても魔力にだけで、事象変異まで至つた認識改变は変わらない。この魔法が発動している限りどう足搔いてもそこにあるといつては存在するのだから、それ専用の魔眼や特殊な才能の類でもない限りは看破不可能となる。

ただ、逆を言えば気付く者は気付くわけだが。

（十中八九、エヴァンジエリンと龍宮真名は気付いていたな。両者ともおそらくは魔力に気付いただけで、効果に関してはまだだろうが。あーそれにしても）

姿こそ隠しているものの、複数の視線が詩緒に向かっていた。それら全て彼女にはステータスの副次効果で完全にバレていたが、気付かないフリをし続けている。

これらの内二つはエヴァンジエリンと龍宮で、エヴァンジエリンの近くには従者の絡繰茶々丸が、龍宮の近くには彼女の友人で警戒心が強すぎる桜咲刹那がいる。

そして何もないように見える中空、そこには可視光ステルス機能付飛行型の小型カメラが飛んでいた。十中八九、未来人ことクラスメイトの超鈴音^{チヤオナンショウ}の刺客だろう。

他には学園長の遠見の魔法や、薄ら寒いことに完全に覗き目的の魔法使いもいるようである。いや、学園長も似たようなものであつたが。

ステータスはそこにある情報を詩緒に与える。ゆえに如何に姿を消そうと変えようと、その存在定義自体をえてしまわないことは詩緒から隠れるのは不可能であつた。さらにいえば情報に量の差はあれど大小は関係なく、知覚範囲にさえ入ればその精度に距離は関係ない。ゆえに効果範囲内は全てが一目瞭然なのだ。そこに無機も有機も関係ない。見ようと思えば幽霊の情報をすら得られるのだから

ら、この能力から逃れられるものはほとんどないだろ」といえた。感情ですら感情値として詩緒に認識され、考へていることの一端を伝えてしまつ。

(あー、桜咲やべえな。メチャクチャピリピリしてんじやん。こりや龍宮のヤツ、あつさりオレの右眼の魔力教えたな。あんまり教える必要のないことだろに、無駄に危機感煽つてバカじやねえの。それともなんだかんだで友には甘いのか？ つうか傭兵として腕が良くても、そこかしこに年相応なところがあるな。エヴァンジエリンは逆に楽しんでるな。事前にオレのこと察知していたとか？まあ学園長の認識のたるみ具合から考えて、どちらも上にオレのことを教えたわけではなさそうか。超は……ま、いつかはあれとしで、放置で良いか。唯一危機管理なつてそうだし。睨まれている側だから無茶な介入はしてこないだろ)

一つあぐびをして、近くの自販機からホットの缶紅茶を一本購入すると再び帰り道を行く。

(何事もなければそのまま過ごすつもりだつたけど、やっぱそもそもいかねえか。桜咲をスルーするための言い訳には……)

「ねえねえそこのキミ、こんな時間に一人でうろついてたらダメだよ。見かけない子だけど、転人生？ 寮まで送つてあげようか？」

つらつらと思考に没頭していた詩緒に、若い男が声をかけてきた。

「ん？ ナンパ？」

男は三人。それなりに身形は整つており、粗野な感じはない。麻帆良大学部の生徒かなにかだろ。一人は胸になにやらプレートを

付けていた。

「やうそろナンパですよつて違つから」

「三人で遊んでたんだけどさすがに虚しくなつてさ。その制服麻帆良女子中でしょ？ 帰りは寮まで車で送つてあげるからさあ、一緒に遊ばない？」

「いやだから違うから。俺達そういうんじゃないから。つうかビックリするくらい綺麗な子だけど中学生相手はマジ犯罪だし、ロリコンじやないから」

声をかけてきたのとは別の一人がテキトウな感じに掛け合つ。いつもこのような会話をしているのだろう。それぞれの役割がこの時点ではつきりしていた。

「ああ、警戒しなくてもいいよ。俺こいつ者だから」

そういうって、最初に声をかけてきた一人がプレートが見やすいよう近寄る。そこには広域指導員の文字が描かれていた。結界の仕様上、警察機構が上手く働かないことが多い麻帆良の治安維持をするためにある組織の構成員の名称だ。大半は魔法関係者で構成されており、一部に一般人も混じっている組織だが、どうやら彼らは魔法使い側の人間のらしい。多少の魔力が感じられた。

だが詩緒はまだここに来て浅く、調べたことがあったので知識としては知っているが、誰からも彼らの存在を聞いたことがなかつた。ゆえに、

「広域指導員？」

と知らないフリをすることにした。先ほどからずっと監視の目は続いているのだ。下手な手は打たないに限る。

「ありや、知らない？一応読んで字の如くなんだけど」

「オレここに来てまだ浅いんだよ。でも指導員つてことは学園関係者なのか？」

「そうそう。のみ込み早いね。というわけで女の子が一人夜道を歩いていたら声をかけなきやいけない、怪しい身分なのさ。あんまり遅くだと指導員として強制連行しちゃうよ~」

詩緒の言葉づかいに若干引いた様子を見せながらも、おどけながら男は説明する。

ふうんと詩緒は頷くも、内心はめんどくさいの一言で埋まつていた。

住居が寮ではないことを言つてそこまで送ると言われれば、断るのは難しい。ここは麻帆良だ。強力な認識阻害結界が施されており、気付かない内に『変』に思う気持ち、いわゆる違和感を感じとする能力が著しく低下している。それは同時に危機感にも影響するのだ。そんな中で守護者の立場であると語る彼らにまで危機感を抱き断れば、魔法抵抗力を疑われかねない。

かといって、いくら詩緒でも知らない男にそういうと家を教える気にはなれるはずもない。

なにより先ほどから非常に臭うのだ。彼らの内にある下卑た喜びが見え隠れしているのが、ステータスに頼るまでもなく詩緒にはわかつた。

第一、ありえないことに声をかけてくる少し前に詩緒を巻き込むかたちで彼らは人払いの結界を張つていた。最初はつきり桜咲達が接触してくるために張ったのかとも思つたが、関西出身で魔法が得意ではないはずの彼女なら人払いは簡易な呪符式を使うはずだ。これは西洋魔法の人払いであることから、少なくとも桜咲のものではない。

(……この様子だと、部屋教えたら押し込んできそうだな。その前にどこかに連れ込まれるか。つうかここでのつもりか？ つたぐだから嫌なんだよこの顔。やっぱ顔」と認識改変してもらえば良かつたな)

手際の良さからみてこういったことに慣れているのだろう。一般人相手であれば記憶消去の魔法で簡単に事実はもみ消せる。そこに来て警戒の強い寮周辺ではないエリアを、魔法関係者でもない詩緒が一人で夜出歩いていれば、格好の標的であった。

(「こにいる魔法使いつて一応『立派な魔法使い』とやらを田指しているヤツらなんだよな？ こんなのを広域指導員にしているとか、犯罪者の巣窟としか思えねえよ。 まあ、都合良いか。利用してやる）

内心の愚痴も嘲笑も表には出さない。

それに詩緒はサル・スプリングフィールドとして一生きていたときから、魔法使い達の醜悪さはよく体験してきている。無知な一般人相手に利己的な正義を振りかざして失敗しても、このような欲望を振りかざしても、彼らには記憶消去がある。本来この魔法を使うには一定以上の役職を持つ上司の許可などが必要なのだが、結局消してしまえば同じなのだ。必要とされる魔力操作が非常に精密なため扱いきるのは困難とされているが、憶えるの自体はそう難しい魔法でもない。記憶障害などの後遺症が気にならないレベルにまで達すれば、その後に残る魔力の残滓も運が悪くない限りそうそうバレることはないのだろう。ゆえにこうして下種な手合いが現れる。

特にここ麻帆良は魔法使いの拠点でありながら一般人にも開放されており、一般人との共同生活によって魔法使い達は彼らに対する万能感を無意識に育んでいる。その感情も上手く機能すれば庇護欲となるが、この男達はその感情が腐つたらこうなるという見本であ

るといった。

魔法使いに限らず、手段と力があれば人間は欲望の趣くままにどこまでも下種になれる。魔法が秘匿されるのはそんな人種を増やすためであり、同時にそれは魔法を秘匿することで公には存在しない強力な力になるという、既得権益を保護するためでもあった。特に認識阻害や記憶操作などの魔法は、一般人にとつて核兵器に勝るとも劣らない脅威であると言える。攻撃魔法など、実際は銃や爆弾で事足りる。簡易にそれら脳機能阻害型の魔法を使えてしまうことこそが、魔法使い達の危険度を現していた。

なにも欲望は汚いことばかりではないが、なにかを救い守ることを求めるそれも欲望であり、誰にかにとつての下種な行動となりうる。守ろうとして巻き込まれたら、たまたまものではないのだ。

そしてそんな保護の下にある麻帆良は一般人にとつて安全な土地とはいえない。むしろその逆、現代日本ではありえないくらいに刃物も銃弾も飛び交い、それらを上回る脅威の魔法や化生が跋扈する魔窟、魔都であつた。

途端に黙り込んでしまつた詩緒に焦れたのか、刻限が迫つていたのか、一人が彼女の腕を掴んで「さあ行こうか」と引っ張り出す。向かう先は彼らの物であろうワンボックスカーだ。

本物かどうか知らないが、どうやら広域指導員のお役目は終了らしい。こらえ性のない男である。

最後に一応、ステータスで彼らの感情を中継して目的を確認してから声をあげる。

想像通りだつたので逆に安心した。

「つちよ！　おい、なにすんだよ！」

こんな雑魚程度、詩緒ならば気も魔力も使わずに叩き伏せる自信があつたが、それをこの場でやるのは少々拙い。

だが好都合な点もあつた。強引な行動にでられたら、いくら認識阻害結界があるうとも一般人も危機感は持つ。だから一般人としてその点に恐怖を感じたから逃げる、という選択肢が取れるようになつたのだ。

そして、そうなれば

「離せ！　このつ、誰か！　助けてくれ！」

詩緒は口が閉じたままの紅茶の缶を、腕を掴む男に投げつける。顔面に熱いスチール缶をぶつけられた男は思わず手を離し、詩緒はその隙を突いて走り出すと同時に、今度は口が開いている方を男達に投げつける。

飛び出す紅茶に怯んだ男達は一瞬足を止めた。

素の身体能力で走り、逃げようとする詩緒。それでも確實に陸上関係からお呼びがかかるレベルであり、このままでは逃げられると思つた一人の男が袖口から魔法発動体となる伸縮警棒の杖を滑り下ろし、魔法を唱えようとして

タンという渴いた音と共に、男の杖が弾かれた。

音の方を見れば銃を構える長身褐色の美（少）女、龍宮真名。

そして残りの男達が驚いている間に走る影。

影はサイドテールにした髪を揺らし、彼らの間を縫うように駆け抜けると、次の瞬間には男達は昏倒してその場に崩れ落ちていた。しかも全員股間を押さえている。きっともう使い物にならなくなっているのだろう。手心を加えた様子はまるでなかつた。むしろ氣で強化していた。

鞘に収めたままの野太刀を竹刀袋に收め、頬にかかつたサイドテールを払うのは桜咲刹那だ。

彼女達もこの状況では助けに出ないわけにはいかなかつたのだ。

もし本当に日時詩緒が一般人であつた場合、彼女達の立場上魔法使いの手で怪我を負わせるわけにも、魔法を見せるわけにもいかないのだから。

如何に魔力が宿る右眼を持つていようと、書類上の血筋を考えればありえなくはないのだ。逆にたつたそれだけで疑い続けて一般人を魔法に引きずり込んだのでは本末転倒である。あの学園長なら進んでやりかねないが、このような方法での裏の確認など例え止められたとしてもこの二人、特に桜咲刹那は許しはしないだろうと踏んでいた。

予定調和でもある突然の出来事に足を止めた詩緒は、事前にステータスを振つておいた演技の才能をフル活用して、彼女達を驚きの表情で見つめた。

「あ、え、えっと……」

そして龍宮の手元、未だ白く尾を引く銃口に視線を定める。

「エアガンだよ」「……そ、そうか」「私は剣道部だ」

説明を求めていないのに桜咲が言つ。

エアガンはあんな硝煙らしきものを吐かないし、剣道部は鞘に収まつたなにかなど持ち歩かないが、そこはスルーするべきなのだと詩緒は知つている。認識阻害にかかるつているフリである。

「えつと、同じクラスの龍宮と桜咲でよかつた、よな？」

ああ、と龍宮。桜咲はわずかに頷くだけ。

「あ、あの、助けてくれてありがとな?」

「なに、気にすることはないさ。彼らは広域指導員の偽物でね。騙る者がいるらしいと前々から問題になっていたんだ」

「あー、じゃあ二人は」

「私達は広域指導員じゃないよ。まあ似たようなバイトをしていてね、今回はそれでここを通りかかったんだ。高畠先生なんかが正式な広域指導員だよ」

似たようなバイトとは夜の保安警備のことだろう。麻帆良は様々事情から魔法に関連した外敵を多く持ち、夜になるとそれらが活性化するため、一部の魔法関係者が外敵退治をしてまわっているのだ。彼女達もそれに参加してたため半分は嘘ではないのだが、今日はずっと詩緒を見張っていたので通りがかつたという点が嘘になる。龍宮が詩緒に説明をする横で、桜咲が携帯をたたんだ。念話を誤魔化すためのフリかもしれないが、どこかと通話していたらしい。

「高畠先生が回収に来る

知っている大人の名前が出たことで安堵したように詩緒は息を吐き、その場に座り込んでしまう。

「そつか。あー、なんにせよ助かつた。改めてありがとう。ところでそいつら生きてるの?」

「安心しろ、峰打ちだ」

鞄でアレを殴ったのだから峰打ちも何もないのだが、リアルで言つてみたいセリフベストテン上位に入る一言を素面で言われた詩緒は吹き出した。

桜咲としてはまじめな一言だったのだが、そんな彼女に龍宮も小さく笑みを漏らしていることに気付き、わずかに顔を赤くしながら

眉を顰める。

「立てるかい？」

龍宮が詩緒に手を差し伸べる。

「悪いね」

詩緒も素直にその手を握り、勢いを付けて起き上がった。だが起き上がりながらも龍宮はその手を離さず、じっと詩緒の顔を見つめていた。さらにその手も一ギ一ギと握つてくる。龍宮の手は日頃の鍛錬のせいか所々にマメ痕やタコになっている箇所があり、見た目よりも固い。そして詩緒は手も認識改变の対象としているため、普通の女の子の手だ。そこから探ろうとしても抜かりはない。ただし意図はなんとなく察していくも、そんな龍宮の態度に詩緒は若干腰が引けた姿勢となつた。

「な、なんだよ。お、オレにそんな趣味はないぞ。こんななんでもノーマルだ」

「いやなこ、君の手の色はよく見ると左右で違つのだなと思つてね」

詩緒の左右の手はほとんど同じ黒なのだが、右側の方が光の加減で赤みがかつて見えるのだ。疑われたとき用に入れておいた小細工である。

ゆえに狙い通りそれを指摘され、演技としても実情としても安心した態度になる詩緒。

逆に彼女の視界外では桜咲の警戒度が上がつていたが、そこは気付かないフリである。

「ああ、これが。少し前に事故で右眼をやられてな。角膜移植した

んだよ。そのせこりしー

ちなみに詩緒内裏設定では、角膜の提供者は呪の家系であつた母親ということになつてゐる。聞かれたら答え、それ以上を追及させづらくするための設定だ。

そしてこれを聞いた桜咲の警戒心が一気に下がつたのが、気配だけでもよく伝わってきた。逆になんだか申し訳ないというような気配まで出てくる始末だ。もしかしたら学園長から、事故で両親喪失の話を聞かされていたのかもしれない。

騙している詩緒は微塵も罪悪感を感じていなかつたが、桜咲の評価を多少は改めた。彼女が大好きな『お嬢様』以外にも気は使うらしい、と。

「へえ、じつ言つてはなんだが、綺麗なものだね」

そして龍宮はそんなものをおぐびにもださず言つ。桜咲とは役者が違うようだ。

そうじつしている間に高畠がやつてきた。

「田時君！ 大丈夫だつたかい？」

と言ひながら手を振り、いいおっさんでありながらも爽やかに駆け寄つてくる。それなりに似合つてゐるあたりじつじつシチュエーションをやりなれてそうだ。

お早いお着きは、絡まれたあたりすでに学園長が連絡を寄越してからだらう。

龍宮の手が離れる。

「ああ先生、二人に助けられたから問題ないぜ。缶紅茶一本ダメにしたくらいだ」

「それはよかつた。僕は彼らを引き渡してくるから。一人とも、且時君を頼んで良いかな？」

よくなんかない。これが今回見張られていた詩緒でなければ、そのまま闇に葬り去られていた可能性もあるのだ。一般人にとつてはたまたものではないだろう。おそらくは夜間警備の隙を突いていたのだろうが、彼らの様子からみて初めてのわけもないのだし、むしろこうなるまで捕まつていなかつたあたり最悪といえる。

そしてどこに引き渡してくるのかを言わないあたり、日本国による通常の刑罰執行はないのだろう。あつて魔法世界と呼ばれる別世界にある魔法使いの本国へ強制送還あたりであり、そこから先の刑罰は余罪やらなにやらを考えたら信じられないくらい軽いものになる。いかにもうすでにナニが潰れていようと、罰は本来受けなければならないはずだ。だがそれが麻帆良を統治する魔法使い達の国から見た一般人の価値であり、現実であった。彼らは魔法が使えない一般人が住む世界を旧世界と呼ぶ。そこに含まれた侮蔑に気付かなければいけないはずだ。

「あれ、いいのか？ 一応オレに事情聴取とかしなくて。オレが難癖付けてヤツらを強姦呼ばわりしたのかもとかないの？」

「彼らは広域指導員でもないのにこんなバッヂを付けていたからね、問答無用さ。ああそれと、今回のようなことがないようになると早く早めに寮の部屋を決めておくから。寮周辺やそこまでの道とかは警備が厳重なんだ」

厳重にしなければいけない現状をどうにかした方がいいという考えがどの程度彼らにあるのか、詩緒は疑問に思つも口には出さない。

「それはありがたい。今週中に借りてる部屋の更新しなくちゃいけないんだけど、それまでには？」

「ああ、一、二日中に出来ると思うよ。それじゃあね。あ、真名君と刹那君には用時短を送つてもうつていいかな?」

「わかりました」

「了解。じゃあ行こうか。部屋はこの近くかい?」

「ああ」

運ぶための応援を呼ぶのか、携帯片手に手を振る高畠を後にして三人で詩緒が借りている部屋へ向かう。

「なあ、あんなことあつたし、ぶっちゃけあんたらみたいなバイトがいるつてことは、麻帆良つて治安悪いの? ていうか労働基準法とか、大丈夫なのか?」

基本無口な桜咲は取つつきにくいので、とりあえず龍宮に話しかける詩緒。少々認識阻害から外れる内容となるが、あんなことがあつた後なのだ。危機感の関係で不自然さはない。

「そんなことはないよ。私達は学生自治の一環でね、教師が見回りをしているのもそれなんだ。ここは学園都市だからね。今回の件については、運が悪かつたとしか言えない。あとさつきは身分を説明するためにああ言つたけど、今の時間はただの自主パトロールだよ。まあ身分に託けた夜遊び中や」

もつともうじいことを言つてゐるが、実際には答えになつていな。龍宮もそのことに気付いているらしく多少苦い笑みが混ざつていたが、最後にはおどけてみせてウインクのおまけまで付いてきた。影になつていたが、桜咲は歯ぎしりの音が詩緒にまで聞こえてきそうなほど憎悪に燃えていた。彼女にとつては大切な『お嬢様』が一般人であるため、彼らをこれまで見逃していたことを悔やんでいるのだ。

詩緒はそれ気付きたがらも、ふうと頷くだけに留める。

「それよりも、あんなことがあったのに思つたより落ち着いているね。」
「ああ、こう言つちやなんだけ多少は慣れてるからな。海外生活

していことがあるから、連れ込まれそうになるのは初めてじゃない

その返答に龍宮はそつかの一言で流すが、桜咲はわずかに強張つた表情で見てくる。日本を出たことがない彼女にとつては信じられないのだ。きっと彼女が知る限り、本当に麻帆良はこのような輩は少ないのだろう。

「だから逃げる手際がよかつたのか」

「まあな。一応護身術も習つてたんだぜ。あんたらのアレには敵わないけどな」

「そうかい？」

「そうだろ。特に桜咲のアレ、田で追えなかつたとかどんだけ早えんだよ。一瞬で三人ノしてたじやん」

「刹那はこれでも大学生も混じる麻帆良剣道部でエースなんだよ。すごいだろう？」

「そりやすげえな。大学生よりもとかメチャクチャつえーじやん。つうかマジすげえな」

「こりつ、真名つ

顔を赤らめつつ桜咲が龍宮を叱りつける。

素直に褒められるのはあまり得意ではないらしい。

ククツと龍宮と二人詩緒は笑う。

「あ、もうそろそろ着くけど、一人とも茶ぐらい飲んでくだろ？」

親交も兼ねてよ。つまご菓子もあるんだ

からひとつ携帯で時間を確認する龍宮。

「時間は……まあいいか。私は！」馳走になりたいといふだけだ、刹
那はどうする？

「では、私も」

「かてーなあ桜咲は。顔は癒し系のくせにして」

元が三白眼氣味の龍宮とは違い、桜咲は常に目を眇め氣味にして
いるだけで顔の作り自体にキツさはない。どちらかと云ふと年相応
の可愛らしさいものだ。

「なっ！　あ、あのなあ……」

「ハハツ、桜咲はいじりやすいな」

「クラスでは無口クールで通つてゐるから、あんまりいじると斬られ
るよ」

「そりゃあ怖え」

「斬らん！」

そんな軽口を呴き合ひながら部屋の鍵を開ける。

と、そこですでに鍵が開いていたことに詩緒が気が付いた。

「ありや、開いてんじやん

その一言で眉を顰める龍宮と桜咲。れきほどのなんことがあった
ばかりなのだ。

だが詩緒は気にせず、一人が止める間もなく扉を開けた。

「つあー？」

などと宣いながら出迎えたのは、バスタオルで頭を拭ぐ上半身裸の少年だ。

扉に付いていた表札にはしつかり日時の名があつた。龍宮と桜咲の二人は彼女が一人暮らしで身寄りもないことはすでに知っていたので、不審者の存在に一瞬で警戒態勢に入る。

しかしどうの家主は顔を赤らめてずかずかと部屋に入り、少年の頭を叩いた。

「客来てつから早く服着ろバカ」

「その前に髪乾かしてもらつていい?」

「甘えんな、男だろ、ほつときや乾くだらうが」

「そこ開いていると寒い」

「だから早く着ろよ。つうか自分の部屋で風呂は入れよ。なんでここまで来て入つててつんだ。あ、二人とも中入つてくれ。バカが風邪をひくから。その辺にテキトウに座つてて」

実際にめんどくさそうな表情で、だが甲斐甲斐しく詩緒が少年にシャツを着せる姿に、龍宮は苦笑して、桜咲は呆然としながら言われた通りに動く。

「おシオが寂しいかと思つて。あー、でも友達出来たんだね。初めて、富崎なごむといいます。おシオのことよろしくお願ひしますね」

「ウゼエ保護者かお前は」

「龍宮真名だ」

「あ、桜咲刹那です」

乱暴に髪を拭かれながら一人の手を取り握手をするなごむ。

さすがにこの時期に上半身裸で外気に晒されたのは寒かったのか、

彼は鼻を垂らしきつになりずずつと啜る。

「髪もういいだろ。ほら、かめ」

とティッシュを箱」と渡して、さつままでの甲斐甲斐しさを払拭するように詩緒はなごむに蹴りを入れる。

結構いいのが入った風なのに少年も気にした様子もなく、「ありがとん」と言つて盛大に鼻をかむ。

「なごむ、茶煎ってくれ」

「はいはい。お二人とも紅茶しかないですか?」

「すまないね、ご馳走になるよ」

「え、ええ」

「はいはい」

と湯を沸かしに台所に向かう少年。
それを見送った龍宮が詩緒に問う。

「お邪魔だったかな? 彼、男子中一年の富崎君だよね」

「なごむのこと知つてんのか?」

「絵画コンクールで毎年麻帆良賞だし、男子中の成績トップスリーだからね。それなりに有名なんだよ。知らなかつたのかい?」

その経歴も本当であつたが、実際にはその程度でこの麻帆良では有名とはいえない。龍宮がなごむを知つたのは以前彼が人払いの結界を通過して、夜間の魔法戦闘区域に侵入してしまったことがあつたからであつた。そのときには戦闘も終了しており、すぐに結界も解いたため、ほとんどの者は解いた後に侵入したのだろうと気にしていなかつたのだが、その区域の火器後方支援をしていた龍宮だけは、結界が解かれる前に彼が侵入していたように見えたので調べた

ことがあったのだ。

当時彼女が調べたときは裏との関わりが完全に白であつたうえ、覺醒した魔力を持つてゐるようでもなかつたので、勘違い、もしくは極々稀にいる認識阻害型の結界が効きにくく、体質の者として学院側に連絡し、後のこととは任せたのだった。

事実、それはその通りで間違いはなかつたのだが。

「ああ、そういえばそんなことも言つてたな」

「馴れ初めを聞いても？」

「こつちに始めて来たときにはちょっとあつてな。それ以上は惚氣でいいなら語るぜ？」

「いや、遠慮しておこつか」

夜間、女子の一人部屋で男子が風呂に入つていた。

どのような関係か一目瞭然であり、この年頃であればもつと騒がしくなりそうな話題だというのに、一人のやりとりは少々淡泊なものであった。それでも龍宮は最初上半身裸の彼を見て詩緒が顔を赤くしていたことを見逃しておらず、面白そうに彼女の顔を眺めていた。そのことには詩緒も気付いており、セリフとは裏腹にやりにくそうな苦笑を浮かべていた。

「ところで知つてたかい？ 彼、ウチのクラスの富崎のどかの義弟なんだよ」

その発言に驚いた表情を見せたのは桜咲だ。純粹に知らなかつたのだろう。そして彼女が先ほどから喋つていないのは、詩緒の部屋になごむがいることに多大な衝撃を受けていたからであつた。言つてしまえば今彼女の頭の中は年頃の妄想で埋まっているのである。

「知つてる知つてる。あの前髪長い娘だろ。話には聞いてたからな」

「リサーーチ済みといつわけかい」

「言つてろ」

「はいお茶入ったよ。自分が焼いたものですがクッキーもどうぞ。
なんだつたら晩ご飯も食べていつたらどうです？ 今日はホワイト
シチューですよ」

ひょっこりと顔を出してセザンヌを並べていくな』む。

「いいのかい？」

「真名一」

「刹那、この紅茶もクッキーも美味しいよ。晩ご飯は期待できやう
だ」

「図々しいにもほどがあるだらうー。『ひにひの場面はな……』

「桜咲、気にすることはないぞ」

「ほら、田時もそう言つてているじゃないか」

「そ、そうなのか？ いや、だがな……」

「うん。自分はもう帰るので、おシオの『ひとよひじへお願ひします
ね。おシオ、多めに作つたから、ちやんと食べなよ。パンも焼いて
おいたから。あんまりクッキーでお腹膨らましちゃダメだからね
あれ、帰つちまつのか？』

「うん。ちょっとこの間話してたところ行つてくる」

「あ？ あーあー。わかつた」

「おや？ 帰つてしまつのかい」

「ええ、ちょっと」

なごむがその手に下げた袋を少しだけ上げてみせる。今の話やそ
の重量感と角ばり方から見て、タッパに詰め込まれたシチューなど
のようだ。他に届ける人物がいるということだらう。

「大変だね」

「好きでやつてこるので苦じやないですよ。それじゃあ、また「あ、なごむ」

ちょいちょいと手招きする詩緒の元へなごむが寄ると、彼女は彼に何事かを耳打ちする。彼をそれを聞いて頷き、二人で笑い合い、ちゅつ、と音をたてて詩緒がなごむの耳元へ口づけした。

それを見ていた桜咲はぼつと一瞬で真っ赤に染まり、龍宮は耳打ちしたあたりすでに視線を逸らしている。

なごむも少々驚いた表情をしたあとわずかに頬を紅潮させて微笑み、じゃあねと手を振りながら退室していった。

当然のように残つた龍宮と、赤いまま固まつていた桜咲。詩緒は手を振るだけで見送ることもせず、早速シチューを盛り始めていた。龍宮は紅茶を啜りながら、田時詩緒は見られるのは嫌だけど見せつけるのは好きなのであると、このとき判断した。

「あ、あー、その、ほ、本当にいいのか？」「相伴に預かつてしまつて」

二人の関係に察しが付いていたとはいえ、こつも見せつけられては免疫がない桜咲の思考回路はショート寸前である。何度も深呼吸をしていた彼女が気付いたときは、田の前には湯気を立てるシチューとパンが並べられていた。

「気にするな。あ、さつきの歓迎会で食べたから、腹空いてないか？あれなら無理に食わなくともいいんだぞ」「いや、そんなことはないのだが……」

龍宮はまだしも、桜咲は詩緒を見張るのに気を張つていてほとんど料理に手を付けていなかつたため、正直これはありがたい申し出であった。

「ここにきてやつと紅茶に手を付ける桜咲。

そんな彼女を龍宮は微笑ましげに眺めていた。歓迎会中彼女が敬愛するお嬢様の敵かもしけないと警戒していたのが、嘘のようである。

いただきますと手を合わせ、シチューを口に運ぶ龍宮。彼が焼いたというお菓子ほどの感動はなかつたが、中々の味だ。

「ところで彼はどうに夕飯を届けに行つたんだい？ 彼も寮生だらう。・宮崎のところか？」

基本、麻帆良中等部の生徒は男子も女子も寮住まいだ。特殊な事情がない限り家が近くてもそのようになつてゐる。

「んー？ 違つ違つ。他のなんと！」

「ふつ、と桜咲がむせた。

部屋から出て来た少年を、金色の少女が木陰から目で追つ。

「あれは？」

「データ照合。麻帆良男子中等部一年B組所属、出席番号一三三番、宮崎なじむ。一年前父親が婿入りしたため宮崎姓となる。女子中等部一年A組宮崎のどかさんの義理の弟。旧姓は岩館。のどかさん同様、一般生徒です。日時詩緒さんとの関係性は不明です」

「魔力は……異常なしか。やはりなんの関係もないのか？ ……目

時詩緒のあれも……茶々丸が医療記録が残つとるといふし、角膜に残留した微量魔力が……とりあえず日時詩緒は桜咲達に任せて私達はこちらを……

「マスター」

「なんだ茶々丸。今考え中だ」

「申し訳ございませんマスター。ですが ターゲットがこちらに向かってきています」

「は？」

「ほう」

「外部光、瞳孔サイズ及び位置からこちらを視覚的に捉えていることを確認。認識阻害結界が効いていないものと判断。対象の危険度を暫定的に一段階上昇、戦闘モードに移行します。……マスター、笑いかけられています」

「見ればわかるわ。ふん。随分となめられたものだな。癪だが、まあいい。いくぞ、茶々丸」

「はい。マスター」

「ジジイ富崎なごむの資料を見せろ」

翌日の早朝、麻帆良学園学園長室の扉を叩き割る勢いで開いたエヴァンジェリンの第一声がそれであつた。

部屋の主、近衛近右衛門が、ほ？と驚いているのを余所にエヴァンジェリンは室内に設置された戸棚を勝手知つたると開き、麻帆良内に存在する魔法関係者の資料と、特殊な一般人達の資料とを持ち出すとその場で読み始める。

「一体どうしたのじゃエヴァア」

近右衛門は昨日の夜、タカミチが魔法犯罪者達を拘束したところで監視を止めていた。ゆえに突然エヴァンジェリンが富崎なごむの名前を出してもわからなかつたのだ。だがその名前には覚えがあつた。

「昨晚田時詩緒と接触していた富崎なごむだ。お前はあいつの能力に気付いてだらう？　なにせ　」

特殊一般人の資料の中から、富崎なごむのそれを見つける。

「　脳機能阻害魔法抗生体质。やはりな
「……宮崎君が田時君と接触しておつたのかの？」
「見ていなかつたのか？　どうやら友人らしいぞ」
「フオ？！　……そうか。それはのう……してエヴァア。そこまで確認したということは、魔法も見せたのじゃろう？」「

「ああ。一般人となつてはいるのに、私の認識阻害結界を無視してきただのでな。攻撃して拘束した。現在魔法球内で隔離している」

資料を読み込み続けるエヴァンジエリン。

「それでは記憶を消しておいてくれんかの」

「断る」

「フオ？！ それはなぜじゃの？！」

魔法に関わった一般人は記憶消去が原則だ。それをにべもなくエヴァンジエリンは断つた。

「私も最初は消そうとしたさ。だが止めた。お前だつて気付いているだろ？ あれは後数回下手なヤツが記憶をいじれば、死ぬぞ」

昨晚宮崎なじむを拘束したエヴァンジエリンは、彼がなんの抵抗もせず攻撃を受けて捕まつたことを訝しんだ。そしてそのまま自分の家まで連行し、記憶を覗くなどの処置の後、そこで彼女は彼の『事情』を大凡に理解した。

「ジジイ、お前の魔力残滓も確認したが、ヤツの記憶域は消去跡で虫食いの方が多い状態だつたぞ。ここに載つてている記録では施術数が十回となつてはいるが、消した時間量を足すと一年分に相当しているではないか。これだけ記憶をいじければ、とっくに精神か思考力のどこかに異常をきたしているはずだ。

私が確認出来ただけで百一十四の消去箇所があつたのだ。正確な時間量は計測していないが、消された時間はヤツの半生には値するだろうよ。虫食いの記憶など、本来なら異常をきたすどころか精神が死んでもおかしくはない。それでも今なお、宮崎なじむは生きている。

だが もう限界だ。あれはもう、いつ死んでもおかしくない

「フォ フォ フォ フォ オオウ？！ ひ、百一十四回、じゃと？！」

非常識なその数字に、近右衛門は今朝最大の奇声と驚きを放つ。

記憶は人を構成する最重要要素の一つだ。人格に最も影響を及ぼすのは経験であり、その経験とは生きてきた記憶に他ならない。それを虫食いの如く消し続ければ、どこかに変調をきたして然るべきなのだ。最もわかりやすい例が記憶消去や封印による学習能力の低下である。その部分へ至る思考バス、脳神経バスを遮断するため、思考力や記憶力などに異常をきたすためだ。一度の消去や封印でもその時間量次第でそういう弊害が出ることがあるというのに、そんなことを幾度も続けていれば思考や記憶などを司る大脳皮質部分だけではなく、長期記憶の海馬や生体機能の小脳部分にもダメージは及ぶようになる。最悪の場合精神を初め脳機能が完全に失われ、あげくに心臓の動かし方や呼吸の方法を忘れて死ぬのだ。

特になごむの場合、封印ではなく脳細胞を直接死滅させることで記憶を消す消去法をとられている。早い段階で精神に異常を来すのが普通だ。

エヴァンジエリンや近右衛門ほどの魔法使いともなればそういう弊害を抑えることも出来たが、ここまで数や量をこなして無事でいさせるのは不可能だ。数で見れば、精々が五十回といったところであろう。精神が死なない程度に抑える、というのが。

それなのに宮崎なごむがこれまで無事でいられたのは、偏に彼の精神力の異常な頑強さによるものといえた。

そしてそれは『信受』の影響でもあった。

「お前が何回まで確認していたか知らないがな。実際はそれ以上やらされているだろ？ 多すぎて途中から数えるのも面倒になつたからな。なぜ人として自我が保つていられたのか不思議でならないよ」

「宮崎なごむの記憶消去状況に関して、近右衛門も実は一年ほど前に非公式に六十回ほどまでは確認していた。ゆえに彼の精神と脳の耐久性には以前から注目していたのだ。だが実際の回数がそれ以上だと知つて、純粹に（・・・）驚いていた。

エヴァンジエリンが手元も資料をめくる。

「……なるほど。幼少の頃母親を連れて深夜の森に入り、結界を越えた結果母を失ったことが最初か。母に関する記憶の半年分近くをここで消していたな。だが記憶をいくら消してもそれが本能レベルでトラウマとなつたのか、深夜徘徊をするようになる、と。主な活動域は森。ゆえに度々結界を越えて戦闘区域に侵入、体质のせいか記憶封印や改竄は受け付けず、記憶消去を繰り返してきた。お前も把握していなかつたようだし、記録外の記憶消去はどうせ『正義の魔法使い』どもが失点をおそれて、勝手に消していったのだろうな。……本当に、あんな下手くそな記憶消去でよく生き残つたよ」

エヴァンジエリンだからこそ記憶消去の回数を細かく測定できたようなもので、上位の魔法使いでも記憶をいじつた回数を正確に測定するのは極めて困難な作業だ。どれだけいじられていたのか、気付く者などいなかつたのだろう。だから『彼ら』は秘密裏に、遠慮無く、記憶を消していく。

資料を読み込んでいくエヴァンジエリンを、近右衛門は冷や冷やしながら見ていた。本当はその資料にも記載されていない、他の事実もあつたからだ。宮崎なごむが魔法使いによつて失つたのは何も母親だけではない。二年前、恋人と言つても差し支えない人物を彼は失つっていた。その事実はとある理由から秘中の秘となつていたため、資料が別冊にしてあつたのだ。

そこに関する記憶は近右衛門が入念に消去したので復元される心

配はないと言い切れたが、資料は残っている。それをエヴァンジエリンが知ったところでどうこうするということはないと思うが、知られていい内容でもなかつた。

「それでジジイ。なぜこいつを今まで放置していた？」

資料から顔を上げたエヴァンジエリンが問う。

このまま記憶を消し続けていれば近いうちに死んでいたのは確実だ。魔法の秘匿という問題があろうが、それをわかつていながら放置していたのは緩やかな他殺としかいよいのがない。だがそれを回避するために、麻帆良最高権力者である近右衛門であれば、理由を付けて彼を麻帆良の外に追い出すことぐらい出来たはずなのだ。

だが彼は宮崎なごむを麻帆良に置いておき、そのままにしていた。資料を指で弾き、指摘するエヴァンジエリンの口元が妖しい弓張りの形に笑み曲がる。

「ククッ。まあ、あの状態で外に出すなど出来るわけがないだろうな。とつぐに死んでいてもおかしくはないのだから、なごむの存在が敵対する魔法組織に知れれば、麻帆良の一般人への対応を攻められる口実となる。お前が対応を後手に回したツケだな。だが、他にも方法があつただろう？」

近右衛門もエヴァンジエリンが言わんとするところは理解していた。

それは魔法を秘匿される側から秘匿する側へと、つまり魔法使いへと彼を引きこんでしまうという選択肢だ。近右衛門が信用できる誰かに彼を弟子入りさせればいいのだ。

麻帆良内における事実関係など、近右衛門であれば簡単に取り繕える。本国に報告するのは近右衛門であるし、事情が事情だ。本国への帰依意識が低く、口が固い者に宮崎なごむの事情を話して任せ

ればいいだけのこと。さすがに候補となる者は少ないが、いないわけではない。

だがそれも彼はやつてない。

「母親の件に関する説明を恐れたか？　ここにある資料の限りであれば殺したのは侵入者側で麻帆良に非はなかつたようだから、嘘がない限りあれの性格的に考えてちゃんと説明すれば問題はないだろう。それに情報を握っているのはお前だ。嘘があつても誤魔化しきくだろうしな。幾度も記憶をいじつたことに関しても嘘を交えて事情を話せばいい。それで事足りる。だがお前は、富崎なごむを魔法に引きこんでいない」

エヴァンジェリンの笑みが深くなつた。

近右衛門は組んだ手で口元を隠すようにしてそんな彼女を見ている。エヴァンジェリンのそれはすでに、答えを持つている者の表情であった。

「　富崎なごむの潜在魔力量は一般人の半分。魔法使いの家系一般でみれば四分の一以下だ。気の量に至つてはさらに少ないうえ、身体能力も一般人で比べても低い。　……欠片も才能がなくて、誰も弟子にしたくなかったのだろう？　それで見殺しにし続けたな？　ええ？　『正義の魔法使い』　いや、『立派な魔法使い』殿」

本国への帰依意識が低い者は実力主義者が多い。そんな者達が才能の欠片もないどころかマイナスな者を弟子にするなどと、受け入れるはずがなかつた。いてもすでに手が埋まつていて、どうにも出来そうになかつたのだ。

「……時間や人手がなかつたのじゃよ。魔法を教える手間や時間がどれほどかかるか、エヴァならわかつておるじゃろう。麻帆良の警

備も人手が足りなくて、封印された君を頼つているほどじやからの「……ククッ。そういうことにしておいてやろう。ただな、それならば私が魔法を教えても問題は無からう。富崎なごむを私が弟子に取り、保護するぞ」

近右衛門の眉が顰められる。

エヴァンジェリンは記憶を消さないと言つた。だが消さないだけで、まだ他の口止め策も存在するにはするのだ。それをわざわざ真祖の吸血鬼にして、魔力さえ解き放たれれば最強の魔法使いである彼女が師となることを申し出るなど、思つてもみない話であつた。

如何に魔力を封印されようとも、エヴァンジェリンの魔法戦闘技術は魔法界最高峰の一角だ。現在は自身の魔力の代用品として魔力を封入した魔法薬で戦うことしか出来ないとはいっても、この麻帆良で一対一で彼女に抗えるのは近右衛門を始めとした一部の上位陣しかいない。

一番の実力主義者は彼女のはずなのだ。

だが例の『彼』に彼女の魔法を教導することも考えていた近右衛門にとって、それは前例が生まれるため悪い話ではなかつた。ゆえにそれほど深く考えず、了承した。

「構わんが、どうしてじゃ？」

「言質はとつたぞ。まあなに、たまには後継者を育ててみるのも一興、だと考えただけだ」

「一」、後継者じやと？

潜在魔力量は修行してもほとんど増えることはない。魔法に絶対必要な才能だ。それが先天的に少ないということは、それだけ才能がないということである。魔法使いとして致命的な弱点だ。なにせ

事は体内に留めておける魔法貯蔵量だけの問題ではなく、一度の魔法に込めることが出来る魔力出力量もこの潜在魔力量に比例して上下する。その出力量の差は貯蔵量の差よりも小さなものではあるが、数も質もあることが決定しているようなものなのだ。

そんな彼を弟子にして、言質すらも取り、あまつさえ『後継者』と囁くなど、絶対的な魔力量と技量、そしてその不死性で魔法界に知らぬ者無しとなつたはずのエヴァンジエリンの考えが、近右衛門には理解出来なかつた。

「ああ。後継者だ。私の魔法技能を全て叩き込んでやるよ」

「本気でいつとるのか？」

「ああ。本気だ。あいつは天才だよ。もはやバグと言つていい。なにせ」

エヴァンジエリンがその懷から丸いガラス玉のよつなものを取り出す。

と、途端にそれは大きくなつて学園長室を取り囲む結界となつた。

その中で起きた事態に、近衛近右衛門は驚愕し、冷や汗を流す。

封印されているはずのエヴァンジエリンの魔力が、全盛期のそれに近いほど内部に充満していた。

「これは魔法球作成の技術を応用して、私が作り上げた物だ。この魔力が外に漏れることもない。結界としても一級品だ。そしてこの理論を考案、術式を構築したのが……魔法に触れてたつた数日の宮崎なごむだ」

ダイオラマ 魔法球といつ物がある。

魔法世界でも非常に貴重で、最高級品ともなると購入金額で三世代が遊んで暮らせるほど高額なそれは、その金額に見合った性能を持つている。

その性能とは、異空間の作成と維持。

特にエヴァンジエリンが個人で所有しているそれは彼女のお手製の最高級品で、現実時間での一時間を内部時間にして一日に置き換え、広大な空間を提供する事を可能にしていた。その上福次的効果として内部に魔力素が充満しており、魔力を封印されたエヴァンジエリンも魔法球内では完全とまではいかなくとも復調出来るのだ。つまり魔法球内にいるエヴァンジエリンはかつての最強に近い状態となり、ほぼ敵無しのチートモードになることができた。この中で彼女に逆らうなど、麻帆良最強と謳われる学園長近衛近右衛門でも、差し違えるつもりでなければ出来ないのだ。

そんな魔法球内になごむが連れてこられて二十日ほど、外部時間で二十時間ほど経過したところで、自室として割り振られた部屋で魔法書を読み漁る彼に近づく影があった。

「おー、なごむ。経過の方はどうだ?」

授業を終え学校から帰ったこの場の主、エヴァンジエリンだ。後ろには茶々丸が控えており、彼女が押してきたカート上でお茶の用意を始めていた。

「うあー？ あー一人とも、おかえり。解呪の術式はまだ出来てないよ。学校はどうだった？」

「ちっ、まだか。早くしろ。近右衛門にはお前が言つていた通りに説明しておいたぞ。疑つている様子はなかつた」

「なごむさんの欠席連絡はしておきました。明日もお休みといつことでよろしかつたでしょ？」「

茶々丸が一人分の紅茶をいれて、なごむがこちらに来てから焼いたクッキーをテーブルに並べていく。

「茶々丸さんありがと。それでお願い」

一口紅茶を含み、寮の自室にあつた自分の茶葉とは段違いな味と香りに相好を崩すなごむ。それから同じ紅茶を憮然とした表情で少し冷めるのを待つエヴァンジェリンに向き直す。

「魔法関連をまったく知らなかつたということ以外、魔力量とか全部本当のことだからね。学園長も関与していることだし、記憶消去とかは疑いようがないんでしょ？」

エヴァンジェリンが近右衛門に語つた話は八割以上真実だ。母のことも、記憶消去のことも、紛れもなくこのなごむに起きた事件であり、これまでのなごむを形成してきた過去であった。

ただすでになごむはそれらの事実をあの儀式魔法の時点で知つており、消失した記憶も過去の自分と同期することで脳細胞ごと復元させて理解し、自分のなかで昇華してしまつた事実となつていた。過ぎたことは過ぎたこと。他世界の『なごむ』が全ての世界から失われ、その幸せも不幸せも『そうであつた可能性』となりなごむの内以外から消滅したのも過ぎたことであり、この世界のなごむにすでに起こつた不幸も過ぎたことなのだ。今の彼にとつて重要なのは現在の自分が大切な一部の者が望む通り（・・・）の幸せで

あり、彼が人を超越した存在となりながら人で在り続けるのも、そんな誰かの無意識の願いからであった。

そして彼が為そうとしていることも、その為すこととの矛盾も、誰かの望みであり、大切な人を大切だからこそより大切に想い、人で在り続ける彼の望みであつた。

ただ人であるが故に、体を不老不死化しようとも人の限界を超えることが敵わず、その神にも等しい能力を十全に振るつて望みを叶えることが出来ないという、新たな矛盾を抱えることとなつてしまつていたが。

「私としてはお前の演技になんぞ付き合わず、さっさと解いて欲しいのだがな。そのような演技などせずとも、お前であれば日時詩緒達を守ることぐらいわけがないだろう?」

「それは同時に、実力を教えてやる必要もないということでもあるんだよ、エヴァ。現存する術式から発展させて、かつ自分の魔力量で出来る解呪魔法を作り、エヴァが英雄殿と交わした約束や勝手に魔力抑制式を組み込んだことを盾に、エヴァ自身かもしくは身内が解呪すれば学園長はぐうの音もでないんだしさ。それ以外の犠牲を伴う方法や、事象変異能力を初めとした彼らに理解出来ない方法でやると、隙を作ることになるし自分の本当の実力を疑われかねない。だから少しの間はその魔法球で我慢してて」

「私はお前の本気を見せて示威活動をした方が、効果的だと思うのだが」

「自分の『可能性』を操る事象変異能力は万能だけど完全じやない。そして自分の目的は闘争じやないんだよ。今の自分の本気なんて見せたら、それこそ魔法世界から軍隊がやってくることになる。発明だけが能の多少我が侶な甘ちゃん。でもつて政治的には操作可能と思わせないと」

事象変異能力。それが例の儀式魔法によってなごむが獲得し、自

身や詩緒を不老不死化させた力の名前だ。

ノーリスクで願つた物事を、願われた物事を、そのとおりに実現させる、まさしく正しい意味で神の如き力だ。

だがこの能力は神の領域であるが故になごむが人で在り続ける限り完全ではなく、出力にはさほど問題は無いが、主に規模の面でスケールダウンを余儀なくされていた。例えば目の前の真祖の吸血鬼を消そうと思えば一瞬で消せるが、麻帆良をまるまる一瞬で消すことは出来ない、みたいな状況だ。

そして心身を操ることも出来るが、なごむは過去の経験からそれを好ましく思っていない。確かに彼にとつて過去は過去であるし、少々人間を逸脱した思考を持つてはいるが、人として、宮崎なごむとして存在する以上どうしても嫌悪感が生じるのだ。

さらに入であろうとしているが故に、この事象変異能力もなるべく使用は控えたいという思考が生まれている。

この麻帆良での目的のことやそれらの要素があつて、なごむはこの能力を半ば封印していた。

「やつてきてもお前なら対処可能だろ？が。私も協力してやるぞ？」

エヴァンジェリンの言葉に、なごむはこれ見よがしに溜め息をつく。

「そしたらこの日常が壊れるでしょうが」

なごむは田的の為に、エヴァンジェリンに意見できる立場を得ていた。

一ヶ月前の儀式魔法とその結果、彼が新たに作り上げた転移魔法などの情報や、エヴァンジェリンが抱える学園結界による魔力抑制の事実の開陳と、登校地獄の解呪に関する契約。それらを対価になごむは彼女がとる行動を逐一報告で受け、意見する権利を得られる

ように契約したのだ。

エヴァンジエリンに関する情報は大量にあった。詩緒の前世知識と彼女が麻帆良に来る前に集めていた情報だ。元々彼女はそれらを使つて真祖の吸血鬼であるエヴァンジエリンと接触。自分の血や呪に関する知識などを対価に吸血鬼化で延命を図るつもりでいた。だがそれは別の形で叶つてしまい、これら宙ぶらりんとなつていた情報をなごむが再利用した。

そしてなごむの目的は単純。詩緒の目的である復讐の補助と、例のクラスにいる彼の大切な人の日常を見守り、本当に望まないことを排除することにある。それが今の彼女の望み（・・・・・）だからだ。

そのうえで邪魔になると同時に利用出来るのが麻帆良上層部というのが詩緒となごむ共通の見解であり、さらにあと二月ほどでやつてくる詩緒の実兄、ネギ・スプリングフィールドであるとした。

そしてそれらを利用及び抑止するためになごむが思いついたのが、魔法側と一般側の両方からの介入であった。

能力や性格的なものも考慮して女性でありあのクラスに潜入しやすい詩緒を一般側へ、なにが起きても対処可能ななごむが魔法側へと行くとして、麻帆良上層部や将来的にネギに影響力を持つに至るであろうエヴァンジエリンとなごむが接触。彼女に対し抑止力を得ることで危険の一つを取り払い、自身も行動しやすくしたのだ。

その上で彼はエヴァンジエリンにも嘘を吐いていた。詩緒が魔法関係者ではないと言つて、彼女とその友人達を守る対象であるとしたのだ。

まるで詩緒を守ることが最大の目的であるかのように思わせる為了だ。

実際のところ、詩緒の現在の実力はなごむの不死化などを初めと

した加護もあり、全力全開のエヴァンジエリンに匹敵するものとなつていい。とつくに魔法側の存在であるし、わざわざ彼が直接守護する必要など無いと言つていい。

だがバカ正直に本当の守護対象を教えては、後になにがあるかわからない。手札を伏せておくことに越したことはないと、彼は嘘を吐いていた。

「ふん。まあいいさ。魔力魔法球を見せたらジジイも頬が外れそうな顔をしていたしな。あれは笑えたぞ。魔法球制作技術にこんな使い方があつたとは。これは魔法界に革命をもたらす発明だ。魔力が少ないと運用技術と資金さえあれば高みに上り詰められる。元の実力があるものはそれ以上になれる」

本来の能力を隠し、いくつかの条件を守りながらだとエヴァンジエリンの解呪には少々時間がかかる。そのため契約の前払いとして提案したのが魔力魔法球であつた。

「作る技術と資材さえあればそれほど難しいものでもないんだけどね。でもこの魔法球に使われている異界結界技術があつて、魔力薬や魔法薬の制作技術もあるうえ、魔力供給という必要に迫られていたエヴァアが、これらを組み合わせることに気付いていなかつたのは意外だよ」

魔力魔法球の原理は全て既存のものの組み合わせであり、なごむはそこに少々のアレンジを加えただけの代物のつもりでしかなかつた。

「私は魔法の開発はやつていたが、魔法具の開発は専門ではない。それでもそこいらの一流を語る俗物より知識も技術もあるが、お前の発想力が異常なのだろう？ それに簡単に言つがな、思いついた

としてもお前がオリジナル転移魔法にも使つてはいるあの空間安定用の多胞体術式、ほんとブラックボックスじゃないか。原理は確かに現行の平面術式の発展だと理解出来るが、立体も多面体も球体も飛び越えて、構造を単純図形化できない上位次元多胞体だぞ？ あれは組めと言われて組める物ではない。私ですらそういうものだと理解出来るだけだ。人間の創造力の範囲内だが、創作できる範囲は逸脱しているよ。それなのに例の平行世界とやらの技術流用もしていいなのだろう？」

「うん。まあ。思いつきで作つたし」

多胞体術式とは、なごむの体に刻まれた時空間パスを基盤にして作り上げた特殊な魔法式のことだ。その構造そのものが上位次元体のため、計算上では想像できるが実際に構造体として創作するのは不可能なはずの代物である。

彼はこれを用いて、魔力ロスや余剰放出がほぼ存在しない転移魔法や結界魔法を作り上げ、事象変異能力の代わりとしていた。

「アリアードナーを中心とした研究者共や技術屋共からすれば、魔法球そのものよりもこの多胞体術式の方が革命だろくな。精霊への魔力譲渡がないうえ、符などとも違い魔力ロスがゼロに等しく、少量の魔力で高い効果性が期待できる。欠点としては現状お前ぐら이しか構造を完全に想像できないから発展性が欠けることと、同じ理由でお前が式を組み込んだ道具がないと使えないという点か」

つまりなごむが思つていた以上にアレンジが過ぎたらしい。

「そういうもん？」

「そういうものだ」

「ふうん」

「ああそうだ。ジジイがな、今晚会つて話をしたいそりだ」「うん、わかった。んー、でもそつか、多胞体はやり過ぎか。学園長だけじゃなくて一般魔法使いにも理解出来た方がいいから……そうなると今の解呪案を一度見直さないとだ。魔力運用効率悪くなるけど多胞体以下のランクでやるとしたら多重球体かな？ いやでもそれも行き過ぎか……こには立体をすっぱり諦めていつそのこと通常の平面術式で……期間は一年を田処に……」

「ちょっと待てなじむ、それは別に気にしなくていいことだ。見直さなくていいからせつと私の呪いを解け。一年など待てないぞ！」

聞き捨てならない言葉を耳にし、エヴァンジェリンがカッ普に伸ばしていた手を止めて叫ぶ。

「ダメだよエヴァ。ちやんとわかるよ！」せつてあげないと
「やれ！ 多胞体なら数日で田処が立つと言つていただじやないか！」

「ダメ」
「やれ！」
「ダメ」

叫ぶエヴァンジェリンを横田に、「なじむは歯牙にもかけない」という風に椅子に深く腰かけてくつろぎ、紅茶にミルクを入れて変化した味わいを楽しむ。さて次はクッキーを漬してもしゃりと……とうところでそんな態度のなじむにエヴァンジェリンが爆発した。

「強情な！ 力尽くでもやらせつてやるー」
「痛いのヤだから遠慮しどべ。どうせやつてもまた「お前は防御ばかりで面白くない！」とか言つんでしょう？ それにその沸点低いの直しなさいって言つてるじゃないか。子どもじやないんだからすぐ暴力に訴えないの。十五年も自由を奪われ続けて苛立つているのは

わかるけど、短慮は美德たり得ないよ

「つまりいつまいとクッキーを貪るなごむ。

「「」のおおクソガキがあ……私に説教だとつ……？」

「「」の間も言つたでしょ。自分がエヴァに接触したのは、君もまた自分の庇護対象に勝手な暴力を振るいかねない存在だからだよって。それをさせないために苦言を訂するのは契約の範囲内だから、意見に腹たてたつて理由での決闘も受け付けないよ」

「私は女子供は殺さんといつとこうが！ 元から田時詩緒に手出しせん！」

「殺さないだけで血は吸うし記憶も消すでしょ。自分の目的の為であれば利用もするしね。それに庇護対象にはおシオの友達も含めているんだよ。エヴァは調子に乗ると自制が効かなくなるところがあるみたいだから、なるべくそういう危険行動は控えてもらえるよう、慎みを憶えてもらいたいんだ」

「ああ言えばこう言つて！ 本当にかわいげがないな！ 私は悪の魔法使いで吸血鬼なのだぞ！ 体面上とはいえたお前はもう私の弟子なのだぞ！」

「別に悪の魔法使いも吸血鬼も否定しないじゃん。エヴァが持っているやつたらやり返される覚悟も理解しているつもりだよ。それに上っ面を正義で塗り固めないと立てない輩より、自分の欲を理解している悪の方が断然かつっこいし、吸血鬼は血を吸うからこそ吸血鬼なわけだしね。

「あ、知つてた？ 悪も鬼も、元々は強いことを示す意味合いの方が強い漢字だつたらしいよ。

「ところで、紅茶冷めちゃうよ。いらなきゃもらひつていい？」

「う、ぬ、そ、そうだったのか。紅茶はやらん」

「なごむさん、おかわりお容れしますか？」

「お願ひします」

エヴァンジエリンが自身の紅茶にやつと手を付け、ほつと一息吐く。

「でもさ、女子供を殺さない主義にしていても、エヴァの私欲で利用されて不幸になつている人が出て来るんじや、主義としてちょっと安易じやない？ あれはどうかと思うんだ。エヴァは生き地獄を知つてゐるわけだし。何も知らない他人からするとね、あれは主義つていうよりも、建前とかその辺を声高に語つてゐるよつに見えちやうよ」

「そう見えるか？」

「うん。悪の矜持を保つのならいつそ殺した方がそれっぽいと思つ。エヴァは悪党じやなくて悪、つまりは象徴なわけだしさ」

「ぬうう、だがなあ、私としては刃向かつてきたわけでもない弱者を殺すのは……」

「だつたら、やっぱり利用すること自体を自粛するべきだと思つんだよ。無関係な人間は無関係なまま放置。絶対に手を出さず、エヴァのことをちゃんと知つて立ち向かつてきた者のみを相手にする。それにエヴァ個人としての欲望は、エヴァ個人の暴力のみで掴み取つた方が実力を示せるでしょ？ あと人間を殺すのって結構簡単だから、もつとこつ…… そうだな、大量破壊かな？ そんな感じの派手さの方が悪の象徴っぽいかも。いや、大儀ある悪？ 霸道？ なんかそつち系かな？」

「……お前の言いたいことはわかるがな、なごむ。過去教会による魔女狩り然り、正義の魔法使い達の制裁然り、奴らは自分達の欲望と都合の良い面しか見ないのでぞ？ お前の示した道にどれほどの意味があることやら……。それに私は霸を唱えたいわけではない」「なに言つてんの、絡繳さんがいるじゃない。現代は情報化社会だよ。魔法使い達ですらマホネットの時代だ。電子的なアプローチからの記録を利用して、それこそかつてのカトリックのようにプロパ

ガンダ。情報戦だよ情報戦。エヴァがどういった種類の悪であるか、知らしめてやるのも手だと思つよ。そして最終的には気に食わないのを叩き潰して、エヴァが認める正義のみを残してやるのさ。

これってなんかすっごく悪いっぽくない？ まあ、ただ暴れるだけだとあっちの都合良いようにされちゃうけど、それを逆手にとればいいわけだしさ。それに相手がやってくることに屈していたら、それこそ小者じやないか。弱腰になっちゃダメだよ、エヴァ。まあ慢心もダメだし、覇を唱える必要も無いと思うけど、静かな情報戦はやつておいて損はないと思つ

「ぬうう、はいてくはわからん。その辺りは茶々丸に任せる

「マスターの意のままに」

「ハイテクはあんまり関係ないけどね。そうだ、解呪のために真祖の吸血鬼の構造を調べたいんだけど、新しく作った解析用の魔法かけていい？」

「……ああ、構わん。とにかく解呪を早くしてくれ」「おーけーおーけー。じゃあちいっとリラックスしてねー。……と

「ひでエヴァは成長したい？」
「なに？！ 出来るのか？！」

「時間かかるけどたぶーん

なんだかんだで二人の仲は良好であった。

ノックと入室応答の後、深夜に差し掛けた麻帆良女子中等部学

園長室の扉が開いた。

「失礼します。近衛学園長先生
「遅かったのう。町崎なじむ君」

Hヴァンジエリンとの話で学園長が呼んでいると知ったなじむで
ある。

彼は近右衛門の言葉に目を瞬かせると、ニッコリと笑い遅れた理
由を語つた。

「てっきりお迎えが来るものだと思つて、エヴァの家でくつろいで
いました」

「それは済まなかつたのう。気がきかんで」

「ええ、ほんとに。明日は平日で学校あるんですよ？ それなのに
人伝で夜に呼び出され、時間指定もなければ場所が女子校舎の学園
長室なのに迎えもない。普通、男子生徒が夜間勝手にここに入つた
ら変質者扱いじゃないですか。この内容で迎えを用意する予定がな
かつたとか、犯罪歴作つて追い出すつもりだったんですか？」

「ほほほほほ、担任の先生から聞いていたよりも中々毒舌じや
のう。いや済まなかつた。これは完全にこちらの不手際じやわい。
ほれ、立つておるのも疲れるじやう。そこにかけなさい」

「ありがとうございます。はあどうこいしょ。エヴァの家から徒步
だと、やっぱり少し疲れますね。ああ、どこひで、えつと、先ほど
からずっと読心魔法使われてますけど、これって行使権も相手の同
意も無い場合は魔法界では訴えられましたよね」

言わされた通りにソファに腰かけ、お茶もないままに彼は卓上にあ
つた茶菓子の封を開けながらも喋り続ける。

「……………実際に心が読めてしまった場合は、」

「無効化されたから立件にはならないというわけですか。なるほど。では過去の記憶を消去されている件については？」

「…………一般人の魔法に関する記憶の隠蔽は魔法使いの義務じゃから、なにも問題は無いのう」

「まあ、そうですよね。記録上は規定量しか記憶消去はしていないわけですし、それがまかり間違つて致死量に達していようと知らないものは知りませんものね。自分勝手に魔法使いが作り上げた義務云々は置いておいても」

やだなにこれ美味しい、と咳きながら茶菓子を開けていくなごむ。
近右衛門には最初以降一警もくれない。

「…………世の中には必要悪というものもあるのじやよ。それに事情を知らない一方から見れば悪に映ろうとも、事情を知ることで反転することなどまあことじや。君が記憶を消された理由とて、」

「いやいや、母の件でしたらエヴァから聞かされました。自分の能力の事も、自分がどのような立場にいるかも理解しているつもりです。ですからそんな御託を並べる必要はないのですよ、学園長先生。どうせこのままいつても読心すら必要悪と権力で潰して終わりでしょうから。でも自分のような者が外部には出て欲しくない、と。ええっとそれで、自分の件についての諸々の責任はどういった形で取つてもらえるのでしょうか？」

「おほん。そうじやのう。富崎君は聞いていたよりも現実的なようじやから、まずは麻帆良内での学費の全額免除及び就職先の斡旋。次に君は魔法具などの作成や設計に才があるらしいからそれに関する資料の無料提供、図書館島秘密図書の閲覧許可、などかの」

「ふむ。全然足りませんね。それらの条件プラス自分の身分を麻帆良『の』魔法使いではなくエヴァの弟子且つフリーの魔法使いとい

う扱いの確約。そして自分の大切な者達の安全と安寧を守る権利を。具体的には、えっと、自分の家族及び先日から麻帆良女子中等部二年A組に転入した日時詩緒周辺への政治的魔法的絶対不干渉契約と、麻帆良内における対象への護衛権を下さい。ああ、もちろんエヴァや絡繩さんはこれに含めなくていいです。さすがに彼女への不干渉は無理でしょうし、自衛能力は過剰にあるので

「フォツ？！……それは些か欲張りすぎではないかの？……」

転移魔法を応用した技術で魔法瓶を取り出し、暖かいほうじ茶にほつと一息つきながら。

「では学費免除と職場斡旋は要りませんので残りの許可を」「ふおおお、それも非常に……」

「弟子の件はすでに呑んでいただけのものとエヴァから聞いていましたし、元々その場合麻帆良所属ということにはなり得ないでしょう。彼女は関東魔法協会に拘束され協力していますが、属してはいませんので。そして護衛権についても、エヴァや絡繩さんを除けば全員一般人です。魔法の秘匿や魔法からの保護は義務ということですから、麻帆良側からするとこれといって通常の対応と変わりありません。そのままのみ込んでいただいても問題が無い条件に思えますか」

「いや、のう？ 麻帆良所属でない者に自衛はまだしも護衛権となると、そう簡単に認めるわけにはいかんのじゃよ。言っだけは簡単じゃが、無用な混乱や敵対を招きかねん。いきなりのことじゃし、エヴァの弟子という立場も他の魔法使い達にとつては印象が悪い。弟子入りそのものは認めたが、彼女の弟子が護衛であろうと麻帆良の意志を外れた行動をとるとなると、敵対行為と捉える者も出てくるじゃろ？ 何もせずとも我々の方でも一般人は守つておるのじゃから、そこまで拘ることはないのではないかの？」

「あのう、一般人であつた自分が受けた、麻帆良にいる魔法使いの

対応をお忘れですか？」

「ぬ……確かに富崎君からすると当然の要求かの。じゃがのう……完全な外部の者による護衛はちと……」

「んー、では不干渉契約と自衛すること自体は認めるといふことですね」

「……なぜそこまでしてそれらの権利や契約を求めるのじや？」

「自分の家族の安全を願うのはおかしなことですか？」

「そうは言つとらん。富崎君が金品や将来の類ではなくそれを頑なに求める理由もわかつた。ただ田時君とその周辺への不干渉契約といふものの理由が見えんでの」

「まず田時詩緒　　おシオは自分の友人です。そしてエヴァの家で待つてゐる間、彼女から先日あつたという強姦未遂事件の話を電話で聞いたのですが、学園長先生もご存知ではありませんか？」

「……知つとる」

「ですよね。あれは魔法使いが起こした事件、なんですね？　となるとこここの理事である学園長先生が知らないわけがないですから。そしておシオを助けた龍宮さんと桜咲さんは魔法使い側の人間であり、おシオをそのとき監視していましたね？」

「その話はエヴァから聞いたのかの？」

「聞きましたが、この予測を立てたうえで確認の為にです。こちらの世界を知つていて、事件の仔細を聞けば、事件も一人も魔法関係であることなどすぐにわかります」

「そうかの」

「んんつと、よければ続けますね。その際エヴァから聞かされたのですが、おシオの右眼には魔力が宿つてゐるそうです。それが原因でエヴァと一緒に監視されていましたと聞きました。後日直接会つて自分も確認するつもりですが、彼女はその右眼の影響で認識阻害魔法が少々効きづらくなつてゐるようなのです。正確には、効果が中途半端に現れている、ですね。龍宮さんが銃を持っていたことや、桜

咲さんが日本刀を持ち歩いていることを憶えていました。笑つて、いたので違和感は覚えていなかつたようですが、銃刀法違反とかで二人が捕まらないか心配はしてました

「フオ？ それは真かの？」

「あくまで自分の予想ですが、前述の通り少し効きづらいのは本當です。それもあって自分と彼女は知り合いましたから」

「……なるほどね。そういうことじやつたか」

「おシオには、自分のよつな目に遭わせたくありません」

「じゃがそつは言つても、すでに仲良くなつたらしく龍宮君や桜咲君は彼女と同じクラスじや。接触は避けられん可能性が高い。別のクラスに変えても」

「別に変える必要はありません。彼女の場合、麻帆良にいれば多少のズレは仕方がないでしようから。ただ魔法的な接触だけは控えてもらいたいだけです。きっかけはどうあれすでに友人関係を築いたようですから、それを引き離すつもりは自分にもありません」

「そうかそうか、では宮崎君の家族と田時君への不干涉は」

「その周辺も含めた不干涉、です。現時点で魔法関係者となつている者は省いてもらつて構いませんが、一般人は全て含みます。つまり友人となつた者達も含みます。そうでないと、特におシオは魔法に近づきやすいですから」

「……宮崎君。お主……」

「どうかしましたか？」

「……いや。その条件じやと少々問題があるのじやよ。あのクラスには儂の孫娘や他の魔法関係者の娘もある。彼女達は今は魔法を知らんが、いつかは知つてしまふ可能性が高いじやろつ」

「それに関しては仕方がないですね。そういうた魔法関係者及び予

備軍の方は後日リスト化して教えていただければ、おシオにそれとなく注意も促せます。ちなみにエヴァとは席が隣同士らしいですが、二次災害的な魔法接触を避けるためにすでにあまり関わるなと言つてあります。龍宮さん達と違つて、エヴァは敵が多いようですが、「ほつ、そうか。だが……なんというか、過保護じやのう。……ふう……わかつたわい。その条件をのもう。だがこちらからも条件があるのじやが」

「なんですか？」

「富崎君に関東魔法協会に所属してもらいたいのじや。やつすれば護衛権も認めよう」

「……わかりました。それで護衛権ももらえて、所属時の拘束が今回契約に支障をきたさない限りであれば、自分は構いません」「ほつ、そうかそうか。話は纏まつたかの。では今晩はそういうことで」

「えつと、では忘れない内に契約書を纏めて、契約も完了させてしまいましょう。契約内容の草案は事前に作つてきましたので、魔法具資料と秘密図書の閲覧許可についてを書き起こして、フリーの魔法使いという点を消して所属部分を作り直すだけです」

言つが早いが、なごむは転移魔法で数枚の書類と筆記用具を取り出す。

「……よ、用意がいいのう……」

「予習復習は勉学の基本ですよ、学園長先生。自分は誰かさん達のお陰なのか忘れっぽい性分なので、こいつしていないとダメなんです」

富崎なごむが卓上にあつたお菓子を全て胃袋に修め学園長室を退室するまでの間、終始空氣のようになに佇んでいただけであつたタカミチ・T・高畑は近衛近右衛門の話を聞き、戦慄と嫉妬を禁じ得ずにいた。

事前に話には聞いていたのだ。エヴァが富崎なごむをバグと称した、と。

あの『闇の福音』エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルがバグと称するほど存在。それが指示する意味は、彼が憧れて止まないかつての仲間にして英雄達、『紅き翼』のメンバーとも比肩しうる才能ということに他ならない。そのことの意味を、圧倒的な才能の差を、タカミチは本当の意味で初めて目の当たりにしたからであつた。

彼とてわかつていたつもりではあつたのだ。
エヴァはこの手のことでは嘘を吐かない。彼女がそう言つたのであれば、紛れもなく天才の類であろう。

だがそれでも所詮は昨日まで一般人でしかなかつた、氣も魔力もタカミチより少なく体術も修めていない、魔法の術式を組むのが非常に得意な、頭が良いだけの少年であろうと思つていたのだ。

だがそこにあつたのは、他者との、タカミチとの圧倒的なまでに純然たる才能の差であつた。

それは潜在魔力量でもなく、潜在気量でもない。ましてや体術の才でもなければ、何かしら先天性の戦闘能力を持つていたわけでもない。むしろ彼は本当にそれらの要素は他の平均的な一般人と比べても低いものであり、持つていた先天性の特殊な能力も、どちらかといえばそれが原因となつて彼は不幸に遭い、死にかけていたとい

うのだから、マイナスな代物であつたといえるだろう。

しかし圧倒的な魔法開発能力・魔力操作技術、そして単純な頭脳によつて、宮崎なごむはそれらの要素を覆した。

目に見えていただけでもあの転移魔法だ。タカミチは最初あれば影魔法などにあるような倉庫魔法・空間圧縮魔法だと思っていたが、近右衛門に聞くところによると転移魔法であつたという。しかも近右衛門すら見たことがない術式。つまり彼のオリジナルだということだ。倉庫魔法でも難度は高い。それが転移となると飛躍的に難度は上がり、魔力効率が高いオリジナルともなれば世紀の大発明だ。

だがそれだけではない。宮崎なごむが退室してすぐに、近衛近右衛門は転移魔法とは別の彼の異常性をタカミチに語つた。

対面してすぐに行われた近衛近右衛門の読心魔法の無効化。

入室後すぐに無効化と聞いて、タカミチも拙いとは思つた。学園長の軽率な行動に怒りが湧いたほどであった。

すでに彼らにとつて宮崎なごむが外に出るということは風評被害問題どころではなく、エヴァに作らせたという魔力魔法球のような超高性能魔法具開発者を野に放つという、新たなデメリットを生んでいたからだ。たつた一日で魔法具界を席巻するような発明を行つた彼を手放すなど、ゼロどころか著しいマイナスであるといえた。それなのに宮崎なごむはその経歴から、麻帆良の魔法使い達に良い印象をもつていなければいけないのは確定していたのである。

故に現在以上に悪印象を与えることは絶対に回避しなければいけない事態であり、だからこそ知識のみの相手であろうと侮つた近右衛門に憤つたのだ。潜在魔力量の少なさ故に魔法抵抗力が小さかるうとも、頭が回るのであれば、記憶を消された過去を持つのであれば、用心して障壁を張つてもおかしくないのだから。

だが近右衛門は語った。障壁は張つていなかつた。探知魔法でまづそれを確認したからこそ、絶対に説得を成功させるために細心の注意を払いつつ読心魔法を使つたのだ、と。

ならば何故読心出来なかつたのか？

宮崎なごむは魔法障壁を張つてレジストしたわけでもなければ、内在魔力圧で押し返したわけでもない。ただ事前に作つておいた、意識介入系魔法を綺麗に紐解き無効化する術式を体内に仕込んでおいただけだ。これは言うなれば解毒薬のようなものだ。近右衛門は防ぐことを前提とした、既存の魔法障壁しか探知していなかつたら気付けなかつたのだ。

そして近右衛門がすぐにその事実に気付かなかつたのは、その一度紐解かれた魔法の矛先を近右衛門自身に向け変え再構成されたからであった。なごむは無効化と同時に解けた魔法を繕り集め、再利用するための術式を瞬時に作り上げ放つたのだ。結果、術中にはまつた近右衛門の思考は円環のようにループし、違和感を覚えることがなかつた。そして若干遅れて読もうとした思考が読めていないことに気付くと同時に、宮崎なごむはその事実を彼に突きつけた。

仕込みがあつたとはいえ気付かれないように解くのも、一瞬で書き換え向きを変えるのも、麻帆良最強の一角である近右衛門にすら不可能な芸当だ。

そして彼、宮崎なごむは解毒の術式と反射時に作った術式を、あらうことか同じ読心魔法を利用したもので近右衛門の意識の中に送り込んでいた。

その意趣返しによる近右衛門の動搖は相当なものだ。近右衛門とて伊達に関東魔法協会の理事をしていない。送り込まれたその初め

て目にする魔法の情報に、今自分がされたことをすぐに理解した。

反射の魔法構成が今この場で作られた物だということもわかつてしまつた。なぜならこの読心魔法 자체が近右衛門のオリジナルであり、従来のものよりも隠密性や諜報力が非常に高い特殊仕様であつたからだ。その特殊性から他人に教えたところで使うことができない、近右衛門の個人技術といって差し支えない代物であった。そして近右衛門はこの魔法を戦闘中も使いこなす技量を持つからこそ、麻帆良最強の一角たり得ていたのだ。

それを初見で看過され、あまつさえ魔法の構成も知られてしまつた。もう富崎なごむにこの魔法や、この魔法から発展させた他の魔法が効くことはないだろう。

何十年と被り続けた狸の皮が剥がれかかっていたのが、傍目にもその長大な額に流れる汗で理解出来るほどであつた。

タカミチには言わいでいたが、近右衛門はこの場で富崎なごむを殺すという選択肢も脳裏をかすめていた。

さらにそこにきてあの転移魔法だ。

どこまでも圧倒的な天賦の才。

凡才から上り詰めたタカミチにはなかつた、生まれ持つた力。

富崎なごむが見せた才能の一端は地味なものだ。派手な戦闘も、一撃必殺の煌めきもない。実際エヴァの話では彼には戦闘者としての才能はほとんどないらしい。だが専守防衛やカウンターに関してはあのエヴァですらすでに一日置くほどだという。

ただ直向きな努力によってここまで来たタカミチが嫉妬を覚えるのも無理はないことであった。エヴァンジェリンの魔法球に入つていたとしても、この対談までにあつたのは二十日程度だろう。たつたそれだけの時間でここまで魔法をものにしているなど、確かにあのナギ・スプリングフィールド達に並ぶバグだ。

だが、富崎なごむは結局それ以上の攻めをしてこなかつた。やはりその気質そのものが防御に向いている、もしくは根っからの開発者ということなのかもしれない。最初の策がはまつたことで気をよくしたのか、自分が作つたものに驚いたことで制作者として満足したのか、言葉による牽制はあつたものの、それだけで魔法的な行動はそれつきりだつたといつ。

如何に異常な天才といえどまだ十四の子供。特に今までにない力を得て、それが目の前の大人に通用することを知つてしまえば、そこに奢りが生まれてもおかしくはない。

そして経験は何事にも勝る武器だ。特に老獣さは「」を熟成させる時間がなければ得ることは出来ない。

だからこそ近右衛門は途中からペースを取り戻し交渉を続けることが出来た。

富崎なごむの求める物が少々意外であつたが、リアリストになれそうでなりきれない、欲しいのは身内の安全、そんな心根の優しい少しませた子供の本音が垣間見えたのも大きい。

そういうた優しさは非常に御しやすいものだ。近右衛門は圧されているように見せながらも誘導し、そして今回の交渉の最低条件である彼の麻帆良逗留から、さらに進んだ麻帆良所属までこぎ着けた。意外なことに、彼に近右衛門達を忌避する感情があまりないようだつたことが幸いした。

富崎なごむの魔法開発技術はたつた一人で魔法世界にある魔法学術都市、アリアードネー全体と同等かそれを凌駕している。これほどの人材を条件付とはいえ、秘密裏に入手できたのだ。近衛近右衛門もまた彼の才に恐怖と戦慄を覚えたものの、交渉を終えた今の表情は福禄寿もかくやなものとなっていた。

そんな近右衛門に、タカミチは煙草片手に問いかける。

「学園長、でも良かつたのですか？　あのよつな条件を呑んでしまつて」

「ほつ？　彼の家族や田時詩緒周辺への魔法不干渉のことかの？」

「ええ。あの約束を守るとなると、いくら関係者や潜在的関係者を除外できるからといつても、『彼』の件に問題が出ませんか？」

「まあ問題ないじゃろ。彼は随分と詰めも性根も甘いようじやから。あれはなんだかんだと言いながら大を切り捨てられるタマではない。彼自体をあのクラスに関わらせ、最初は魔法的に不干渉であればいいわけじやよ。彼自身はすでに麻帆良の魔法使いなわけじやしな。それにじや。彼は義姉である富崎のどか君よりも田時君のことを気にしておるようじやから、彼女一人を魔法側に自主的に来るよう仕向ければええ。田時君さえこちら側に来させることが出来れば、後は成り行きでどうとも出来るじやろつしの」

「ですがあの内容ですと、その自主的にというのが難しいのでは？」「ほつほつ、田時君の部屋、まだ決まってなかつたはずじやと思うたが、どうだつたかの？」

「まだですが……それがどう

「ほれ、一人で二人部屋を使っておるあのクラスの娘があつたじやろつ。後はそれとなくエサを蒔くだけでいい」

「……ああ、なるほどそういうことですか。たしかにそれであれば独りでに魔法に関与しそうですね」

タカミチは老獴という言葉の意味を噛みしめる。

「如何な天才といえど、完全に消された記憶は取り戻せんじやろつ。彼に使つた魔法は脳内の細胞自体を消滅させるからの。存在しない物を作り出すことは出来ん。仕方がないことだつたとはいえ、それが生きたわい」

『ていう会話が今頃されていると思うんだ。だからおシオは引っ越

しの準備しておいて』

『そんなに上手くいくもんか?..』

『大丈夫じゃないかな?』

『疑問系かよ、存外に不確かだな。まあいいや。準備しつぶやく』

『うん。お願い。じゃ、おやすみー』

『ああ、おやすみ、なごむ』

独自の秘匿性が高い念話を切り、少年は一人エヴァンジョン宅までの道を行く。

その後ろ姿を、物言わぬレンズがじつと捉えていた。

第5話・千雨

長谷川千雨が彼と会ったのはほんの一ヶ月ほど前のことだ。突然携帯に未登録のアドレスからメールが届いたのが最初であった。

? 麻帆良に違和感を覚える方へ

明後日曜日に麻帆良第一会館で開かれる麻帆良学生絵画展にて

来て下れ。

時間はそりそり任せします

時間が決まつたらこのアドレスに返信を下され

男子中等部一年富

崎なじむよ?

これを読んだ瞬間、千雨は恐怖し、警戒した。当然だ。見知らぬアドレスからほぼ本人指名でメールが届くということは、相手はこちらを知っているということだ。そしてなによりも、周囲との密な人間関係をほぼ断つている千雨のアドレスを知っている人間など限られている。ところよりも家族だけのはずなのだ。クラスメイトに教えると強制的な呼び出しがありそうなので、千雨は彼女達に携帯アドレスを教えていなかった。

だが同時に興味も引かれた。

千雨を指名しているとわかる最初の一文。麻帆良への違和感というものに心当たりがあった。いや、心当たりというよりもそれはすでに彼女にとって一種のトラウマともいいくべきシロモノであり、湧いた興味はすぐさまさらなる警戒心へと変換された。

なぜならその違和感なるもの、つまりは麻帆良という場所に蔓延

る非日常に彼女の精神は追い詰められ続けており、自身の中にある日常と周囲に広がる日常（非日常）との差違によって生まれる軋轢でストレスを感じない日などなかつたからだ。それに小学校の頃はそれを主張したせいでイジメられたこともある。もしまたこの違和感を外部へ出した場合に、異常であるのは千雨の方だと言われてしまつのが怖かつた。

彼女、長谷川千雨は富崎なごむと同じ、麻帆良学園結界と魔法使い達が呼ぶ認識阻害結界が効かない希有な人種であった。

故に誰一人としてその違和感を共感する者がいない中で突然手を差し伸べられても、新手の非日常が攻めてきたとしか考えられなかつたのだ。

事実その考えは間違いではなかつたのだが。

だが警戒心へと変換されてなお幾ばくか残つた興味に則り、最後に記載されていた名前を調べてみると、すぐにそれらしき人物は知れた。

麻帆良の学生によつて発行される麻帆良学生新聞のウェブ版に、同じ名前が載つていたのだ。

実際に富崎なごむなる人物は同学区に存在する麻帆良男子中等部の一学年に在籍しているらしく、毎年開催されている麻帆良学生絵画コンクールでここ四年ほど麻帆良賞なるものをとり続けていた。招待された麻帆良学生絵画展では、このコンクールで一定以上の判定を得た作品を公開展示しているらしい。その関連で記事と顔写真が掲載されているのを見つけた。

聞き覚えのない名前。見覚えのない顔。どう考へても長谷川千雨の知らない人物であつた。接点をざつと調べた限り同じ小学校であ

つたこと以外には見当たらない。憶えがないということはクラスが同じであつたこともないはずだ。唯一名字にだけは聞き覚えがあつたが、比較的よくある名字であり、同じ名字のクラスメイトの彼女とも千雨はあまり話したことがない。

だがとある画像を見つけた千雨は、それを見た瞬間に心臓を驚撃みにされたような感慨を覚えた。

それは富崎なごむが過去に麻帆良賞を取つた四枚の絵の写真であった。

全て麻帆良の風景やそこに住む人間を描いた物で、それは都市部であつたり、学園校舎であつたり、森であつたり、通学風景であつたりした。だがその全てに共通するものがあつたのだ。

絵のバックにある異常に巨大な木と、『不可思議な風景』と題されたタイトルだ。彼は全ての絵に同じタイトルをつけていた。

さらによく見てみると、各絵の中には日本の日常で考えると異常な光景が何点か描かれていることにも気が付いた。人垣の中から舞い飛ぶ人影。工学部校舎らしき場所より昇る黒煙。何隻も空に浮かぶ飛行船。何か強力な一撃で抉られたような傷を持つ木々。路面電車に掴まりながらスケートボードで通学する生徒に、ローラーブレードやそれに足で並走する生徒。

麻帆良に住む人間にはわからないであろうそこに込められたメッセージに、千雨は泣きそうになるのを堪えながら他に彼の絵がないか調べた。

富崎なごむなる人物は小学校低学年のときからすでに絵の才を示していたらしく、その頃から何点かそれぞれの学年に応じたコンクールで賞を獲っていた。ほとんどは画像がなかつたが、いくつか見つけられた物もあつた。ここ最近の物でも麻帆良学生絵画コンクー

ル以外への参加も多くあり、どこでもそこそこ以上の成績で入賞していたため、過去の上位入賞作品一覧の中に載っているのを数点見つけることが出来た。そのどれもが一度は千雨も異常だと感じたことがある麻帆良固有のものを描いており、彼がなにを求めて絵を描き出展を続いているのかが嫌というほど彼女にもわかつた。

気が付くと千雨は返信のメールを打っていた。

そして絵画展当日、千雨は悩んだあげく制服姿で麻帆良第一会館に向かった。彼女は過去の経験から人前に出るのが好きではなく、私服もこの歳の女の子らしいものは持つていなかつたため、無難なものと思つてのことだった。

予定の時間より早く着て入り口から順繰りに展示作品を見て歩き、最終的に目的地である今年の麻帆良賞作品の前で立ち止まる。彼女はあることに気が付いた。

今年の麻帆良賞も例の彼であり、タイトルも内容も麻帆良の異常を描いた物には変わりない。高校生以下の学生主体な展示のため全体的なレベルは低くなりがちなのだが、そこは麻帆良、入賞以上ともなるとプロと見間違うほどの物がぞろぞろと展示されている。その中でも彼の絵は一際素晴らしいものに見えたのだが、なにかがおかしい気がした。

気になつた千雨は他に並んだ作品群をもう一度見て回り、パンフレットも確認して、最後にまた麻帆良賞のところに戻つて来るとやつとそれが理解出来た。

麻帆良賞はその年のコンクールの中でも一番ではない。一番や二番は最優秀賞、優秀賞として存在し、それらは全国高校レベルの美術コンクールにもエントリーされるのだが、麻帆良賞はあくまで麻帆

良内部で評価された作品であるとしてそれ以上のエントリーはない。つまり外部に出ることはないのだが、どう見ても今年の最優秀賞作品よりも彼の絵の方がいい気がしたのだ。賞の評価基準も知らない素人判断であるし、絵の内容から来る千雨の蠱廻目があつた可能性もある。だがそこまで考慮しても、どうしても彼女には納得しがたかった。

そして思い出してみると、千雨がネットで確認した彼の絵は全て入賞はしていたが一番や一番ではなかつた。

釈然としない思いで絵を見ていると、そこで同じように彼の絵を見ていた大学生くらいの男女の会話が聞こえた。

「やっぱり彼は今年も麻帆良賞なんだ」

「子供らしさが足りないんかね？ でも冒険心は人一倍だしな、わ
かんねえな。俺的には始めて彼が麻帆良賞獲つた小四のときから、
優秀賞だつた高校生のと比べて遜色なかつたんだが」

「だよねー。早熟な人は大概ここら辺で壁にぶつかるものだけど、
まだ成長しているみたいだしね。見てよこの配色と立体感。大概ど
つちかに偏るのに、それもないわ。この盛り方はひょつとしてパテ
で全体デッサン作つてるのかしら？ ていうかおかしくない？ こ
のビビの入り方、わざとだしてるとしか思えないわ」

「わざとだろうな、焼きと圧縮の応用だ。本来は贋作を作る為の技術
だ。下手すつと全体ダメにするから、こんな冒険普通はできねーよ。
はあ、俺こいつ見る度才能の差を感じるわ。一昨年スゲー悔しかつ
たもん」

「でもあの年に賞獲れてなかつたら、貴方推薦きつかつたんじゃな
い？ それに冒険しすぎなせいか、彼はデッサン力が他の分野に比
べて低い気がするわ」

「だから悔しいんじやん。俺には練習で得たデッサン力しかねえつ
てさ。あんときは小学生で自分よりいい絵描いたヤツがいるのに、
のうのうと推薦受けてこの身が惨めになつたわ。ホント、なんで

「これでもっと上行かないんだか」

「うーん、やっぱり審査員受けが悪いのかな？ 纏まりのなさとか、年齢考えて時期尚早と見られているとか？ 不思議なものね」

そう言い合いかながら立体展示ブースに向かう一人の背を視線で追いかがり、ほとんど理解出来なかつた会話の内容を千雨は考えた。やはりその筋の人間から見ても宮崎なじむの実力は優秀賞以上であり、だが不思議と評価が低い。ということなのだろうか。そしてどうやら宮崎なじむも麻帆良に蔓延る非日常の一種らしいことは理解出来た。小学生で高校生よりも絵が純粋に上手いとは、十分に異常と言えるだらう。その上調べた限りでは彼は男子の成績上位常連でもあつた。

本来であれば千雨はこの思考に至つた時点で逃げ出していたろう。彼女は非日常に触れることを極端に嫌う。自分の中の日常というアイデンティティを壊されるからだ。

だが彼女は宮崎なじむの絵を見上げて待ち続けていた。

そこに込められた想いは紛れもなく自分と同じ、自己同一性を問いつける声であることも理解していたからだった。

見上げ続けながら考えてもいた。
何故評価が低いのか。

ふと脳裏をよぎった答えに、千雨は苦笑して頭を振つた。まさか、そんなわけがない。そこまで大がかりなわけがない。それこそ非現実的ではないか。自分もこの麻帆良の非現実にのみ込まれて来たのだろうかと、思考と視界が揺らぎ気持ち悪さを感じたときだつた。

「ここにまじめ。長谷川千雨さん」

後ろから声をかけられた。

振り返り、声をかけてきた相手を視界に収める。そこには記事の写真で見た富崎なごむがいた。警戒心が湧いて睨むような目つきになってしまったが、何故か千雨は得も言われぬ既視感を覚えてもいた。

「あ……こんにちは。富崎なごむさん、……でよかつたですか？」

「はい。予想しているとは思いますが、例の件でお話があります。ですがその前に、とりあえず外に出ましょか。ここは絵の具の匂いが酷いので、慣れない方にはきついかもしません」

「……はい」

確かにこの場所は絵の具の油の匂いや人の熱が充満しており、千雨も胸がむかむかしていた。先ほど感じた気持ち悪さもこれのせいだつたのかもしれないと彼女も考えた。

そして彼に着いていきながら、もしや先ほどの気持ち悪さが顔に出ていたのではないか、彼の絵を見ながら顔を顰めていたりしたのではないだろうか、それで気を使わせてしまったかも知れない、気を悪くさせたかもしれない、などと思考が巡らせつつ、当日中であれば何度も入館できるチケットを片手に第一会館を出て、同じよううに外に出て休憩しているらしき人達が集まっているオープンテラスがあるカフェテリアに向かう。

常連なのか富崎なごむはその店員らしき男性に手を振ると、男性が手で示した奥の席にかけた。千雨も彼と向かい合つように席を取つた。

それぞれ注文をとり、お冷やをちびりと飲んでから呼吸を整える千雨になごむが笑いかける。

「えっと、テラスの方がよかつたですか？」

「いや　いえ、ここでいい……です」

嘘ではなかつた。テラス側は天気が良いせいで店内より人が集まつており、日差しは気持ち良さそうだが千雨はその光景に気後れしていた。少し影になつているこの席の方が彼女は落ち着いた。

「普段通りでいいですよ。敬語とか、得意じやなかつたでしょ」

普段通りも何も千雨はほとんど人と話さない。若干対人恐怖症のきらいもあり、喋ること自体が最近ではあまりなかつた。それでも仮面を被ることには慣れていたが、思ったよりも現状に動搖しない割に、なぜか地であるぶつきらぼうな口調が出かかってしまうていた。逆に普段であれば外で他人と話すときはもつと緊張するものなのに、していなきことに今ごろ気が付く。先ほど彼に対する日々の負い目を感じたはずなのに。

いや、それよりなにより、

「……なんで得意じやないの、知つているん……だ？」

千雨は、どうせ同じ年だから問題はないだろうと開き直ることにした。いつも彼女であれば胡散臭いと感じたであろうなごむの柔和な笑みに、メールを読んだときよりも警戒心すら薄くなつていた。それはもしかしたら、彼が頼んだのが彼女と同じジンジャーティー一だったからかもしれない。それとも彼が今から言い出す理由からかもしれない。もしくはその両方なのだろう。千雨は直感的にそう思つた。

富崎なごむが、緩く握つた右手でテーブルを叩いた。第一関節だ

けが当たりこつんと音を広げると、違和感が千雨の体を透過した。

「約束を守りに来たんだ」

共学制であつた麻帆良小学校では、三年時と五年時の始めにクラス替えが行われる。一人の出会いにはその五年時始めに行われたクラス替えであった。

出会つてすぐには行かなかつたものの、あるとき千雨がなごむの絵を見たことを契機に一人は互いの存在を認め、意気投合した。他にはない唯一無二の共感は、それの中で閉じていた二人の心を至極簡単に繋いでしまつたのだ。

そして二人は一人になつたからこそ話し合い、理解していく。

如何に自分達こそが正常だと思つた所で、ここ麻帆良では自分達こそが異端である。そして現状はその異端一人ずつが一人になつただけであり、数の暴力の前では手も足も出ない。だからこそこれまで通り、否、これまで以上に自分達を守るため、互いの現状を表面的にでも維持する必要があつた。

同一年のほとんどの子供達よりも精神的に賢しかつた二人は、この年齢の時期に異性同士が仲良くすることで発生する問題に気付いていた。特に他に友人がいない一人である。一人が良くとも周囲が、クラスメイト達が別の意味で彼らを異端視しかねなかつたのだ。

そこに悪意が無くとも、加減を知らず容赦がない子供特有の思考や行動は、ややもすれば簡単に歯止めを失い暴走する。多くの物事を傷ごと受け入れてきたなじむと違い、千雨は特にそれに敏感であつた。

故に彼らはクラスメイト達から隠れながらその拙い交友を深めた。

一人じゃない。

当時の二人にとつては唯それだけで良かつた。

たつた一人の本当の友人である。自由に会える時間も限られてい
たし、傷の舐め合いもした。だからこそ互いを尊重し、知り合
い、一人であつた頃よりも強くなつた。

そして約束をしたのだ。

おかしいものを見つけたら、次に二人で会えるときにそれを教え
合つた。麻帆良の日常が非日常であることの証拠を見つけたら、
絶対に教え合うのだと。

約束したのだ。

だからなごむは儀式魔法に巻き込まれた当日に憶えていたアドレ
スにメールを送り、接触を図った。

そして魔法について、麻帆良について、宮崎なごむについて、現
在の自分が知る限りの全てを長谷川千雨に教えたのだ。

千雨は何度か反論や反証を提示しようとしたが記憶の欠落を指摘
され、五年生時六年生時の男子の席に、常に一箇所だけ思い出せな
い誰かがいたことを否定出来ないでいた。それに決まって二人が会
つていたという時間に関する記憶もない。

そして彼が使つてみせた認識阻害結界やその他の簡単な魔法に、
魔法の実在を納得するしかなくなつていた。

麻帆良そのものが魔法使いの巣であり、なごむの絵が麻帆良外に
出ることがなかつた理由にも納得出来てしまつた。あの絵を前にし
て、彼に話しかけられる直前想像したものがそれとほぼ同じ、麻帆
良が巨大な隠蔽組織であるという内容のものだつたからだ。

千雨はそれらが全て現実であると認めた、ぽろぽろと涙を流して泣いた。

泣き終えてお冷やを飲みほすとまた少し泣いて、空腹に気付き再度顔を上げたときにはテラスは閉められ、外では雲上に紺、遠く向こうでは朱が光を振り絞るように輝いていた。素晴らしい綺麗な夕日が、暖かいような寒いような、不思議な印象を伴って千雨を照らしていた。

そして頼んでおきながら一度も手を付けていなかつたジンジャーティーの存在を思い出し、口を付けてから泣き腫らした目でなごむを睨め付けたのだった。

「……二年前、私とあんたはなんで記憶を消されたんだ？ 魔法に接触しただけで、一人が互いに関する一切の記憶を消す必要があったのか？ 魔法に接触したことが原因であれば、その時の記憶だけを消した方が効率的だと思うんだが」

「うん。知りすぎたことと、情報交換のせいで一人が揃っていると魔法に接触する機会が確実に増えること、そして君の利用法を見つけたからだと思つ」

「……私の利用法、だと？」

「えつと、正確にはまったく別方向の性質の力なんだけど、魔法使い達から見て自分達は、同じとしか思えない認識阻害に対する強い抵抗力を持っている、ってのはわかるよね？ それはつまり魔法使い一般が使う方法では騙されないということ。魔力や氣を使わずともその手の結界を看破できるということ。そして君は自分とは違い、一般的な魔法使い平均のおよそ一倍ほどの魔力を持っている。鍛え上げれば一角の物になると思わない？ 特に固有の能力は、集団での行動において司令塔役で非常に重宝するだろうね。つまり、自分の逆だよ」

「……本気で言つてんのか？」

「現在のクラスメイト、おかしいと思つたことは？」

「……ああ、うわあ……へそお。あそこまるまるまるかよ……」

「まだ確証はないよ。でもやつと見た限り、君のクラスに関東魔法協会に正式所属ではない魔法生徒や、特殊技能持ちの一般人、魔法使いとして高い素質を秘めていたり、その片鱗を見せている同年代女子が集められているのは確かだよ」

「保護をするためって可能性はないのか？」

「もちろんその可能性もある。自分達が利用するためではなく、利用されるのを防ぐために纏めておくのは道理だから。他に才能や戦力がいかないようにするのも重要だしね。むしろ現在まで直接的な行動がなかつたってことは、多分保護が目的なんぢゃないかな。なにかあつて真っ先に異変に気付くのは」

「私だからか。確かに今のところは……異常だが、魔法が飛びぶよくな事態にはなつていないな。なら、危険だとは限らないんだな？」

「うん」

「……だがあんたが見捨てられていたのも事実なんだな？」

「おそらくはね。彼らの真意を知つてゐるわけじやなし、何故自分が放置されていたのかについては保留かな。現在の状況を考えると、才能がなさ過ぎて魔法側に連れ込むにしてもメリットが薄かつたから、つていう可能性が高いってだけだから。　あ、君の利用価値を計るための実験台だった可能性もあるか

「……そんな風に人を見捨てる奴らが、何故私達だけを保護するんだ」

「さあ、そこまではわからないよ。自分も正確な意味で魔法を知つ

たのは一昨日の話だし。追いつけて探つてみるつもりではあるけど

「逆に、あんたが私を魔法側に引きこもつとする最初の一歩である可能性は？」

くすりとなごむが笑つた。

「安心して、自分は君が望む通りにするよ。理由も報酬も入らない。自分がやりたいから、長谷川千雨の願いを叶えるよ」

ある種の異常性が覗ける発言に千雨は顔を歪め、咳く。

「…………なんで、その言葉が信用出来ちまつんだろうな…………」

だがその表情も咳きも彼に向けたものではなく、自身の内に向けたものであった。

「…………むの言葉は千雨の心の内にすとんと落ち着いて、彼が本当にそうするのだと彼女は納得してしまっていた。そしてそのことに不快感をまるで感じていないのだった。

「特定の人物の記憶を消したとしても、それまでにあつた人間関係から来る心の成長や変化は消せないんだ。影響されて変わった好みももちろんそのままだし、記憶を消しただけじゃ消された時の感情なんかは根強く残ることになる。あまり自分に警戒を抱かなかつたみたいだし、完全に自分のことを忘れているようだったら、君は今この話をまず全て否定で捉えていたんじゃないかな？ 非現実とか非日常とか嫌いだつたし。否定出来なくなつて許容せざるを得なくなつても、状況の把握に時間要したはずだよ。でもそうはならなかつた。

きつとそれだけ千雨は、自分の仕草とかを好んでくれていたつて

「じどだよ」

なじむの話を聞いてぽかんとしていた千雨は、理解が追い付くと共に徐々に顔を赤くさせていき、終いには真っ赤になつて叫んでしまつ。

「 なつ？！ なに言つてやがんだ？！ てめえなんて知らねえよ！！」

叫んでからハツとするが、魔法で他にはまるで声が届いていないため周囲からの注目はない。田の前のなじむはにこにこと笑うだけで何も言わないので、千雨は金魚よろしく口をぱくぱくさせてからふいとそっぽを向き、落ち着けるためにジンジヤーティーのカップに手を伸ばした。

ふわりとシナモンの香りが絡まつた思考を解き、舌先にびりりとくる生姜の刺激と、それを包み込むようなクリームの柔らかな感触が解けた思考を再編する。すでに冷めてしまつてているのは癪だが、これはこれで悪くない。冬使用のジンジヤーティーはこのシナモンと生クリーム入り限ると千雨は常日頃から思つていた。

だがそこでふと気付く、宮崎なじむの前に置かれたカップの中身も同じジンジヤーティーであることに。

それから思考が巡つた。自分はいつからこれを愛飲するよつになつたのだろうかと。これは紅茶としては所謂邪道系であり、どこのお店にでもあるようなメニューではない。第一これはカロリーも値段も高く、自分で作ると手間がかかる。だが食事には物ぐさな千雨が、これだけは寮でも自分で入れて飲んでいた。

思い出せない。いつからこれを飲むよつになつたのかが思い出せ

なかつた。

いや、もうすでに答えは田の前に居るのだ。ただ認めるのが冷めてしまつたジンジャーティーの如く癪なだけで。

つまり千雨の理性は認めたがらないが、感情的にはやはり認めるのもやぶさかではないのだ。

「……あつ」

千雨がカップの中身を一気に飲みほし少々乱雑にソーサーの上に下ろすと、なごむを睨んだ。

「……私の記憶も戻せるのか？」

「戻したい？」

「いや……今はいい」

「うん、わかつた」

「……私の、望む通りにするんだよな？」

「うん」

「…………ならこのままの私の平穏を守るのを、手伝ってくれ」

「このまま、を守ればいいの？」

「ああ、このままでいい。非日常の理由はわかつたし、それに今の話だと私も半分くらいは元から非日常な存在だつたつてことだろ？ 利用される危険性がある以上、外に出ただけじや新たな厄介事と出会うことも考えられる。当面はここにいても人払いとやらの結界を抜けなきや直接の危険はないみたいだし、だつたらこのままでいい。非日常もすでに日常の内だ。巻き込まれたくないけどな。私は外野がいいだけだ」

千雨は気付かないが、この選択こそがなごむと過ごした時間が、あつた証拠であった。自身も非日常の一端であることを受け入れる。それは彼女のこれまで（過去）が真に孤独であつたならば出てこない強さだからだ。そしてこれまでの自分の常識を支えてきた、その非日常を知覚する非常識な力を否定したくないという、彼女自身すらも気付かぬ矛盾と葛藤ゆえでもあつた。それに現在の千雨が本当に嫌っているのは、理解者がいない孤独だ。認識阻害された一般人では千雨が言うことを理解出来ず、ネット上にいる麻帆良外の人間もここで知ったことを伝えたところで信じない。魔法使いに至つてはまた記憶を消されかねない。

だが千雨にとつてこの田の前の非日常は理解者たり得ていた。

あの絵は、間違いなく長谷川千雨の心を捉えていた。

「それで、これは可能か？」

「千雨は今の自分にとつても大切な人だからね。君がそれで幸せになれるのなら、いくらでもやらせてもらうよ」

「なっ！……私はあなたのことなんて知らないんだぞ。記憶を戻さない限り、あなたの知っている長谷川千雨は死んでいるも同然だ。二人が交わした約束は教え合うことだったはず。なぜそれ以外の望みも叶えるんだ？」

「本当に死んでいると思う？」

「記憶がなければ、別人と同じだ」

「そう？まあでも、君はこの富崎なごむの真実をすでに知つているし受け入れている。自分にとつてそれで充分だけど」

「……私は、記憶を戻すことを拒絶したんだ。受け入れている

なんて、どうして言える?」「

今は、と冠を付けて断つたが、千雨が記憶の復元を拒んだのは怖かつたからだ。記憶を戻せば、ここにいる自分が自分ではなくなるかもしれないことが恐ろしかった。事の真実よりも、ここにいる自分がどうにかなってしまうかもしないことに恐怖したのだ。

断つても、目の前の存在が居なくなることを半ば本能的に理解していたから、ともいえた。

さらに言えばこれ以上の証拠が無くともなごむの話を信じていたからでもあった。

「少なくとも、話を聞き終えてなお否定していない」

「……それはあんたが他の奴に教えていないからだろうが」

「えっと、教えたとして、受け入れられる人間がどれほどいると思つ?」

母親の死の原因はなごむだ。父親がそれを許容するかどうかは微妙なところだろう。なにせ母はなごむの言う麻帆良の異常を受け入れたが為に共に森に入り死んだ。そして父は一度として彼の語る異常を受け入れたことがなかった。

魔法使い側に現在のなごむのことを教えて受け入れるかどうかも微妙だ。能力を見せつけられれば存在を認めはするだろうが、それは能力の利用やそこから湧く恐怖からだ。能力の由来やこれまでなごむにしたことを思えば報復が脳裏をよぎり、彼らが勝手に猜疑心を抱くことは想像に難くない。

逆に何も知らない、関係がない者に教えれば案外あっさり受け入れられるかもしれない。だがそんなことをする必要はもうなんどこにもない。

そしてなにより、なごむは彼らがどうでもよかつた。問われれば教えるのも別に構わない。だがだからといって積極的に教える理由

もない。当面は隠していた方が互いにとつて有益であり平穏である。

儀式魔法に巻き込まれた直後のはごむに確固たる目的意識などなく、眼前に広がるほとんどの物事に対しても冷め切らずとも熱することもない思考しか持ち合わせていなかつた。悪く言えば無気力。よく言えば中庸といったところだ。受け入れてしまつたものの強大さに、彼の思考は人としての感覚が麻痺したような状態になつていたのだ。変化を求めるわけでもなく、ただ茫然と流されるままそこにあること。可もなく不可もなく、あるがままであること。それだけであった。

ただ長谷川千雨には真っ先に教える理由があつた。宮崎なごむが宮崎なごむという人間の過去を受け入れこの世界に生きる以上、あの約束は非常に重要なものだつたからだ。だから千雨の平穏を冒すことにならうとも約束の履行をした。

つまりそこにあつたのはきっかけとなるものの有無だけなのだ。

そしてきっかけを持つていた千雨は宮崎なごむを否定しなかつた。記憶を復元するまでもなく、彼という事実を受け止め、棄却せずにいた。

非日常を否定し自分の内から排除し続けていた少女が、今まで見た中で最大級の非常識な存在を受け入れたのだ。

現在の少年にとって、彼女はそれだけで大切な存在たり得た。人は他者があつて始めて自己を認識する。このときのはごむも、千雨という存在があつて始めて一人の人と成れたのだ。

そしてその時点では唯一といつても過言ではない大切な人の不幸せを、彼は否定したいと考えたのだ。それがなんでも望みを叶えると、少々即物的且つ露骨で色気に欠ける申し出であつたわけであ

る。

自身と同じであるがためこぐれの音も出ない千雨は、なごむが追い打ちをかける。

「それに本当に受け入れられなかつたら、すぐにでもこの記憶の消去と約束の破棄を願つたんじゃない？ あとは能力の消去とか」

もつともである。

「あと人間は忘れる生き物だし、成長（変化）する生き物もあるんだよ。ちょっと忘れられたぐらいで、千雨を別人だとか言わないよ」

結局その日はカフュで食事を済ませ、携帯の番号を交換して、簡易な緊急避難装備を千雨が受け取つて解散となつた。

装備の見た目は安物の指輪。シルバーリング 中身も実際にそこのうで買った安物の指輪だったが、千雨に危機が迫ると自動発動する事象改变がなごむによつて仕込まれた代物だ。後に詩緒に渡すことになる眼帯に仕込んだ多胞体式事象変異魔法ではなく、純粹な事象変異能力である。そのため魔力も気も使わないが、一回しか発動しない制限が付いていた。

千雨はそれを一緒に受け取つた銀のチョーンに通してネックレスにした。

そして二人の能力上接触していることを知られると警戒され、千雨の平穀を冒される可能性が高くなるので、以降は何かない限り会わないことと決まつた。

千雨もその取り決めに異論はなかつた。理解者が存在する。そのことが重要だからだ。それに会えないだけで隠れて電話などは問題

ないとのことだつた。

ただ少しだけ、会えないとわかつたときに千雨はなんともいえない気分になつたが。

だがそれから三日後、サル・スプリングフィールドが麻帆良に現れたことでなごむは2 Aの存在理由を考え直すこととなる。そしてその情報はすぐさま千雨にも伝えられ、再開は早い内に行われた。

そしてさらに一ヶ月後、寮にある長谷川千雨の部屋に同居人がやつて来ることとなつた。

「つまりだな、あの糞爺はなごむを抱き込むために、千雨の認識阻害無効化とオレが持つていいと思つていい認識阻害抵抗を巡り合わせ麻帆良と魔法への疑問を促して、そこにきっかけを作ることでオレ達を自主的に裏に関わらせるつもりなんだよ」

「なるほど。過去の私となごむがなつたという状況を作るつてわけか。じゃあ私達は予定通り、逆に関わらないよう氣をつけて知らぬ存ぜぬを貫けばいいわけだな?」

千雨の部屋に予定通り入居してきた詩緒の荷ほどきを終えた二人は、ジンジャー・ティーを片手になごむが届けたマフィンで休憩していた。

二人の自己紹介は、千雨となごむの一一度目の会合時に詩緒が同行したことすでに済ませてある。当初こそ何故かけんか腰の詩緒と

それに反発した千雨とで口論になつたものだが、何度も秘密会合を重ねる内になごむの取りなしもあり、普通に話せる程度にはなつていた。

ただこの一人にとって普通に話せる人物というだけで非常に貴重な存在といえるため、自分達がどの程度親しいのかが互いによくわかつていなかつたが。

「ああ。どのみち奴らはなごむとの契約上強行手段は不可能だし、なごむの反感を買うことを恐れているからな。必然搦め手を使つて来る可能性が高くなるが、それを回避するために実はオレがいるつづう現実がある。策もいくつかもつてきたから安心しな」

「だけどよく学園長達もなごむと接点があつた私と詩緒を同室にしたな。最悪の可能性は考えなかつたのか？」

「だからこそなんだろうぜ。奴らはなごむを現実的だが一般人思考の甘ちやんだ、と侮つてるからな。記憶を消去することになごむは表面上否定的ではない態度を取つたから、もしバレたとしても必要な事であつた、で終わらせるつもりなんだろ。そしてそこから千雨やオレごと取り込むわけだ。ま、このタイミングでオレ達を同室にしたつて事は、保護ではなく『アレ』に対する生け贋で決定だな。もうあいつらに容赦してやる必要はねえわけだ」

「……はあ 学園長共も大概だが……全部、あいつの計画通りなんだな……」

「だが行動指針を決めたのはお前だぜ？ 長谷川千雨」

「わかつてゐる。力も何もない私の保身（甘え）の為に動いてくれている一人には感謝している」

「ハンツ、オレはなごむの頼みだから聞くだけだし、どちらにせよこのままいけばどこかしらで復讐のタイミングは掴めるようになる。なによりなごむの近くに居れるんだぜ。わりい話、じやなかつただけ

だ

「……ツンデレかよ」

「よく言つぜ。お前の決めたアレだつてお人好しなツンデレちゃんじえねえか」

くくつと笑い合つ。

口は悪くとも、お互に話の筋が通つていて敵意や嫌疑感情がない存在というのが心地好かつた。

詩緒はその出自や経歴から、ほとんど問答無用で盲目的で狂った正義と戦わされるような生活を強いられてきた。

千雨も常に自分の正気を疑い続け、話し相手との会話の齟齬や常識を説いたときに向けられる訝しげな視線に心を削られ続けてきた。両者に共通しているのは不条理だ。各個人よりも周囲の問題的な部分で晒された不条理こそが、二人の過去を埋めていた。

誰にだつて不条理な運命は襲いかかる。まだ生きていられた分だけ一人は幸運な方であつたとも言える。だが元来一人とも理路整然とした思考を辿るタイプの人間であり、だからこそ不条理を余計に嫌うし非合理的な物事に忌避感を持つ質であった。

詩緒はその辺りも色々と吹つ切つていたが、だからといって本質は変わつていない。嫌なものは嫌なのである。

千雨は言わずもがなだ。

彼女の場合は詩緒のように本当の意味での裏をまだ見たことがない。なごむと詩緒の一人から聞いた話でしか知らず、どこまでも甘えた部分が残つていて。だが彼女は知識を持ち、幻想に惑わされないが故に想像も出来てしまふのだ。想像してしまうからこそ考え得るこの麻帆良の暗部に苦悩し、そこに晒され続けていた過去と現状を知つてからはその不条理に一人毛布の中で震えもした。こみ上げ

る怒りや恐怖に涙も流し、逆流する胃液で喉を焼いた。

互いに立場や覚悟の違いはあれど、不条理を不条理として知り、自分の中にある不条理を認めて条理で歩こうとする一人は気が附たのだ。

だけどなにより、ぶっちゃけてしまつと一人は魔法使い達によつて被害を受け続けた存在であり、敵の敵は味方であり、そして、

「もう一杯」

「自分で入れるよ。ついでに私のも入れてくれ

同じものを愛飲する同士なのであつた。

第6話・謀議

「ジジイ来てやつたぞ」

明日から冬休みとのある放課後、数日前と同じように問答無用で学園長室にエヴァンジェリンが入ると、その後に「失礼します」と彼女の従者と弟子の二人が続いた。

部屋にいた者達の視線が、その弟子の方に集まる。

そんな視線になどまるで気付いていないかのように彼、富崎なごむは、顔見知りを見つけると薄く笑んで会釈した。

された桜咲刹那と龍宮真名は多寡は差はあれど驚きの表情で会釈を受け取る。

近右衛門がそんな彼女達を愉快そうに眺めたあと、口を開いた。

「揃つたようじやの。それではさつき話した内容すでに察しとすると思つが、彼が今度から夜間警備に加わることなつた」

「学園長先生、お話の途中ですがよろしいでしょうか？」

だがそれは聖ウルスラ女子高等学校の制服を着たプロンドヘアーの少女によつて遮られた。

「なんじゃね？ 高音君」

「なぜ『闇の福音』の後に彼が着いて來たのですか？ 私達は今晚、新しい魔法生徒の紹介とその魔法生徒を夜間警備に加えるための打ち合わせで集められたとお聽きしていたのですが

彼女の近くに立つ肌黒メガネの男性教諭が一瞬止めようとしたが、彼ら以外の皆も疑問に思つていた内容だつたのであってそのまま質問を続けさせた。

「Hガアは遊軍じゃが、第一Hリアの警備もしどりゅじやね。他区を主管轄にしとる者達は後回しとしても、彼女の打ち合せ参加は必要じやと思つたが、なにか問題でもあつたかの？」

「いえ、そうではなく

「誤魔化す必要もないだろ」、「ジジイ」

HガアンジHリンがにやついた口で割り込み、睥睨するような視線を周囲に向けた。そんな彼女の態度が気に食わなかつたらしく高音と呼ばれた生徒がHガアンジHリンを睨みつける。

「貴方は自身の身分を弁えて

「

「高音君。ひょつといいかな？」 学園長

声を張り上げた高音を高畠が止め、近右衛門になにやら許可を求める。

それに対しても近右衛門は「うむ」と頷きで応えた。

「おそらく君が疑問に思つてこむ」との答えはね、彼の魔法の師がHガアだからだよ

「その回答は、魔法使い達がどよめいた。

「どうこういつですか学園長。『闇の福音』に弟子をとりせるなど…」

「やうですわ！ 彼女に師事せらるなど、悪を増やすことになりかねません！」

「なぜそのような無謀なことを

「第一、封印されていいる『闇の福音』に歸など務まるのか？」

「あの方は恐そうに見えないけど……恐い人なのでしょうか？」

「へえ、これはまた……」

「……一体いつからだ……？」

だがその騒ぎを止めたのは意外な人物であった。

パンパンと手を叩き合わせた渦中の人物の一人、先ほどまで黙っていた宮崎なごむである。

その様子に近右衛門が慌てたように手を伸ばし、「儂から説明を」と続けようとしたが、気付いていないかのような態度で彼は話を進めてしまう。

「えつと、それら経緯を纏めた物をご用意してましたので、こちらを『ご覧下さい』

そう言つて彼はいつの間にか手に持つていた紙ヒローを学園長室の中央に向けて飛ばした。

紙ヒローはほんの少しだけ前進するとすぐぐるりと一回転、先頭を上に向けるとそのまま上昇し、今度は天井を突く前にまた回転して下を向くとバラリと紙束に化け、かと思うとその紙束は一枚ずつその場にいた者達の手元に落ちてきた。

突然の出来事に全員がその様子を見送つて呆気にとられていた。

「式神召喚符の応用か？ 面白い術だななごむ。いつの間に作った」「さすがに分かりますか。さつき作ってみたんですけど、でもまだ甘いですね。手元に届かなかつた方がいたのか、少々余ってしまいました」

誰の手にも捉えられず、足元に落ちてしまつた数枚をなごむが拾い集める。

「あ、それを読んでいただければ自分がなぜエヴァを師事することになったのかがわかると思います。それとこの警備エリアに入れていただくことになった理由もありますので、しつかり最後まで読んで下さいね」

言われて未だ呆然としていた者達が手元の資料に目を通して始める。何人かが読み進めるほどに顔を青くさせて資料となごむとを交互に見たり、震えながら白くなつた顔を上げる事が出来なくなるなどの様相を浮かべていた。そうでない者達は確認するように周囲を伺い、様子のおかしい者を視界に收めると困惑や憂慮、中には侮蔑の表情を浮かべる者もいた。

近右衛門とタカミチは資料に目を通すとそのどちらでもなく、唯々なごむことを見ていた。

「……学園長。ここに書かれていることは事実ですか？」

口火を切つたのは、詩緒やエヴァンジエリンのクラスメイトでもある朱石祐奈の父、朱石教授だ。

「うむ。全て事実じや」

「彼が我々の記憶消去のせいで死にかけていたのも、そのことを学園長が把握していくにも関わらず放置していたのも、それを救つたのが『闇の福音』だというのも、事実なのですか？」

次に怒りに震える手で資料に皺を作る肌黒メガネの男性教諭、ガンドルフィーーが資料から顔を上げないまま近右衛門に問うた。

「結果的には、全て事実じや」

近右衛門はこのとき、なごむに悪感情を抱かせないためにこの資

料公開を受け入れることにした。自分の方から説明し、誤魔化せるのであれば誤魔化したいところであつたが、こうなってしまってはどうしようもない。なごむが公開した資料にはエヴァンジエリンが確認することが出来た記憶消去回数と時間量、そしてその結果起きる可能性があつた脳障害例。そして普通なら麻帆良での人生で一度三度とあるかないかの記憶消去を複数回された理由と、近右衛門の関与、エヴァンジエリンがなごむを弟子にするまでの経緯について記されていたのだ。

近右衛門にとつて幸いであつたのは、近右衛門は特殊一般人資料に書かれているとおりの回数と時間量にしか関与と把握をしていかつた、ということになっていたことだろう。その時間量だけでも十分に人が狂えるものであつたが、あの非常識すぎる回数と時間量については近右衛門の関与について問い合わせられていなかつた。だがそれでもなごむが人払いを抜けて巻き込まれる可能性を考慮できたはずなのにも関わらず、放置していたことは明記されてしまつていたが。

「なぜですか？　なぜ把握していたにも関わらずこのようなことを？」

ガンドルフイーーの糾弾の声が室内に響き渡る。
近右衛門がまぶたを閉じて重々しく語り出した。

「彼の認識阻害抵抗は別格じゃ。特定の魔法効果に対してもみとはいえ、抵抗ではなく無効化していると言つても過言ではないほどなのじや。だが彼を鍛えようにもそれ以外の彼の当時の才は乏しいとしかわからず、魔法が飛び交うこの裏に関わればすぐに命を散らせることしか想像できんかった。かといって彼を外界に出しても見出されれば利用されるのは目に見えておるし、認識阻害が効いていなかつたせいで外界に出ると逆に齟齬が生まれ、彼の特異性を発見さ

れる可能性も高かつた。彼は度々絵で麻帆良の裏を描いておつたからなのう。　じゃが結局そうやつてなにも決めきれないままざるすると引き伸ばしてしまい、以降これといつて彼に不幸が降りかかるという報告もなかつたため、儂の孫が魔法に触れずに暮らせていくのと同様、なんとかなつてゐるものだと思つとつた。……全ては儂の注意不足と傲慢さが原因じや。富崎君には本当に済まないことをしたと思つとる。本当にすまなかつた。この通りじや

「近右衛門がなごむに向かつて頭を下げる。

対してなごむはそんな近右衛門に許しを与えるでもなく、ただ黙つてその長い後頭部を眺めていた。

学園長室を長い沈黙が支配し、各自の心臓の音すらもうさく感じじるほどになつたところで、再度なごむが柏手を打つた。そして口上を始める。

「えつと、わざわざみなさんにこのよつた自分の恥ずかしい過去を公開したのにはわけがあります。まあすでにご理解いただいけていると思いますが、同じ様な被害を今後出さないようにしたい、ということです。資料最後の一冊学区及び寮区周辺への独自の結界展開も、自分にとつて大事な人がそこにいてその人も認識阻害が効き辛い傾向があるためです。これらを呑んでいただけるのであれば、自分の身に起こつた出来事を問うつもりはありません。他の人にもすでにやつていた、という場合については知りませんが、自分からはそれだけです」

人によつて打算か理解かは違つたが、数人の魔法先生や生徒が言葉をのみ込み、なごむに頷いてみせる。

だがもちろん頷かない人間もいた。その内の一人、先ほど高音と

呼ばれた少女が口を開いた。

「……謝罪を、学園長先生の謝罪を受け入れないんですの？」

な」むが首を傾げる。

「自分の要求は伝えましたが」

「なつ？！ 田上の人間が頭を下げたのですよ！ そのことにに対する何かしらの」

「このじゅよ高音君。彼は今の要求を儂が呑み下すれば謝罪も要らないと言ったのじゅ」

「ですがっ！ 学園長先生！」

「ほほほほほ、すまないのつ宮崎君。彼女は良い子なのじゅが少々生真面目な」

「いえ、それもといえばそれもなのですが、えっと、でもそうではなく、不真面目な態度の謝罪なんて要りませんということなのです」「困ったように、本当に困ったようにな」むが頬をかきながら訂正をいた。

近右衛門と高音、そしてそれ以外の魔法関係者達の表情が固まつた。ただにやりと笑うエヴァンジエリンや、極々限られた者だけはああやつぱりといった顔をしていたが。

「……なにか儂の方で他にも不手際があつたよつじゅの。すまぬが、それを教えてもらつてもいいじゅるうか？」

「構いませんが……。その、謝るときくらい椅子に座つていいで立つて頭を下げたらどうですか？ 腰をどうにかしたというわけでもないのでしょう？」

至極当然のことであつた。

表情が固まつていた者達の口がぽかん開いていく。

「まあ正直言つて、自分も前回お話したときは人の話を聞くよつな態度でもなかつたですし、他人に言えた口ではないのです。ですがあの時は学園長先生が入室一番にどくし

「すまなかつた富崎君」

気付けば近衛近右衛門が席から立ち上がり、頭を下げていた。
彼のすぐ側では高畠が冷や汗をかきながら笑んでいる。
だがなごむの表情は動かない。

「……えつと、どちらにせよ謝罪は受け取りませんよ。謝ろうと思えば前回の会談時に謝れたのです。御託は要らないと言いましたが、謝罪まで要らないと言つた覚えはありません。なのに謝らなかつたのは貴方です。そして自分は要求を通してました。そのような謝罪など、今更過ぎませんか？」

それでも近右衛門は頭を下げ続けた。下げるその面で、自身の不備や見通しの甘さに眉を顰めていた。

椅子に座つたままだつたのもそうだが、謝るべき時に謝らなかつたのも完全に近右衛門自身の非だ。彼はこの席に長いこと座り続けたせいで、富崎なごむに関して何とかなつていたせいで、立場と状況を見誤つていた。富崎なごむを下に見過ぎていた。今更ながらにこれまで彼に打つた手で他に悪手がなかつたかどうかを考え出すが、彼次第で全て悪手に繋がりそうであることに気付き、さらに顰めることとなつた眉間に誰にも見せないよう腰を下げ続けた。

だがそれでも彼はどうにかなると思つていた。

そして実際にそればかりにかなつた。

「……すみません。自分も強情でしたね。学園長先生の誠意を受け取らせていただきます」

近右衛門はこのとき思つた。やはり彼はまだ子供である、と。

だがなごむも思つていた。このくらいで引いておけば今後も最後の詰めが甘くなるだらう、と。

本当はもつと責める事も出来たのだ。先の説明でもなごむの処遇を決めかねていたといったが、それであればなごむの存在を通達しておくだけでもするべきだつたのだ。たつたそれだけでも、だいぶ結果は違つことになつていただろう。龍宮真名が以前後方支援時になごむを見つけていたように、事前に彼の動向をチェック出来るよう処置をしておけば、記憶消去が必要となる機会は確実に減つっていたのだから。

「ありがとう宮崎君」

「いえ」

近右衛門が面を上げる。それをなごむが受けれる。傍聴には諂いが起ころうずに済んだ場面であつたかもしれないが、両者とも内心は碌でもなかつた。

そして未だ治まらない気持ちを持て余している者もいた。やはり高音である。

「……いるなん。それだけではありませんわ。悪の魔法使いである『

闇の福音』の弟子になるなど、許されたことではありません。いくら彼女に助けられたといつても、それは結果論であり出会った当初は攻撃されているではありませんか。魔法使いは正義であるべきなのです。別に彼女に義理立てする必要もないのですから、他にいい師を見つけるなり、ちゃんと魔法学校へ通うことをお勧めいたしますわ」「

「こいつは義理立てているわけでも、肩を持っているわけでもないぞ」

それに答えたのはエヴァンジエリンだ。少女が幼女に険の籠もつた視線を向ける。

「第一その資料を読んでなお、加害者側がなごむに正義や悪を訴えるとはな。それにお前たちとて、魔法侵入者にはほとんど問答無用で攻撃を加えているではないか。そして私もそれをジジイに許可されている。」

認識阻害を通り抜けてきた正体不明の存在に攻撃し、拘束した。初手に出したのは威嚇射撃だ。もしこれが一般人であつたなら私が記憶処理をしておくだけ。だが今はたまたま記憶を消せば死ぬかもしれないことに気付いた。気付いたからこいつの能力を調べた。調べた結果興味深かつたから生かすことにした。

お前たちだつて同じ情報を得ていたら同じ様な行動をしていたんじゃないかな？ 私の行動のどこに非や矛盾がある？

ああそういえば、記憶消去の魔力痕の中に、お前の魔力によく似たものがあつた気がするな」

「 それ、は……」

エヴァの言うことに反論が思いつかなかつた高音の声が小さくな

る。

なごむに心当たりもあるのだろう。だが高音がどういった事情でなごむの記憶を消去したにせよ、それが彼女の方から勝手かつ一方的に魔法を教えて消去したのでもなければ、この場にいる魔法使い達のほとんどは彼女を責めることが出来ない。今のエヴァン杰リンの発言も彼女を責めるためのものなどではなく、なごむが本当に誰にも義理立てていないことの証明であった。

一般人に魔法に触れられそうになつたら記憶消去する。これは本来上司などの許可を求める規則となつてゐるが、世界各地に存在する数え切れないほどの一人者の魔法使いに許可をとる対象など存在するわけもなく、彼らは個人の裁量で記憶の隠蔽処理を行うこととなる。そしてその個人裁量は、一般人と魔法使いが混在する麻帆良の魔法使いにとつても魔法バレの線引きの曖昧さと発生件数の多さから非報告が常習化しており、自分こそを最上としているエヴァンジェリンも当然のように非報告自己裁量でそれらの処置を行つてきただ。

それでも麻帆良でなごむのような症例が表沙汰にならなかつたのは、一度に消したとしても多くて一日分の記憶、少ないと数分の記憶にしか手を出さないことに、大概が消去ではなく封印や改竄による処置となるため脳へのダメージも少なく済むこと。回数も一生で一人当たりが三回いけば多い方であること。そしてなによりも、問題があれば麻帆良の統治者が握り潰してきたことが大きかつた。

だから魔法学校で一度は習うはずである過度の記憶消去や封印の危険性は軽視されるようになり、ここにいるほとんどの者が資料を読むまで忘れていたのである。まさか記憶消去で人が死ぬなどと、大概の者が微塵も思つていなかつたのだ。

被害者であるなごむが発言する。

「エヴァは初撃を外して警告してくれたからね。怪我なんて縛られた跡ぐらいしかなかつたし。いやあ茶々丸さんに拘束されてエヴァに足蹴にされたときときたら、魔法撃たれたときよりも衝撃的だつたよ。……うん、まあそれは置いておいて。自分に教えることが出来るほどの使い手となると、聞く限りエヴァが学園長先生ぐらいしかいないんじゃないかな？」

「……我々では不足と聞こえるのだが？」

色々と無視して最後の言葉を聞きどがめたのは、オールバックにサングラスをかけた強面の男性教諭、神多羅木だ。

「うあ、えっと少々語弊がありました。正直なところ、自分は戦闘に向いた才能がまったくありません。魔法戦闘の訓練をするだけ無駄なくらいの才能がないんです。魔力量も一般人の半分以下。気にしては四分の一以下。体術の才能もまるでなく、もちろん戦闘経験もありません。痛いの嫌いですし、したくないことはしたくありません。ですので普通に魔法を教えられても、意味が無いんです」

その散々たる無能っぷりにつつかかっていた高音も鼻白んだ。資料にも書かれていたとはいっても才能がなく、その上やる気もないのでは確かに教える気はならない。

記憶を消されたときは、そのやる気の確認もなにもなかつたわけだが。

「なら私が魔法を教えよう。なにも直接戦闘が魔法戦ではない。君は認識阻害抵抗という独自の武器もあるのだし、たしか絵が上手く学業の成績もよかつたはず。想像や計算は得意なんじゃないかな？ なら幻覚や情報戦の方が向いているのかもしない」

メタボ氣味な腹を一撫でしつつそつ提案したのは式集院教諭だ。

「僕も痛いの嫌いで障壁や結界が得意だから、その辺りなら教えられるよ」

今度は教師陣の中で一番若い糸田の男性、瀬流彦である。

「おー一人ともありがとござります。ですが自分はまだエヴァを師事したいと思つてゐるんです」

だがなごむはそんな親切な申し出を断つてしまつ。

「なぜですか？」

「他の方よりもエヴァの下が安全だからですよ。自分にとってエヴァは信用できる存在ですから」

どんなに言いつくるつても、ここに所属する魔法使い達の中にはなごむの記憶を消した者達がいる。そして彼はそれによつて死にかけた。

本当は記憶などとうに復元してあるが、していいことになつてゐる今の富崎なごむが魔法を教えたエヴァンジェリン以外の他の魔法使いを無闇に信用する事がないのは当然だ。

だがだからといってエヴァンジェリンの元が安全かといつて、それには大きな間違いだ。

「彼女は真祖の吸血鬼ですわ。側にいれば知らぬ間に襲われ、吸血鬼にされてしまいかねません！」

そう、吸血鬼は血を吸い仲間を増やすのである。その能力の一つとして、洗脳と同義な魅了もある。

だが、

「エヴァは魔力が濃い女性の血が好みだし、薄味の自分のは襲う価値もないらしいですよ。それに真祖の吸血鬼にとつて血は必須ではなく、完全な眷属化もエヴァは誇りがあるからやりません。実際にエヴァは今まで人形やガイノイドの従者しか連れていらないじゃないですか。過去歴を調べても他の従者の記述はありませんよ。一時的な眷属化はありますが、恒久的なものはまずないと言えるでしょう。ですよね？」エヴァ

「ああ。大昔に吸血鬼にしてくれと頼んでくる輩はいたがな。そういう奴らは決まってする価値もないやつらばかりだった。結局これまで眷属なんぞ持つたこともない。

それにもしなごむを眷属にして洗脳し、こいつの大事な者に手を出してしまった場合、眷属化が解けた後が面倒くさすぎる。やる気にもならん」

一人ソファに腰かけ、どこから出していつ入れたのか茶々丸から受け取った紅茶を飲むエヴァンジエリン。最後の方は声が小さくなつていたが、しつかり耳に入れた数人がその真意を確かめようと口を開きかける。

しかしその前に、高音が激情の趣くままにエヴァンジエリンに詰め寄った。

「そんなもの、信じられるわけが……！」

「自分は信じられますよ。だってエヴァの過去を覗きましたし」

ブーッと紅茶が高音に吹きかけられた。気道に入ったのかげほ

げほとむせ続けるエヴァンジエリンにな」「むは追い打ちをかける。

「本当は永遠を生きなくちゃいけなくなるから、仲良くなるほど認めた人の吸血鬼化はやりたくないんですねもんね？」

やつと復活したエヴァンジエリンが「いつ覗いたあああ！」と斜め後ろに従者よろしく立っていたなごむに目にも止まらぬ速さで躍りかかる。だがその獣じみた攻撃性は黒く透明な壁に阻まれて止まり、さらにその上からビデオテープに似た黒い帯がどこからともなくやってきて彼女の全身を拘束してしまうと、ついには猿ぐつわをされて頭部以外の全身を黒い卵に埋めたような形にされ、茶々丸の腕の中にぽすんと投げ込まれて頭を振ることしかできなくなつた。

突然の出来事にほとんどの者が反応できなかつた。
できた者も武器に手を掛けたり、魔法発動キーの冒頭を唱えたときには、すでに真祖の吸血鬼は無力化されていた。

「むー！ う、ー！ と暴れる、柔らかそうな金糸束がはみ出た黒卵になごむが笑いかける。

「嘘ですよ。大体にしてですね、六百年以上を生きるエヴァの人生を覗き見るのは時間がかかりすぎます。必要な箇所を見るのも運の要素が強すぎます。単にエヴァの蔵書を見ていたから貴方がどんな人生を歩んだか、なんとなくわかつたのですよ。自分も独りの経験がありますから」

言われて、真祖の吸血鬼はその足掻きを止める。

彼女の蔵書群をなごむは、「一部を除いた自由な閲覧を許可されていた。そこで彼は吸血鬼から人へ戻る方法が記された書物などに着いた手垢に気付き、彼女について聞いていた話とでもしやと思つ

ていたのだ。

それにわざわざチャチャゼロという人形を創造して自意識を「え、第一の従者にして何百年とすごしていたのだ。誰に聞くでもなく、これだけ情報があれば如何に残忍にも残酷にでもなれる真祖の吸血姫といえど、その存外に単純な思考などすぐにはいた。

真祖の吸血鬼となつたことで孤独となつたエヴァンジエリンと、認識阻害を受け付けないが為に孤独であつたなごむ。実際の状況は色々と込み入つていたし、二人は見目も近況もましてや歩んできた道程もまるで違うものであつたが、ただ孤独であつたという過去を持ち、それを自分で受け入れてしまつていたという点においては相似であつた。

黒い拘束が解かれ、エヴァンジエリンが茶々丸の腕から降りる。

「……不愉快だ。帰るぞ茶々丸」

「嘘吐いてごめんなさい、エヴァ。とりあえず今日はもう家に帰つてゆつくりしていて下さい。茶々丸さん、後ほど連絡事項を伝えます。夕飯はどうなるかわからないので、自分の分は用意しなくていいです。送りますのでそのまで」

「はい。なごむさん」

真祖の吸血鬼とその機械仕掛けの従者の姿が淡い光に包まれ、周囲を囲んでいた者達の目から二人の遠近感が急激にずれると共に消え去る。

しばしの沈黙が訪れ、取り残されて呆然としていたガンドルフィー二が呟いた。

「……今のは、一体……」

「今のは自分が作った封印拘束魔法と、転移魔法です」

「作った？ 転移魔法を？」

「はい」

二人の間で交わされた会話の内容が、学園長とタカミチを除いた者達の中に染みこむまでこれまたしばしの時間要した。

「 そんなバカなつ！」

意味を真っ先に理解し、叫んだのはまたしても Gandalf だ。

「 真祖の吸血鬼を拘束する魔法と、複数の他者を同時転移させる魔法を作ったなど 」

封印されているとはいっても、真祖の吸血鬼。それをほとんど何の抵抗もさせずに拘束してしまった事実と、さらには元から高度な転移魔法の中でもさらに高度な複数人転移を媒介も無しに個人レベルで行うなど、魔法使いとしてすでに上級者の域だ。

だがそれよりなによりも、いくら戦闘面では弱いといつてもそれ以外の面、魔法制作や補助に関しては魔法使いとしての域が上級者どころではなくさらに上、上の上級か準最強クラスに届く域にあるということになる。

「 本当じゅよ、 Gandolf 二君。宮崎君はエヴァから魔法を習い始めてたった一日で、まあちょっとズルして実時間にすると二十日ほどのらしいがの、先ほどの転移魔法やその他多くの歴史的発明をしてあるのじゅ。そしてその全てが彼自身が使えるように非常に魔力コストが低く効果が高いものばかりじゅ。実際にこの部屋には防諜や対奇襲用に転移防止結界が張つてあるが、彼の転移は防げとらん。既存のどんな魔法でもないということじゅ。彼はの、魔法の

常識をひっくり返すほどの天才的な魔法発明家なのじゃよ

再起動から、わあお、と冷や汗と共に呟いたのは瀬流彦だ。

「それなら確かに、僕らじや教えることはないですね。逆に色々と教えてもらいたいよ。　ああ、もしかしてさつきの紙ヒコーキも？」

「ええ、式神召喚符を応用して一つの物を複製し、複製物に簡易な命令を加えることで魔力反応がある方向へ飛ぶようにしたんです」

召喚術などは基本、地獄や異界にいる鬼や悪魔の魂を投写し疑似顕現として地上に義体を形成させる魔法である。そのため地獄と地上の両方に同じ鬼や悪魔が存在している状態を作ることとなり、その義体に服従を刷り込むことで召喚者の命令を聞かせるのだが、なごむはその義体を創造し召喚するシステムを、擬似的に物体を複製する魔法と捉えることで低級霊を憑かせた一枚の紙を複製し、さらには刷り込みによって外力が加わらない極々簡単な指令であれば実行するようにしたのだ。外で風に吹かれてしまつただけで紙が手元に届かなくなる、完全なお遊び魔法であった。

「えっと、まあそんなわけで。自分は積極的な戦闘力はないのですが、見ての通り自動型、自立型の結界や障壁、それに封印拘束を自分にかけていて、転移が得意です。あと魔法を作るのも得意ですね。そして自分は個人的にエヴァに対し意見することもでき、なにかあっても先ほどのように封印拘束することも可能です。魔法球内で使用した際も問題なくエヴァを拘束出来たので、彼女の呪いが解けたとしても実質自分にとつては脅威ではないのですよ。弟子でいるのも彼女が持つ知識や知恵を得るために、彼女が暴走して自分の大切な人を襲わないよう、監視するためです。これは一応彼女の同意あつての監視となります。それに彼女は自分と利害関係において

ても契約を交わしており、もし自分や周囲の者達に害が及べばその契約が即時破棄されるため、自分の間は襲うということ自体がまずありえないと考えています。

あ、さらにですけど、お見せした術式の知識を麻帆良に公開する準備もあります。結界とか障壁はさつきの捕縛同様、魔力や気を抑えて拘束する類のもので、召喚された鬼などの義体にも効果があります

矢継ぎ早ななごむの説明に未だ大半の者は目を白黒させていたが、若干名はその意味するところを理解し始めていた。

意見を聞いてもらえる。封印が解けても拘束可能。利害による契約関係。当人の同意による監視。強力な魔法の公開。そして先ほどは少々喧嘩気味であつたが、あれは半ばじやれ合いであり関係も良好なようだ。つまりそれは彼、富崎なごむの存在そのものが『闇の福音』の抑止力になるといふことだ。

なごむはエヴァンジェリンの側を安全だと言つていたが、先ほどまでの状況ではそうとは言い難かつた。確かにエヴァンジェリンはなごむやその周囲を襲わないだろう。だが彼女を悪の魔法使いとしてしか見えない正義の魔法使い達が、弟子であり強力な魔法を使う彼を危険視して彼や彼の周囲に手を出す可能性があつた。彼にとつて本当に危険なのはエヴァンジェリンよりもこの魔法使い達の方なのだ。集団である分思想が行き先を求めて暴走を起こしやすい。だが彼は明言した。監視するため、と。この発言はこの学園長室から麻帆良の魔法使い達全員へと伝わっていくだろう。もちろんエヴァンジェリンは除いた全員だ。そして彼からもたらされた魔法があれば、例え彼が彼女の側に着こつとも、誰でもエヴァンジェリンを止めることが出来るようになる。集団心理に余裕が生まれ、暴走が起きる可能性もぐつと下がる。最後に問題となるのは彼に対する罪の意識

の暴走と、そこから発生する猜疑心だが、それも逆に『闇の福音』の弟子であることでちょうどいいのかもしれない。あとは近右衛門が各所に手を回せば良いだけだ。

非の打ち所がない内容だった。

否、一箇所だけ不透明な点があつた。

真っ先にそれに気が付いた近右衛門が問う

「小説の歴史」

「身体の成長です」

ほう、と近右衛門は安堵と感嘆、そして歓喜が綺い交ぜになつた息を漏らした。彼はその契約が、エヴァンジエリンに十五年間かかりっぱなしになつてゐる登校地獄の解呪ではないかと思つていたからだ。だが身体の成長であれば麻帆良に害はなく、その上確かに彼女が求めそうな内容である。

「その契約期間はどのようになつとつたかの?」

「すでに先日施術しました。ちょっと特殊なので自分が近くにいないと効果が切れます。成長速度は年一歳ほどになると予測しており、つまり普通の人間と同じです。最低でもあと六歳は欲しいそうですよ?」

これを聞いた近右衛門は内心笑いが止まらない思いだつた。實際にほつほつほつほつほつそうかそうじやつたか、と笑い始めていた。少なくとも六年はエヴァンジエリンが大人しくしていることになる。そしてその間は宮崎なごむもその側にいるのだろう。さらに彼がここを動かないなら、彼女もまた動かない。つまり例の件で解呪が成功してしまつてもここに居ることになる。

富崎なごむとしてなにも考え無しでこのような策を巡らせたわけではないだろう。つまり政治力もそれなり以上にあるといふことだ。だが同時に彼の個人的な守護対象がはつきりしており、少年らしい善意に対する甘えもある。押しにも強くないようだ。

有能だが経験が浅く、弱点も割れており御しやすい。

そんな彼の政治力を近右衛門は自分が育てるのもいいと考え始めていた。もし機会があれば、『彼』ではなく彼の方を孫に宛がうのも悪くない。どの道あのクラスには関わらせるつもりでいたのだ。そして彼自身を例の彼女達の疑念を高める材料の一につにでも出来れば……と、近右衛門は案と策を巡らせ始める。

彼がもつと麻帆良に関わりを持ち、その上『彼』がこの麻帆良で成長すれば、最高の戦力が揃うことになるだろう。

イレギュラーはあった。だが全ては想像以上に最良の方向へ動いている。

茫然自失から復帰した魔法使い達から質問攻めにされている富崎なごむを視界に收めながら、近衛近右衛門は笑い続けたのだった。

「富崎さん、お話したいことがあるのですが、少々よろしいでしょうか?」
「私もあるんだがいいかい?」

「あ、……桜咲刹那さんと龍宮真名さん、でよかつたでしたよね？」

「はい」

「ああ」

近右衛門からの要請で学園長室に独自転移魔法でも転移不可能になる結界を張り、今日は歩いて帰ろう、と小声で歌いながら女子校舎を出たなごむを呼び止めたのは刹那と真名だつた。

歌を聞かれていたのではないかとわずかに顔を赤くし、緊張した面持ちになつたなごむに刹那は気付いているのかいないのか、彼女を知る者からは普段通りと言われるような引き締まつた表情でこくりと頷いた。その斜め後ろからついて来ていた真名の口端はいつもより確実に上を向いていたが。

「ええっと、お一人には自分からも話があつたので、晩ご飯奢りますのでちょっと移動しましょうか」

一人が頷いたのを確認してからなごむは探査魔法を麻帆良に走らせ、目的の場所とその付近で人目が全くない場所を見つけると、周囲の人目も探査で無いことを確かめ、転移の淡い光が三人を包み込んだ。

現在の時刻は二十一時前。明日から学生達は一斉に冬休みで今日はクリスマスイヴのイヴという日のため、麻帆良の街はどこもかしこも派手なイルミネーションで着飾つている。

午前中で終業式は終わつており、本日招集を受けた第二エリアを警備の管轄とする魔法先生や生徒はいつもよりも大分早く学園長室に集まることが出来たのだが、なごむの独自魔法の情報開示に思つたよりも時間がかかつてしまつたせいで、あそこに集まつていた人々はこの時間まで未だ夕食にありついていなかつた。

それはもちろんこの三人も同じだ。

三人は人気のない路地の奥まつた所に転移で現れると、なごむを先頭に少し歩き、イルミネーションからは少々外れた地区にある一軒のぼろ屋台に近づく。外部に幾らかの折り畳みテーブル席が設けられたラーメンの屋台だった。

三人が席に着くとねじり鉢巻きを頭に巻いた大柄で筋骨隆々な男性がお冷やを置いて注文を取り、屋台で湯切りをしていた細身で綺麗な女性に注文を叫んだ。女性は麺を器に移しながらちらりと三人を見て頷くだけだ。

屋台の少し後ろで設置型の大型ガスコンロで火にかけられている大鍋から、鶏ガラ出汁の香りが辺りに漂っていた。

「クリスマスマードの中、異性に屋台ラーメンに誘われるとは思つていなかつたよ」

「いたずらっぽい真名の発言にな！」むは照れたように頭をかいた。

「ちゃんとしたお店の外食先をあまり知らないのと、知つてる場所も今日辺りからほとんど埋まつているはずなのとで、こういつた屋台系しか思いつかなかつたんですよ。かわりに味は保証させていただきます」

言つと、なごむがテープルを握り拳で軽く叩く。その場面を真名は注意深く観察していた。彼女の魔眼では、不可解な構造としかいえない球体のようなものの集まりが周囲に展開したのがわかつただけだ。学園長室で見たものと変わりはない。

「先ほどの説明会でも見せましたが、魔法認識阻害用の認識阻害結

界です。内容は一般的なものと同じですが、自分の魔力量でも使えるように魔力消費量が従来の百分の一程度になっています

「改めて見ても、転移も結界もすごいですね」

刹那が素直に感嘆の声を漏らした。ただ彼女の場合魔法関連は不得手としており、その数字に驚いただけであつたが、先ほど学園長室に集まっていた魔法使い達はこの反則的な効率化に目を剥いて開いた口が塞がらない顔をした後、歎声を上げものだった。

ただ問題はその次にあった。

「だけど結局、誰一人として使えなかつたんじゃないのかい？」

「うあーそうなんですよねー。それであそこに自分用の転移防止結界を自分が張るハメになりましたし」

誰もなごむの多胞体術式を理解出来なかつたのだ。

教えを請うた者の中には無茶苦茶な術式を教えることで本当の魔法を教えることを誤魔化し、『闇の福音』に味方しているのではと言いくつやうな輩もいたが、なごむが実際に起動させた多胞体術式との差違確認を真名がしていた上、近右衛門や朱石教授、瀬流彦など一部の者が初期起動までは成功させていたので、これは純粹に相性や実力不足ということで収まった。

そのためさしあたつて多胞体式魔法を仕込んだ魔法具を作り与えることとなつたのだが、作るために時間が必要なうえ特殊な素材が必要になり制作にもそれ相応に時間がかかる、その素材を集めるのにも時間がかかる、となり、自立人形を作るためにも使われる類の素材だつたため、エヴァンジェリンであれば在庫を有しており比較的すぐ用意できたのだが、彼女に頼るわけにもいかないと魔法使い達

は言いだし、とりあえずは材料集めと決まったのだった。まずは冬休み中に五個ほどの封印捕縛用魔法具を作るのが目標だ。転移は座標指定の関係で魔法具化不可能な術式内容といつことでお流れになり、あとは警備のシフトを決めて解散となつた。

なんにせよ、なごむは魔法具が出来上がり彼らが自由に使えるようになつたとしても作成者ならば簡単に術の解除や魔法具の自壊を引き起こせるようにするつもりであり、さらに隠匿用の多胞体術式でその自壊術に暗号化などを施すつもりであった。

もちろんエヴァンジエリンにも彼らにこの魔法具を「覚える」ことは伝えてあり、自壊術についても伝えてある。

そしてその自壊術は彼らに教えた中にも、見せた中にもすでに含まれている。つまり教えられたものをそのまま憶えて使つたところで、なごむには絶対に効かない魔法となつていたわけである。

なごむに嫌疑をかけてきた魔法使いが言つたとおり、彼は最初から彼らに本当の魔法を教えていなかつたのだ。

そして一連の流れには龍宮真名も一枚噛んでいる。

彼女は学園長室でなごむが起動させたものと皆に教えたものが同じものであることを教えた。それは嘘ではなかつたが、元の魔法に最初から仕掛けがある可能性も真名は理解していた。だがえてその発言したのだ。

なごむにそのように依頼されていたからだ。

その切欠からなごむは初期起動を成功させた者達の意見をまとめ、妥協案として魔法具案を提出。嫌疑が解消したように見せかけた（・・・・）のだった。

余談だが、魔力魔法球は内包魔力を本人のものにするために作成から使用者が携わる必要があり、素材も超がつくほど高額になる。そのうえ維持のために使用者本人が空間安定用多胞体術式を展開する必要があつたため、これが欲しければお金と、少なくとも空間安定用の多胞体術式を理解しないことにはどうしようもないことを近右衛門に伝えると、彼はエヴァンジエルンが魔力魔法球を所持していることを秘匿するように接触念話で伝えてきた。これも暴動に繋がる可能性があつたからだ。なごむもエヴァンジエルンが所持していることが知られると芳しくないことは理解しており、それは快諾された。そして近右衛門が空間安定を理解出来たら魔力魔法球を作成する約束をしたのだった。エヴァンジエルンのものとは違い、自壊術入りの魔力魔法球となるが。

魔法具の件を見ると明らかにエヴァンジエルンに肩入れしているなごむだが、彼としてはエヴァンジエルンの性格を考えると教えておいた方が何かあつたときに面倒を起こさないとわかりきつているからの行動でしかなく、多少一緒に居る時間があるため友情や親近感を覚えてはいるが、これといって特別な他意はなかつた。

第一あの封印捕縛魔法は超至近距離でなければ完全発動できない。それになごむのようにカウンターで使えるようになるには、確率と敵の意識を読みとり自動発動をさせる別の多胞体術式を自己制御する必要がある。あの魔法具はあくまで魔力を込めて発動させるだけでしかないのだ。魔力魔法球を持つ現在のエヴァンジエルンにはほとんど意味が無い代物といえた。魔力魔法球の件を知らない麻帆良魔法使い達は大絶賛していたが。

「こうやってみると、改めてエヴァがすごいってわかりますね。あの人には比較的すぐに多胞体術式を理解してましたから」「魔法に関してはさすが、ということかな？」

「ですね」

「作った君の方がすごいのだけどね」

「ありがとうございます」

「真名はな」「むを『品定めする』ように見つめると、彼女の本題を切り出した。

「それで、今回の件の報酬は後払いということだつたけど、どうなるんだい？」

真名が何かしらの依頼を受けていたことを知らなかつた刹那が、驚いた様子で一人に視線をやる。

「これを」

そういうとなごむは先ほどから握りっぱなしでいた拳を開き、そこに納まっていた小指の爪ほどの水晶を真名に渡した。

「これは？」　ふむ。多胞体術式は魔法処理済みの大型ダイヤにしか刻めないのでなかつたかな？」

真名の魔眼が、水晶に閉じ込められた多胞体術式の魔力を捉えていた。その構成は現在周囲に展開している認識阻害結界と同じものだ。

なごむがくすりと笑う。

「んーと、一言もそんなこと言つてませんよ？　見ての通り、安価な無処理水晶にも刻めます。ただ込める魔力がその分シビアになりますけどね。あの場にいた誰にでも扱えるほどの強度を得るには、

大型の魔法処理済みダイアモンドが必要だった、というだけです。龍宮さんに渡したそれは少しでも魔力を込めすぎると簡単に割れてしまいますが、その目で何度か発動を見ていた貴方なら扱えるんじゃないですか？」

「これは半ば嘘だ。事象変異能力を用いればどんなものにでも多胞体術式は刻むことが出来るし、壊れることはなくなる。

「君は思つた以上に狸だね。だが払いのいい雇い主だ。巣廻にしてもらいたいから、次は少しサービスしよう。」「うー、それはありがたい。今後のために伝手作るだけのつもりでしたら、喜んでいただけたようではなによりです」

真名は自分で認識阻害結界を張れるし、既存の認識阻害結界一つでどうこうなるような魔力量でもない。だがこの水晶の他の使い道に気付かないほど愚かではなかつた。

確かにこの水晶の価値が理解出来る者は少ないだろう。真名は魔眼があるからこそ内部にあるのが多胞体術式だと気付いたが、ぱっと見はただの水晶片でしかないし、微量の魔力で刻まれた多胞体術式に気付いたとしてもただの魔力痕にも思えてしまいそうな構造だ。発動を見ていた限り必要な魔力量は極端なまでに少なすぎるぐらいであり、なごむが言うとおりオーバーコロックで簡単に壊れるようであれば、構造を知るうと少し魔力を流しただけでおじやんになりかねない。

だが、機械的に魔力量を調節できる存在であればどうだろうか？少しでも必要魔力量を少なくする研究をしている者であれば？単純に知的好奇心が強い者や、コレクター精神が強い者だったならば？ 多胞体術式の存在を知りながらにして、現物を得る機会が無くてやきもきしている者がいたら？

真名にはその存在に心当たりがあった。彼女であればすでに多胞

体術式のことを知つていて、サンプルのためにこれを高額で買い取るだらうと予想できた。例え知らなくとも、真名が説明すれば一も二もなく買い取り交渉が始まるはずだ。

しかし問題もあつた。彼女と真名の関係に彼が気付いている可能性の問題だ。完全に知つてゐることはありえない。だが何かしらに気付き、かま掛けも兼ねてこのようなことをしている可能性は十分にあつた。学園長室での真名の発言など無くとも、なごむは問題なく誤魔化すことが出来たはずだからだ。真名がやつたことなど小さな切欠を作つただけで、仕事としてわざわざ依頼するほどのことでもない。第一、真意が隠れていることを真名に伝えるような真似をする必要性がどこにもない。だが彼は真名に依頼し、この水晶を渡してきた。

(……伝手を作るため……さて、彼はどこまで知つてゐる？ 魔法具で学園側を謀つたあたり、少なくともあちら側といつわけではなさそうだが……)

ちらりと向いた真名の視線に、刹那は一人の話が終わつたものと判断して頷く。一人の会話内容のせいだらう。その表情はここに来たばかりの時よりも警戒が強くなつていた。

「龍宮との話は終わりでいいでしようか」

「あ、もうちょっとあつたけど多分関係があることなので桜咲さんどうぞ つと、少し待つて下さいね」

そこに注文していたラーメンが届いた。

のびる前に食べちゃいましょう、といふことで、いただきますと箸をつける二人。味を保証するというだけのことはあるなと真名が関心し、ずるずると麺を啜る合間になごむが話を再開させる。

「えっと、桜咲さんの話って、多分近衛木乃香さんのことですよね？」

「……お嬢様のことビームで？」

さらに強い警戒の空気を纏つた刹那を気にすることもなく、なごむは制服のポケットから折りたたまれた紙を出して広げて見せた。それは彼女達2 Aクラスの名簿の写しであった。各人の顔写真と名前、そして魔法に関わりがあるかどうか、あつた場合はどういつた関わりかがそこには書かれていた。

桜咲刹那の欄には魔法 神鳴流剣士 近衛木乃香護衛 の文字が、

龍宮真名の欄には魔法 狙撃手 傭兵 とあり、

近衛木乃香の欄には魔法 学園長の孫 関西呪術協会長の娘
魔法関係者だが現在は魔法を知らない とあった。

「近衛近右衛門から貰いました。あとクラス内の状況はエヴァや茶々丸さんからいくらか聞いてます。貴方方に言うのもなんですが、随分と騒がしいクラスのようですね」

なるほどと納得して警戒を解く刹那であつたが、真名はなごむが学園長先生ではなく近衛近右衛門と言つたことに気付きわずかに目を細める。それにこれをなごむは貰つたと言つた。刹那は気付いていなかつたが、本當なら彼女たちの情報をただで「えなければいけない事態になつているということだ。

「桜咲さんの話は寮周辺の結界展開時に彼女を気にするよう頼むつ

もりだつたとか、そのあたりですね？ 彼女は世界屈指の潜在魔力量と西日本の長候補ということで、外部から狙つてやつてくる者が多いとエヴァからは聞いています

「はい。お嬢様のこと、お願ひでできますでしょうか？」

刹那は学園長室でなごむが話した守りたい大切な人がいるという話や、公開した結界魔法や障壁魔法に彼女なりに感銘を受け、協力を願いに来たのだった。

「桜咲さんは自分が誰を守ろうとしているかご存知ですか？」

「日時詩緒さんや富崎のどかさんでは？」

「何から守りのうとしているかは？」

この時点での、真名はなごむの仮想敵がなんであるかわかつてしまつた。

「え、何からといいますと、その、富崎さんのような目に遭わせたくないということだと、資料を読んだ限りでは思いましたが」

「自分をあのような目に遭わせたのはどこの誰ですか？」

さすがに刹那も彼が言いたいことに気付いて眉を顰めた。

「……麻帆良の魔法使いですか？」

「いいえ、全ての魔法使いです。一般人であつた自分達の日常を非日常で塗り潰し、自分や自分の大切な人を襲つたのは他でもない、魔法という秘匿された力です」

「……全ての魔法使いを敵に回すつもりですか？」

それはつまり、世界を敵に回すようなものだ。そしてその中には

刹那が守るべき近衛木乃香の家族も含まれてしまつ。

微量の殺氣を含んだ刹那の睨みに、ふと「むは」吹き出した。

「くくっ、ふは、すみません。自分はアレです、復讐者だなんて柄じゃないので、ただ守りたいだけですよ。そんなに睨まないで下さい。 桜咲さんは近衛木乃香さんを、何から守りうとしていますか？」

不真面目な「む」の態度に氣を害した刹那は睨んだまま答へる。

「お嬢様を傷付ける、ありとあらゆるものから」

「なら、今の貴方では守りきれませんね」

瞬間、刹那の怒気が、殺気が、暴風のようにな「む」に叩きつけられる。彼女の手はすでに竹刀袋の中にあり、いつでも斬りかかる間合いであつた。

だがなごむはラーメンを啜りながら上目遣いで刹那を見て、呆れた表情になるだけだ。

「ほり、そりやつてちよつと不信な者を障害だと簡単に思い込む。おシオの登校初日もそりやつてあの子を怪しんで、不審な点があつたら襲うつもりだったのでしょ?」「つ! なぜあの日のことを……?」

「おシオからあの日のことを聞いて、ちよつと考へたらわかります。貴方の性格とかエヴァにも聞きましたし、近右衛門にも確認をとりました。認識阻害や人払いに抵抗力がある自分はあの日、エヴァに

襲われました。そしておシオも認識阻害に若干ですが抵抗を見せています。なにかが少しでも間違つていたら、貴方はあの子を傷付けていたんじゃないですか？」

「……それが、お嬢様を守れない」とどپに関係ある」

「今のようなことを言われて主題がブレないのは結構。ですがそのように考え無しに敵意を振り撒き斬りかかるだけでは、いつかその刃は毀れます。それまで向けてきた敵意に折られます。

貴方がおシオを斬つていたら、自分は近衛木乃香を殺していました」

刹那は刀を抜けなかつた。どんなに力を入れようとも、ぴくりとも体を動かせなかつたからだ。

唯一自由であつた首を回して見れば、制服の袖から出る自身の手が真っ黒に染まっているのが確認出来た。それは脚も同じだ。気を巡らせようとするが上手くいかない。学園長室でエヴァンジエリンを拘束した黒い紐のようなものが、いつの間にか全身を拘束していった。

「今桜咲さんが自分に向いているのは猜疑心です。勝手に疑つて、勝手に自己完結して、勝手に喧嘩をふつかけてくる、守りたいものがある人にとっては最も邪魔な代物です。考えてもみて下さい。今のはもしもの話でしかなく、すでに結果は変わっています。なのに何もしていいない自分を斬り殺したら、『闇の福音』はどんな感情を抱きますか？ 誰に対してもその感情の矛先を向けますか？

あ、ちなみに今のエヴァ、ちょっと強力な魔法具をあげたので全盛期に近い戦いが出来ると思いますよ」

エヴァンジエリンとなごむが彼女の成長に関しての契約をしたこ

とは刹那も知つてゐる。そして彼がいないと成長できないことも知つてゐる。だが、

「……『闇の福音』は、女子供を殺さない」

麻帆良の魔法関係者達は耳にたこが出来るほど近右衛門にそれを聞かされる。だから無論、刹那もそれは知つていた。この一年半以上の中園生活で、彼女はこちらから手を出さなければ問題を起こさないことも知つてゐる。

なごむが頭を振つた。

「殺さないだけです。傷は付けるし、洗脳だつて出来ますよ？ それだけではありません。麻帆良は彼女に黙つて追加の魔力抑制を施して、それも呪いの一種だとつて何食わぬ顔をします。それに実は彼女にかかる登校地獄の呪い、成長できなかつたから歪んでいる部分が大きいんです。何せ子供用の呪いですからね。解析したところ、歪んだ解呪キーの中に身体的な変化が含まれていたんですね。あまりに自然のことには誰も気付いていなかつたんですね。気付いてもどうしようもありませんし。そしてそれらをエヴァはもう知つています。あと一年も過ごして身体が成長すれば、自分が作った他の魔法式と合わせて解呪出来るようになる予定なんです。そんな歪みを正せる可能性が手に入つたのに、ただ猜疑心をこじらせたどこぞの愚か者のせいで途絶えたとなつたら、どうすると思ひますか？」

ぽんぽんと出て来る新事実に真名はある種呆れた視線をなごむに向か、刹那は最悪の想像をして蒼白になつていった。

近衛木乃香はエヴァンジエリンが好むという血の条件を満たして

いる。全盛期の彼女であれば一人で麻帆良を滅ぼせるだろ？。少なくとも麻帆良を支配してしまえば、魔力抑制は解除できる。そしてまだ彼女用の捕縛魔法具は一つもない。刹那は麻帆良の魔法使いと相対したエヴァンジェリンの下で、洗脳され魔力タンクのように扱われる木乃香の姿を想像してしまった。

これはあくまで最悪の想像でしかなく、実際はエヴァンジェリンのことだ、ハツ当たりのようなこんな真似はまずしないだろう。だが刹那は確実に無事では済まないし、麻帆良に与える損害も無視できるものではなくなる。なにせせっかく手に入れたかに思えたエヴァンジェリンへの抑止力を失うのだ。確実にこの地もエヴァンジェリンも荒れることになる。その機に乗じて木乃香を狙う者が現れなりとも言いきれない。

言葉もない様子の刹那に、なごむは拘束を解いて問い合わせる。

「今の貴方は、近衛木乃香さんをあらゆるものから守ることが出来ていましたか？」

愛刀の柄から手が離れ、だらりと下がった頭を刹那は力なく横に振つた。

「第一、もし自分が近衛木乃香さんに手を出したら麻帆良と関西とを敵に回すことになります。守りたい人がいるのに、無駄にそのようなことをする人がありますか？」

いたのだ。刹那は先ほどそれと同じことをやろうとしていた。多少の挑発はあつたものの、それを拡大解釈して彼女は最悪の一手をとろうとしていた。どこまでも叩きつけられる自身の不甲斐なさに、愚かしさに、刹那は唇を噛みしめた。

「えっとですね、人に頼む前に、自分がやろうとしたことを見つめ直して欲しかったんです。おシオに危険が迫っていたことを後になって知りましたからね。裏の有力者の中にも表に大切な人を持つている方がいます。近衛木乃香さんだってそうです。先ほどの朱石教授の娘さんも一般人ですね？ 彼女達以外にも意外なところで裏と繋がっていて、下手を打てば問題がある人は存外にいるものです。別に裏に限らず、表だけでも悔れませんよ？」

言いたいことはこれぐらいかな。今後このようなことがないようしていただけたのでしたら、危険から遠ざける程度しか出来ませんが、自分も近衛木乃香さんのことを気に掛けましょう」

最後の一文に、刹那が顔を上げる。

「ほ、本当ですか？」

「ええ、本当です。ですからラーメンのびちゃう前に食べちゃいましょう。自分と龍宮さんは食べ終わってますよ」

「はっ、はいっ！ ありがとうございます！」

言われた通り箸を進め始めた刹那に、微笑ましいものを感じたなごむは少しだけ考える素振りを見せて、再度口を開く。

「えっと、桜咲さんはそのまま食べていいので、聞いて下さい

真名も刹那も視線で了解の意を表した。

「傭兵である龍宮真名さんと、関西呪術協会所属神鳴流剣士、桜咲刹那さんのお二人に相談及び依頼と協力を求めたいことがあります。自分や桜咲さんの大切な人を含む女子中等部2年A組一般生徒全員

の、常識的な安全に関わる問題です

刹那の箸が止まる。

「三学期中に麻帆良に一人の西洋魔法使いが着任する予定になっています。名前はネギ・スプリングフィールド。彼と近衛近右衛門達が生むであろう災禍から、彼女達を守りたいのです」

第7話・刹那

新学期も始まつてしばらく経つた麻帆良学園の一月某日、近衛近右衛門は焦りを募らせていた。

希代の魔法発明家、宮崎なごむ最大の守護対象、目時詩緒を自陣へ組み込むという計画の進捗状況が、思つた以上に芳しくなかつたからだ。

宮崎なごむとの契約上、目時詩緒へのこちらからの魔法的な接触は不可能であつたが、彼女の方から来る分には止めようがない。それを逆手に取れば簡単な話であると、当初近衛近右衛門は考えていた。

かつての宮崎なごむの大切な人であり彼と同じ認識阻害抵抗を持つ長谷川千雨と、彼の現在の大切な人であり同じく認識阻害抵抗を持つ目時詩緒の二人を会わせることで、二人の間で麻帆良への疑問を膨らませ、魔法へ、麻帆良の裏へと自ら関わりを持つように誘導する。計画を要約するとたつたそれだけだ。

目時詩緒が宮崎なごむを大切に思つていれば、裏の存在とその彼との関係を知るだけで勝ち気な彼女はこちらへ乗り込んでくるはずだ。

それになんとかんだと言いながらも非常に面倒見が良く寂しがり屋な長谷川千雨は、目時詩緒と共に真実を知れば彼女と共にいようと、支えていこうとするだらう。ほぼ同じ能力を持つ宮崎なごむが目時詩緒を裏から遠ざけようと奮戦していたことを知れば彼に理解を示すだらうし、もしかしたらかつてと同じ様に互いにまた惹かれ合い、目時詩緒とはまた別に彼を支えようと、彼もまた彼女を支えようとするかもしれない。

裏を知つた彼女達の記憶を彼が消したがらないであらうことはわ

かりきつている。となると辿る道は一つしかない。彼女達も魔法使いになることだ。そして彼女達が裏で生きられるだけの実力を得るまでの間に、麻帆良で恩を売り続けければいい。ついでとばかりに一人を富崎なごむの従者にしてしまえば、彼は一人を魔法に関わらせてしまつた負い目を感じるはずだ。

そうなつてしまえば、『彼』が一般人を従者にしてしまつても、自分で前例を作つたなごむは彼を責めることが出来なくなる。

詩緒と千雨の二人は最初の内こそ麻帆良に悪感情を抱くかもしれないが、長谷川千雨の家族は麻帆良おり、孤児であつた日時詩緒はすでにクラス内に複数の友人を持っている。富崎なごむもそれは同じだ。その彼らの自由と安全を、なごむ達は確実に守ろうとする。守つている内に少しずつ意識誘導していくば、『彼』や従者候補達も彼の守護対象に含めることが出来るようになる。

近衛近右衛門は全てが上手くいくと信じて笑つたものだった。

このために彼が最初打つた手は単純なものだ。日時詩緒と長谷川千雨の二人が一緒に居る空間を強制的に作り上げるため、寮の部屋を相部屋にしただけだ。

長谷川千雨が潜在的に持つていた孤独感や寂しさを、似た力を持ち理解することが出来るだろう田時詩緒で埋めてやることが出来れば、勝手に一人は仲良くなる。事実それは予想以上に早く実現したらしく、同室になると同時に一人はクラス内でよく一緒に行動するようになった。あの騒がしいクラスに馴染むことがなかつた長谷川千雨の心に、口は悪いが意志力の強い日時詩緒は入り込むことが出来たのだ。

そして順当に一人は一人だけで行動することが多くなつた。それはつまり周囲を、麻帆良を疑いだしたということ。上手くいきすぎて近右衛門も驚くほどであった。

だが問題が起つた。一人が冬休みに入ると同時に部屋に引きこもつたのだ。

これでは如何に麻帆良への疑問が膨らもうと、魔法に関わる機会を設置できない。

元々部などに所属せず友人も作らうとしていなかつた千雨は、授業が終わるとほとんど出歩かずに直帰する傾向にあつた。だが詩緒までまったく同じ様な行動を取るようになり、クリスマスも正月もずっと彼女達は部屋ですごしたのである。千雨は実家には電話だけで済ませ、顔も出そうとはしなかつた。

それだけであればまだ想定内だつたが、その間の生活はなごむが彼女達に食事や物資を寮監を通して渡すことで保たれてしまい、本当の意味で完全に出入りする機会がなくなつたのは想定外であつた。次第になごむはわざわざ寮監を通さなくてもいいと言われるようになり、女子寮に入つてすぐにあるロビーに出入りできるまで信用を得るようになつていつたのだが、お陰で冬休み中寮に残つていた2 A生徒達と彼が顔見知りとなつたのは近右衛門にとつて嬉しい誤算であつた。だが、彼は彼女達に興味を示さず用事を済ますとさつさと帰る素つ気ない態度。そしてやはり千雨達は外に出ない。必要なものはなごむからの物資補給とネット注文で事足りていた。

一体引きこもつて何をしているのかと覗いてみようとしたが、なごむが詩緒に何かしらの防犯魔法具を与えていたのか、遠見などの魔法が通じない。

なんとかあの手この手で調べてみたところ、どうやら一人はオンラインゲームにはまつているようだと、裏麻帆良の電子部門が答えを出した。

さらになごむも男子寮にはほとんど戻らずにエヴァンジェリン宅にてネットインフラを整え、エヴァと共に同じゲームにはまつてい

る始末。そんな彼らの生活物資を茶々丸が買い揃え、なごむは彼女と共に調理した食事や物資を寮に届ける毎日。帰つたらみんなでオンライン上でパーティーを組み、遊んでいた。

どういうわけか、気付けばヒッキーが量産されていたのである。

さらに問題は夜間警備にまで及んだ。

以前行われた話し合いにより、囮ならともかく直接戦闘は得意ではない宮崎なごむの担当は、本人が希望したとおりの見回りシフトに組み込まれない結界によるエリア守備と決まっていた。仕事内容は女子校舎から登下校路、女子寮がある地区周辺までの独自結界展開と直接戦闘者のサポートとなっていたのだが、このエリア守備がくせ者だったのだ。

もしこの独自結界範囲内に未登録の魔法使いや化生が入ろうものなら、手始めに気と魔力を抑制させる術が個体別に発動し、次にエヴァがやられた捕縛術の劣化版によって自動拘束され、最後になごむの任意で麻帆良外周の森林部へ強制転移。さらにそこに彼の転移魔法で跳んできたその日の見回り担当の魔法使いか、もしくは遊軍扱いとなっているエヴァやその従者たる茶々丸、さらにはなごむともドール契約を交わしたエヴァのもう一人の従者人形、チャチャゼロによつて殲滅される運命となつていた。

この転移による自陣引き込みは通常では考えられない戦法である。従来の転移魔法はレジストされやすく、不可能とされていたからだ。だが彼は抑制と捕縛の併用でレジストも位置ズレによるキャンセルもされることなく、完璧な強制転移でもって安全に敵を排除していく。中には麻帆良学園結界で魔力抑制された拳げ句のさらなる抑制で、転移前に義体を維持できなくなつて消滅する化生もいるほどだ。

この結界はなごむが魔力供給しているかぎり一日中作動している

うえに、不審な行動を行つた登録済み魔法使いにも適用され、千雨達の部屋を覗こうとした近右衛門は防犯魔法具で覗けなかつたばかりか抑制と捕縛が発動、なごむに孫の木乃香の様子を見ようとしただけだと言い訳をして怪訝な視線を向けられ、なんとか拘束を解いてもううという事態が発生していた。

夜間警備においてこの自動捕縛は事前準備がされた独自結界範囲内でしか使えなかつたが、それでも戦力の投入が必要箇所に逐次可能ななごむの転移魔法は非常に強力であり、年越しの隙を突いて行われた妖怪や侵入者の大侵攻戦における彼の貢献は他では真似できないものとなつていた。

だが守備が固すぎて彼が居る第一エリアでの魔法事故が一つも起きなくなつたため、詩緒や千雨を裏に引き込むための最後のピースである魔法を見せる切欠が失われた近右衛門は大いに焦つた。

冬休みが明け、せめて一人が通学路から外れることができなくなつたため、詩緒や千雨を裏に引き込むための最後のピースである魔法を見せる切欠が失われた近右衛門は大いに焦つた。

だが守備が固すぎて彼が居る第一エリアでの魔法事故があれば良かつたのだが、それすらもない。彼の独自結界から外れた地域に住む父親や義母、寮に住んでいるが外れる事もある義姉の方を結界外で関わらせようかとも考えたが、それでは意味が無い可能性が高い。なぜなら宮崎なごむはこれまで記憶操作そのものは是非を問うたことはなかつた。そして彼は甘さの他に現実的な面も持ち合わせており、記憶処理も必要な事と理解している節がある。さらに彼らは千雨達と違い普通人のため、消去よりも負担が少ない改竄が通用する。詩緒達のように長期的な疑惑を持つているわけでもないため、改竄する時間量も魔法に触れた数時間で充分だ。つまり彼らでは彼女達一人と違い、何かあつても改竄して終わりとなる可能性が高いといふことだ。それでは意味が無い。

そのため強引にでも事を進めようと警備ルート上に穴を作り、表

向き木乃香を狙うように外部から手引きして雇つた魔法使いに彼女達を襲わせようとも計画したが、桜咲刹那と龍宮真名があつさりと侵入者を見つけ、近右衛門に確認を取る前に不審者として拘束して、なんてこともあつた。なごむの一件のお陰で近頃は一部魔法使い達が大人しくしており、何かあれば事前連絡が来ていたため、その時ほど近右衛門は刹那の愚直までの守るという行動力を疎ましく思つたことはなかつた。実はそのとき一人がなごむの命で動いていたなどと、彼はちらりとも考えなかつた。

さらには夜間に一度、タカミチにやらせで化生の群を警戒網から突破させたこともあつたが、独自結界に入った途端に全ての化生が強制転移させられ、移動先にいたチャチャゼロによつて一体残らず微塵にされたこともある。その様は転移に巻き込まれて一緒にきていたタカミチが恐怖したほどであつたという。それというのもチャチャゼロ、なごむがその人形の体に何かしらの改造を施したのか、原理不明ながらもタカミチが切り札に使う究極技法、『咸卦法』らしき超絶身体強化を使えるようになつており、元から強いのにさらに強くなつていたのである。子供人形にしか見えないものがケタケタと笑いながら大鉈の一振りで巨躯の鎧鬼を一刀両断。次の一振りがあつたかと思えばすでにサイコロサイズにバラけている画に、いくらそのとき自分を強化していなかつたとはいえ目で追えなかつたタカミチは自信を失つた。

チャチャゼロだけではない。茶々丸もまた強化されている。

機械である彼女が如何にしたのか、それとも機械だからこそのか、彼女は誰よりも早く多胞体式魔法を会得したらしく、なごむほどの強度も自由度もないようであつたが、障壁魔法による防御、転移魔法による武器召喚で、固定砲台よろしく足を止めて撃ちまくる姿が確認されていた。おそらくこれは空間安定用多胞体術式を応用したのだろう、曲がるビームを撃つていたといつ報告まである。真祖の吸血鬼の一撃を易々と受け止めるなごむ謹製障壁魔法は、劣化

していても低位の鬼や魔法使い如きでは破ることはおろか傷一つ付けることは出来ない。障壁展開中は動けなくなるようであったが、彼女はただ武器を喚び出してトリガーを引き、的に当てるだけである。

さらにもう一体、未確認ながらもチャチャゼロや茶々丸の援護を魔法で行づ、白髪の着物人形がいたといつ報告もある。

冬休みが終えた頃には、普通の侵入者では麻帆良第一警備エリアに一歩以上入ることが出来なくなっていたのである。

田に見えて強くなつた彼女達に警鐘を鳴らす者もいた。だが彼女達が宮崎なごむの言うことをよく聞いていたことや、彼が作成した魔法具群の麻帆良への譲渡がなされたこと、そしてなによりも近右衛門と朱石教授が空間安定多胞体術式を理解したことで、エヴァンジェリンとなごむが手ずから二人に魔力魔法球を作成し、制作者名とその効果も関係者に流布されたことで警鐘は鳴り止んだのである。

しかし、だからといって近右衛門の目的である詩緒達への魔法バレと引き込みは叶っていない。

だがあるとき、彼ははたと氣付いたのだ。

田時詩緒は麻帆良で高額奨学金援助を受けており、孤児である彼女としては現在の待遇は捨て難いであろう。いくらこの麻帆良に疑念を持つていようと、ここには好意を向けているらしき宮崎なごむもいる。納得出来る事情を説明でもしない限り、彼女は麻帆良を離れようとはしない。長谷川千雨と友情を結んでいればなおさらだ。これら事情により元から彼は麻帆良を離れづらかつた。

しかしこれはあくまで表の事情だ。裏側では彼を拘束する事情が

なかつた。

だがエヴァンジエリンの件。あれで彼にも麻帆良の裏に残る理由が、義務が出来てしまつてゐるではないか。『闇の福音』はここから出ることは叶わず、彼女との約束を彼の方から破つて出て行けば自身にも将来的な不安が発生することになる。だから彼は最低六年間は麻帆良の所属を変えはしないはずなのだ。例えネギをあのクラスの担任にしたことで契約違反を訴えてきても、今の彼は契約の破棄など出来るはずがない。現段階での関東魔法協会からの離脱は、エヴァンジエリンに与しすぎた彼も彼の周囲にとつてもリスクしか生まれないからだ。

近右衛門はなごむがエヴァンジエリンを御したという事実にだけ目が行き、彼が陥った状況というものは目がいつていなかつたことに気が付いたのだ。

出来れば一般人従者化や魔法バレのような魔法に対する弱みが欲しかつたが、致し方がない。この状況があるのだから多少の無茶を通してなんとかなるだろう。あとは上からの命令ということにして強引に『彼』をあのクラスの担任にしてしまい、予定通りなごむをあそこに送り込んで『彼』の監視役というお題目を与えてやればいい。負い目があるような弱みがないため扱いづらくなるが、タカラミチ曰く純粹で直向きな子供であるという『彼』を、多少毒はあるがなんだかんだで押しに弱く若干甘いところが見える彼はそう無下にはしないはずだ。後は事後承諾でいけばいい。来て早々に問題を起こすわけもないのだし、おそらくは最初に巻き込まれるであろう孫やあの少女は元が元なのだ。生まれ持つてしまつたものに対する宿命や悲劇という意味で彼なら理解を示し、逆に彼女達を守ろうとするかもしれない。後は時間をかけてなし崩しだ。

そう思つていた時期もありました。

ネギ・スプリングフィールドが麻帆良入りする予定となつていた一月某日早朝、学園長室であるこの部屋の主、近衛近右衛門の眼前には先ほど麻帆良入りを確認したネギ・スプリングフィールドの姿はなく、代わりに今頃職員室で時間を潰しているはずであった少年、宮崎なごむが卓上の大皿から菓子を手に取りぱくつく姿があつた。

さりにその隣には関西呪術協会特使桜咲刹那が、怒りとも困惑とも喜びともつかない珍妙な表情で座つている。彼女としては立つていたかったのだが、東西の現在状況や彼女の立場上、座つて堂々としていた方がいいのではとなごむに言われた為であつた。だが現状の何もかもに彼女の理解は追いついておりず、正直この場から逃げ出したいというのが本音であつた。

そして肝心要のネギはとこゝと、隣室で源しづなと共に待ち惚けをくらつてゐるはずである。近右衛門としては先に教室に行かせてしまったかったが、なごむがそれをさせなかつた。魔法犯罪者を許可無く教室に向かわせれば強制転移させることつてきたのだ。

ちなみになごむが食べてゐるこのお菓子、二皿田であつた。先ほど一度空にしたのだが、彼は話が長引きになると堂々おかわりを要求したのだ。

「近右衛門殿、さつきは聞き忘れていたのですが、このお菓子などいのです？ 隨分探したんですけど、デパートで売つてゐるの見つけられなくて」

「この歯に付く飴の感触がなんとも……などと品評をしながらくつ

ろぐなーる。

「……風月堂のアーモンドクッキーじゃ。ソリソリでは売つていないが、ネット販売もしておるぞ」

「おお、風月堂のアーモンドクッキーですね。ありがとうございます。だつてさ、後でお願いします。ええ、お金は自分が出しますから」

彼がアーモンドクッキーを持つ反対の手には、耳に当たった通話中の携帯電話があった。えらく気に入つたらしく、どうやらその通話相手に注文を頼んだようだ。

そして桜咲も携帯をハンズフリーモードにして先ほどから掲げている。そうしないと音が上手く拾えなかつたからだ。

近右衛門の視線の先で、刹那の携帯液晶画面が映し出す通話時間が、着々と経過していく。

「……では今回の件についてなんじゃが……」

「すみません、その前に喉が渴いたので、一回この転移防止を解除してもいいですか？ セツキみたいなのはめんどくさいので」

「だ、だめじやねりつ……？」

脇に立つタカミチに助けを求めるように近右衛門は視線を向けるも、彼も困惑の表情だ。

「そりですか……残念ですが我慢します」

しゅんどうな垂れるな「む。だがもちろんすぐに再起する。

「じゃあとりあえず自分、麻帆良一般人を主体とした対魔法組織用第三者機関、『麻帆良自由自治会』の設立をここに発表します」

「フォツ？！」と近右衛門の奇声が木靈した。

富崎なごむが近衛近右衛門からの直接電話でその連絡を受けたのは昨夜のことだ。

以前から麻帆良男子中等部校舎の老朽化は言われており、新校舎建造に関する立案も多く出されていた。だが問題としてその新校舎を建てるちょうどいい場所がなく、現在地を更地にして新たに立て直しを図るしかないのでと言っていたのだが、現在使われている校舎は女子校舎よりも歴史が古くその分〇Bのお歴々方の愛着も強い。故に取り壊しとなると非常に強い反発にあつてしまい、どうにも仕様がない状態となつていた。

だが新学期早々、外觀をそのままに内部の各種大規模補強工事及び入れ替え強化を施すということで急遽決定が下された。実質更地にしてから立て直すよりもお金も労力も技術も、そして時間も必要なその事態が報道部より広められると、今度は施工期間である一年間の内、一時完全立ち退きをいなければいけない一年間生徒達はどうするのかという話になつた。結果、新学期初めから中等部男子生徒諸君の間には移動先、編入先への不安と期待が入り交じつた予測が飛び交うようになつていつた。

その予測の中で最も有力であったのが麻帆良内にある各中等学校への分散編入であり、事実そうなることに決定したのだが、キャパシティの問題上最大の受け入れ先が麻帆良女子中等部となるのはほぼ確実であり、いきなり共学には出来ないため、編入と着工を一年後とし、男子の分散編入生を女子生徒諸君に馴れさせるために一部学級に先行編入生を入れることとなつた。

さすがにここまで言われればこの先に何を要求されるのか想像が付いていたが、なごむは唯そうですかと返答。近右衛門は話を続けた。

曰く、先行編入生は素行のいい成績優秀者数名に限定。曰く、女子生徒本人達やその親御さんへの配慮のためクラスは限定される。曰く、それには 2 A も含まれている。曰く、ちょうどいいから宮崎君あのクラスに入らない?

なるほど確かにちょうどいい。実際の空き教室数や分散数がどれほどになるのかという情報が足りないなごむには、そうとしか言えなかつた。だが突然すぎることに編入は明日からだという。なごむの調べでは明日は件の『彼』、ネギ・スプリングフィールドが麻帆良入りする日だ。作為を感じないわけがない。大方ネギの件に加え、突然男子が女子に混じるというありえない状況を作ることで千雨達にさらなる疑心を抱かせ、なごむとネギの両方に疑いが行くようになるつもりなのだろう。もしここでなごむが断つても他の男子を入れることになるだけだ。庇護対象の関係上表向き断る理由もない。彼が来ることは大分前から決まっていたのだから、なごむにとって編入自体は逆に好都合といえた。

だから二つ返事で編入を了解した。

了解が取れた近右衛門は電話口で笑い、明日の迎えに桜咲君を送

るからと宣うも、なごむは男子寮の部屋こそまだ残つてゐるが現在ほとんどエヴァンジェリン宅に居候してゐるような状態であり、エヴァンジェリン達と一緒に行くからいと断つて電話を切つた。わざわざ刹那をこちらに向かわせる辺り、狙いは近衛木乃香から注目を外すための厄介払いだろう。となると明日朝一で彼女とネギ・スプリングフィールドとを接触させる心算だと見当が付いた。

結局そのとき、近衛近右衛門は明日ネギ・スプリングフィールドが2-Aに教師としてやってくることをなごむには言わなかつた。なごむの性格上事前に伝えておいた方がいいのは近右衛門も理解していたが、今日まで黙つていたことに対する言い訳もすでに難しく、他クラスに入れると言わなければそれまでであつたからだ。だから彼の件は担任に決まってからの事後承諾として、その後に予定通り監視役のお題目を伝えることにした。編入が急であつたのも、そうと決まればネギ君が来るのは遅れてはならない、と思つたからねじ込んだとでも言えればいいのだ。事実他クラスへの編入生は選考する一週間後からとなつてゐる。諸々の事情から麻帆良を出て行くことが出来ないなごむの事だ。不承不承となるだろうが、それでもとりあえずの納得をするしかないはずだ。彼は争わずに済む方や正当性を訴える類の選択肢を好む傾向があるため、何を言われることになるかは想像がつく。文句は全て上層部が云々で受け流せばいい。近右衛門はそう考えていた。

そして近右衛門との通話を終えたなごむは近右衛門の考えた監視役などの後付理由も想定し、なるほど強引だけど中々の妙手、としばし感心した後、前提が違うから意味ないけど、と呟いた。そして今度は刹那に連絡をとり、明日朝予定していたネギ・スプリングフィールドの直接確認に同行出来ないかも知れないこと、そして予想通り近衛木乃香がネギと接触させられる可能性が高いことを伝えた。それから詩緒と千雨の一人にも念話を飛ばして編入の件で呆れた。それから詩緒と千雨の一人にも念話を飛ばして編入の件で呆れ

られ、明日の朝の予定を立てると、茶々丸に教えてもらつた授業時間割で準備を整えたのだった。

翌朝。

エヴァンジェリン達と一緒に行こうと考えていたなごむであつたが、エヴァンジェリンは昨夜一晩中ネットゲームをやつていたらしく中々起きてこなかつた。起きても食卓についてままぬぼーっとしている状態で、元々朝が弱い彼女はこうなるとまともに話しもできない。こういうときの彼女が遅刻寸前の時間まで覚醒しないのはわかりきつていたので、なごむは早々に見切りを付け、早めにエヴァ宅を出ると女子寮に向かつた。呪いと茶々丸のお陰でエヴァンジェリンが遅刻することはありえなかつたが、さすがに編入生であるなごむがぎりぎりに登校するわけにもいかないため、詩緒達と一緒に考えたのだ。

一人でも麻帆良女子中に行けたが、今の時間帯に男子が一人で行つたら確實に奇異の視線に晒されることになる。なごむ自身は気にならないが、もしかすると警備員などに捕まつて足止めを喰うことになるかもしれない。近右衛門のことだ。そういうた不備があつても不思議ではないし、わざとそうする可能性も高い。一般人がいる場所で捕まえておくことで何かあつた際の魔法行使の抑止や、ネギと会うタイミングの調整が出来るからだ。今の段階で転移で行つてしまふのもよかつたが、それは最終手段となる。幸い女子寮には冬休み中ちよくちよくと行つていたので、怪しまれこそするがホールで待つている分には問題は無いはずだ。本当はネギの確認に向かいたかったのだが、未だ独自結界内に彼らしき反応がないのでそれも出来ないというのもあつた。それなら詩緒達と共に登校し、護衛も兼ねてしまおうと考えたのだ。

女子寮に思つたより早く着いたなごむは寮監に声をかけて事情を

説明し、やはり驚きと呆れの後ロビーで待つことの了解を得ると、詩緒達にも連絡をとつて待つているむねを伝えた。どうやら彼女達も昨日は遅かつたらしく、まだ寝ぼけ眼らしい。遅くまでエヴァとゲームでパーティーを組んで遊んでいたからだ。ネット上でエヴァは正体を隠して彼女達と接していたが、当然一人には知られており、教室での孤高然とした態度とゲーム内での高笑い、大魔法、返り討ちの三拍子が揃ったドジッ娘とのギャップ差は度々話題に上つていた。互いになごむの忠告や契約により教室で話すことはないが、遅くまで千雨と詩緒の為のレアアイテム取りに付き合つてあげているあたり、エヴァの一人への心象は悪くないようだ。千雨も以前、エヴァの裁縫技術について知つたときに興味を示していた。

当然のように一人掛けソファに座るなごむを訝しむ視線はあれど、ロビーには寮監もあり朝の忙しい時間とこゝにあって、誰もなごむに何か言つてくることはなかつた。

そんな中、文庫本を開くなごむの視界にふと影がかかつた。

「おはようございます。高崎さん」

サイドポニーの黒髪と竹刀袋。桜咲刹那だ。

「あー、おはよう桜咲さん」

「つりとなごむがテーブルを叩き、認識阻害結界を発生させる。

「本当に編入するのですね」

「本当に編入するらしいですよ。都合一人で行くわけにも行かないですし、まだ彼は来ていないので、とりあえず自分はおシオ達と行くことにしました。今から?」

「はい。富崎さんの予想通りです。お嬢様は神楽坂さんとお一人で、先ほど駅に迎えに行きました。……学園長からの依頼を受けたので、忠告通り私はこれから学園長室に向かいます。お一人には龍宮を付けてあります」

「そつか。自分からも確認しますが、なにがあつたら連絡して下さい。駅なら範囲内だからアレも使えます」

「その時はよろしくお願ひします。……ならないことを願いたいです」

「でも桜咲さんも、自分が言つた仮説がかなり信憑性を帶びてきたこと、理解しているでしょう?」

「……はい」

英雄の従者育成計画。

突拍子のない与太話だと、最初刹那は思った。

麻帆良女子中等部2年A組が、かつて魔法世界で起きた大戦と救世の英雄、ナギ・スプリングフィールドの忘れ形見であるネギ・スプリングフィールドの為に用意された従者候補クラスかもしれない、などと。

確かにあのクラスには木乃香や刹那、真名も含めて特殊な人材が多い。他のクラスに比べて圧倒的にだ。だがそれは魔法の秘匿や護衛のことを考えれば、魔法先生であり関東随一の戦闘者である高畑が治めるあのクラスにまとめておいた方が効率的だからだと思つていた。それに単純な話、木を隠すなら森の中だ。少しでも目立たないようにするためにはああいった騒がしいクラスの方がいいだろう。

だが実際の所、頼みの高畑は出張ばかりで治めているとは言い難く、魔法生徒やそれに近い者が多いせいで魔法バレの危険性が高いとも言えるとなごむに説明されると、たつたそれだけで刹那はぐう

の音もでなくなつた。

しかしそこに真名が反論した。従者にするのならばすでに優秀な魔法使いか武芸者であつた方がいい。ならば関東魔法協会正式所属者及び、上位組織である魔法世界の組織、メガロメセンブリアから候補を選出した方が確実性は高いだろう、と。

その理由をなごむは説明した。

むしろ逆、そういう存在はいつでも従者に出来る。英雄ナギのファンは多く、望んでネギの従者になりたがる者は多くいるからだ。だからむしろ正確な意味でどこにも属していない才能ある者達を引きこむ理由として、無邪気な子供であるネギを使う。ネギそのものよりもこちらこそが本題の一石二鳥案だ、と。

そして刹那の護衛対象、近衛木乃香こそがそのメインターゲットなのだという。

世界屈指の潜在魔力を持つ彼女は保護者の都合上関西所属ともいえたが、裏を知らず関東の長の直系でもあるため、一概にはそうとも言えない部分がある。そして麻帆良で育った彼女は関西の日本呪術に染まつていない。故に日本呪術よりも先に関東魔法協会の主流である西洋魔法を教え込むが、彼女をネギの従者にしてしまえば、未だ関東に降らない関西を得る最大の原動力となるだろう。才能に反比例して裏を知らないからこそ利用出来る点は非常に多く、個人としての引き込みも危険を知らないが故に一番簡単とも言える。魔力がなくとも血筋だけでも利用価値は十分にある。現段階で分かる2 A一番のビックネームだ。ナギの友人でありもう一人の英雄であるサムライマスター近衛詠春の娘もある。そして詠春は子供に甘く政治力も高いとは言い難いため、友人の忘れ形見であるネギを手強く扱う可能性もまた低い。木乃香が手に入れば一石二鳥どころか三鳥にも四鳥にも出来る。メガロが欲しがらないわけがない。彼

女こそがこの計画の本題といつてよく、他の人間は巻き込まれたと言つてもいい。

神鳴流剣士桜咲刹那も関西所属と言えるが、木乃香個人の護衛でもある。関東に来てしまっているせいで関西では裏切り者扱いとなつており、木乃香がネギの元に来れば同じように着いてくる公算が高い。なにより麻帆良の裏で見てもその近接戦闘能力は若年層ではトップクラスだ。従者に出来れば魔法使いであるネギの大きな助けになるだろう。

傭兵であります魔法世界でも名が売れている龍宮真名も欲しいだろう。希有な魔眼という才能を持ち、その戦闘能力はオールレンジで群を抜いている。特に銃を用いた遠距離戦においてその実力は圧倒的だ。

真祖の吸血鬼、『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルを従者にするのは難しいだろうが、もし彼女が降ることがあれば他では比類できない完成された絶大な戦力となり、ネギを広告する上でとてもない価値を得られることになる。そうでなくて彼女はネギと戦うことを近右衛門から依頼されてそれをすでに了解しており、もし『闇の福音』と引き分け以上に持ち込んだ事実を作ることが出来れば、幼い英雄の売り出しには最高の追い風となるだろう。子供は殺さない彼女のことだ。負けたとしても生きていれば再戦の理由にもなる。そして事実上の負けでもネギが生きていれば世論を操作することで、あの『闇の福音』相手に引き分けたと周囲に思わせることも出来る。

他にも忍者やカトリックに属する魔法生徒に魔法先生の娘。古菲や神楽坂明日菜を筆頭に異常なまでに身体能力が高い一般人生徒には事欠かず、財力面で大富豪の娘でありショタコンであるとされる雪広あやかや、ブレーンとして麻帆良最高の頭脳と誉れ高い超鈴音。それにはマッドサイエンティスト葉加瀬聰美などが候補として挙げられた。

そして高い認識障害抵抗力を持つ長谷川千雨。弱性だが同様に認

識阻害抵抗を持つ日時詩緒もだ。日の件がある詩緒の場合は真名同様、魔力覚醒すると魔眼を発現する可能性もあるという。

これら説明に、真名はその日何度日かの呆れを含んだ視線でなごむを捉え、刹那は頭を抱えたくなつた。

なごむは続けた。

これらは予測でしかなく、従者候補というのも確かに飛躍した話だが、少なくとも彼が 2 A の担任となつた場合、近衛木乃香を筆頭に魔法に関わりやすい者達が集まっているあのクラスは非常に危険である。近右衛門、が仕組もうとしているネギとエヴァの戦いに巻き込まれないとはいえない。その為になごむの方からエヴァンジェリンには予防線を張つていて、近右衛門の思惑が読めない。ネギもどのような人物なのか、彼の個人情報の秘匿度合いが高くまだ掴めない。

最低限彼らの動向を見守る必要があるのだ。

なごむは日時詩緒や宮崎のどかのために。

刹那は近衛木乃香のために。

結局あの日、龍宮は傭兵として報酬さえもらえればなにも変わらないと言つて、刹那は答えを保留にした。

以降一人とも依頼や応援を求められてなごむを手伝う機会もあつたが、刹那の答えはそのままだ。木乃香を守ることに異論はない。だが現段階で彼を信頼するのを、彼女は躊躇つていた。

確かに近右衛門の最近の行動は不可解な点が多いのも事実であつた。なごむの指摘があつてやつと分かる程度のものだつたが、冬休み中についたいくつかの戦闘で内部から敵を呼び寄せたような痕跡

があつたのだ。こうなつてしまつては剎那では判断が付かないため、木乃香の父にして剎那に木乃香の護衛を頼んだ近衛詠春に連絡を取つてみたところ、気をつけてくれと言われた。どうやら近右衛門は元々、木乃香に魔法を教えることを推奨していたらしい。そして諭した富崎なごむと連絡を取りたいとも言われ、彼の連絡先を教えれば、翌日には詠春から再度連絡が入り、ネギが本当に来て魔法がバレそうになつたらでいい、裏の世界のことを剎那の裁量で教えてやつてほしいと頼まれてしまった。そして教えた後、木乃香と共に一度関西に帰つてきて欲しい、とも。

そう頼まれたからこそ剎那は躊躇つてしまつたのだ。

剎那は木乃香に魔法を知られないために関西から護衛としてやつてきた。それなのにその魔法のことを剎那が教える役になつてしまつたうえ、剎那は剎那で魔法に、裏に関する事柄で木乃香に知られたくない秘密がある。木乃香が裏を知れば、いつかは剎那のこの秘密も知られてしまうことになるだろう。彼女にはそれがたまらなく恐ろしかつた。

それに未だ、近右衛門からネギ・スプリングフィールドに関するなんのお触れも出でていない。もしかしたらこの情報 자체が間違いである可能性もまだある。

そう剎那は考えたかつたが、しかしどうやら数名の魔法関係者はなにかしら知つてゐるようであり、秘密にされているのが自分達だけであるらしいことに不安を搔き立てられてもいた。なごむの情報源は近右衛門から戦闘を依頼されたエヴァンジェリンであり、現になごむが指定した今日、木乃香が近右衛門によつて誰かを迎えて行くことを頼まれたらしいことも確認している。そして剎那は昨晩突然近右衛門から連絡を受け、西関連の報告書を作成するために明朝

学園長室へ来て欲しいと頼まれた。その前になごむから、彼の迎えに刹那を向かわせようとしていたことも聞いている。手を替えてきたことから明らかな引き離しだ。

そして一般的にはその存在を秘匿されているらしきが、詠春はネギの存在を否定しなかつた。まさか彼まで戦友の子の存在を知らないということはないだろう。となると、少なくともネギは実在するということになる。

そしてなごむの 2 A 編入。元々彼からも自分のことをさらに取り込みに来るだろうという予測を聞いていた。日時詩緒や富崎のどかといった守護対象がいるあのクラスで、そんな英雄の生け贋のよくな真似をなごむが許すわけがないからだ。だからそれを認めさせるために、近右衛門はなごむの弱みを欲しているのだという。日時詩緒と長谷川千雨を同室にしたのもその一環である可能性が高いらしく、一人は認識阻害抵抗を持っているため、意見交換できる仲間を得させることで麻帆良の非日常を追及するよう仕向けていいう話だった。そしてその追及は、必然と詩緒の最も側にいる非日常、なごむに向かうことになる可能性が高い。つまり魔法バレを狙つてやることで、その責任を彼に押しつけようという魂胆なのだ。

刹那の目の前でパズルのように、いや、バラバラの単語をヒントから埋めていくクロスワードパズルのように、なごむは麻帆良に蔓延る思惑を繋いで解いていく。

確かに今はまだ事が起きていない。だが麻帆良の上層部で何かが蠢いているのが、この富崎なごむといつ少年が言つた未来が、刹那にも想像できた。

あのクラスが英雄の子の為に作られたものであるのは間違いないのだろう。

もしさうでなくとも、何かしらに利用されようとしているのは確かだ。

すでに刹那でもそつ思えるほど状態なのだ。

クロスワードパズルは未だ半分以上を残しているが、すでになごむは完成を待たずして最終答案を予測してしまっている。

だから刹那は恐かった。この麻帆良の裏に関わって、たった数日でそれら企みを見過した富崎なごむが怖ろしかった。詠春の意志を一晩で変えてしまったときには、自身の秘密もあって絶望にも似た思いを抱いた。自分勝手だとはわかつても、後になごむに対して怒りが湧いた。そしてその怒りすらも恐怖に呑まれた。

「では、私はこれで失礼します」
「ええ」

刹那は学園長室に行くために踵を返す。

この感情がなごむの言った猜疑心であると理解しつつも、いつかのあの知謀が大切な者に牙を剥きはしないかという想像が、どうしても刹那の脳裏に湧いて出て来る。彼は冗談であつたかのように振る舞つたが、あの口魔法そのものに恨みがあるようなことも言つていたのだ。

だから彼が持つ、別次元としか言いようがない圧倒的な才と知に、刹那は

「桜咲さん」

一步を踏み出したところでなごむが呼び止め、振り返る。

「なんですか？」

「得体の知れないものが恐いですか？」

「ツ！……突然、なんだつていうんですか？」

「桜咲さんがわかりやすいだけです」

しつと答え、千里眼のように全てを見通すなむに、刹那はたじろいだ。

だがそこで彼女は踏み留まり、一度真っ直ぐに彼を見て、

「……恐いです。ですが」

それから視線を外すと自嘲気味に笑った。

「 富崎さんはずっとこれに晒されていたのですね。そう思つと、その強さを羨ましく思ひます」

刹那の田の前にいる少年はこの、得体が知れないという恐怖と戦つてきた。認識阻害が通じないが故に周囲との意識のズレが生じ、自分だけが感じとれる非日常に苛まれ続けた。彼にとつてこの麻帆良という土地そのものが、得体が知れない恐怖の代名詞だったはずなのだ。

だけど彼は巻き込まれた結果とはいえ、恐怖をはね除けて強さを手に入れた。魔法に恨みがあるようなことを言つておきながら、その魔法の暗部の象徴たる『闇の福音』に師事し、己を傷付けた魔法使い達に手を貸して、ただ守りたいだけだと言つた。そうしてでも守りたいということだと、刹那は思つた。そこには刹那も知つている裏や、それ以外の知らされていない裏もあるのだろう。彼のことだからただ単純な理由ではないはずだ。だがどこか歪ながらも守りたいのは本気なのだと刹那には感じられて、武で守ることしか出来なかつた、否、護ろうとしなかつた彼女にはそれが羨ましかつたの

だ。

狂ったように牙を剥いひつとしていたのは彼ではない。自分の方なのだ。

武しか知らなかつた少女は彼の知に触れて、強さの意味を考え始めていた。

「そうですか」

なごむも文庫本を閉じて立ち上がり、更なる問いを掛けてくる。

「桜咲さんが一番怖いものは、なんですか？」

「それ、は――」

決まつてゐる。自分が最も敬愛してゐる近衛木乃香を守ることが出来ず、さらにはこの身に隠した秘密を知られることだ。だがその秘密を答えるわけにもいかず、考え込むようになってしまつた刹那になごむは笑いかけた。

「それ、克服できるといいですね。そしたらきっと、貴方は強くなる」

完全に固まつてしまつた刹那を放置して、なごむは彼女の後ろに田をやり追い越していった。

と思つたらすぐに振り返り提案をしてきた。

「あ、今度一緒にお茶しません？ 桜咲さんはもう少しうつと緩ぐなるべきだと思うんですよ。お茶と一緒に菓子があれば、大概の悩みは解決します。じゃあ、また」

「え、あ、はい。また……」

言つだけ言つて通り過ぎていったなごむを刹那が視線で追つた先には、クラスメイトの田時詩緒と長谷川千雨がいた。

教室でも話すことがある詩緒は笑顔を向けていたが、刹那同様クラスマイトとほとんど話をしない千雨の視線は刹那を何かしら疑つているものだったので、なごむの話を思い出した彼女は慌てて頭を下げ、学園長室に行かなければいけないことを思い出してもうくさとその場を後にした。

逃げるなりに翻けだして行ってしまった刹那を、三対の視線が見送る。

「はようなごむ。オレの田の前で桜咲をナンパするたあ良い糞度胸だ」

「おはよ」

「おはまつおシオ、千雨。とりあえず踏まないで。足が痛いよ」「痛くしてんだよ。そつきの桜咲、驚きすぎきて感情値が空白になつてたぞ」

「ステータスつてやつか？」

「ああ」

「脅かしすぎちゃつたかな？」

「ありや脅かされたつていうよつ、……やっぱり驚きすぎだな。知つてたか？ 驚きからでも吊り橋効果はあるんだぜ」

「なんだつていいだろ。たつと行くぞ。こじだと視線を集める

女子寮にいる男子生徒と、彼と親しげにしている女子生徒達。刹那と居たときもだったが、話しかけてくる者はいなくとも千雨の言うとおり注目は集めていた。

「なんだつていいとか言いながら、あつたんはさつき桜咲のこと睨んでたよな」

「うつせえぞてめえつ！ その名で呼ぶんじゃねえ！」

「ねえねえ一人とも、昨日ガトーショコラ焼いたんだけど、後で味見てもらつてもいい？ 自分はちょうどいいと思つたんだけど、最初に味見た人がブランデー塗れつてうるさくて」

「食べるぞつ！ 食べる食べる！ なごむのガトーショコラは絶品だからな！ ちつも食べろ絶対はまるぞ！」

「聞けよつ！ 呼ぶなつ！ 私も食べるぞつ。それに今のは明らかにバレンタインデーにチョコあげなかつたことへの当てつけだらうが！」

……チョコで酒精が欲しいのなら、トップピングでアルコール多めのガナッシュとか付けてやつたらいいんじやないか？」

「あー、それいいねえ。そうしよつか。そうだなあ、ホワイトチョコにミントリキユールとオレンジリキユールのガナッシュは必須として、他にもチョコもお酒も種類ごとにパターン作つていっぱいにしよう。

……ゲーム上のイベントでのみチョコくれるとか、それくらいだつたら忘れたままでいてほしかつた……」

「しゃーねえじやねえか、馴染みないんだからよ。いつまでもぐだぐだいつてんじやねえ。あとそれクリームにしてマカロンにした方がよくねえ？ ガトーショコラもガナッシュも、なごむが作るタイプは濃いのじやん」

「クリーム系も濃いだらうが。さつぱり系が欲しくてミントとホワイトチョコのだつたら、たしかレアチーズケーキもどきのやつもあつたよな？ レモンとミント多めにすれば良い感じになるんじやないか

「あ、なにそれオレ知らねえぞ！ なごむそれ作つてこいー！」

結局、騒がしい三人は注目を集めながら寮を出たのだった。

龍宮真名は視線の先にある近衛木乃香と神楽坂明日菜の姿を、自身に認識阻害をかけ建物の屋上を伝い駆けながらただ黙つて追っていた。

彼女達一人は木乃香の祖父、近衛近右衛門から今日来る予定となつていた客人を迎へに行くよう頼まれ、先ほどまで駅前で待つていたのだが、待てども待てども現れない客人の姿にこのままだと自分達が学校に遅刻しかねないと判断。どこかですれ違つてしまつて先行つてしまつたのかもしさないと考え、とりあえず登校することにしたのだ。そして今はもう駅から走り続けて、そろそろ女子校舎というところまで来ていた。

そんな二人の高所を取り隠れながら追う真名は少々ぐつたりとしていた。

ローラースケートで走る木乃香はともかくとして、ただの一本の足でそれに並走するもまるで息を切らせる様子のない明日菜の身体能力の高さに、呆れと疲労を覚えていたのだ。

真名はクラスメイトの某忍者のように移動力に長けているわけでもなかつたが、そこは裏で傭兵業を続ける存在。高所を伝いながらとはいえそうそう後れをとることはない。だがそれでいつても彼女の一般人離れした脚力から生み出される速度は、追う真名に疲れを感じさせるには充分なものであった。

そんな明日菜達を追い抜く勢いで後ろから小さな影が駆けてくる。その存在に気付いた真名は面倒くさそうに眉を顰めた。せっかく何事もなく依頼達成出来そうだったのにと考えてしまったのだ。

影は素晴らしい整った顔立ちの、歳は十程度だろうか、メガネを掛けた赤毛の少年だった。

少女達は学校指定制服とはいえ荷物は鞄一つと身軽な格好なのに對して、少年のそれは魔法使い然としたローブを身に纏い、大きなリュックと、明らかに魔法発動体である背丈を超えるサイズの杖を背負つたものであり、とてもじゃないが走るのに適した格好ではない。

だが少年はまるで息を切らせる様子もなく明日菜と木乃香に付き、並んだ明日菜をちらりと見て、何事かを言つた。距離もあり、後ろではなくどちらかといふと並走するような形で一人を追つていた真名の視点からでは読唇も出来ない角度であつたため、一体どんなやり取りが行われているのかわからなかつたが、その発言のせいで彼らの足が止まつたのはわかつた。

なにやら怒り狂い、子供に向けて半泣きで怒鳴り始めた明日菜の様子を視界の端に、真名は女子校舎屋上にて立ち止まり、雇い主に連絡を入れる。

視線の先で木乃香が二人を仲裁しようとしたようだが、とうとう明日菜は堪忍袋の緒が切れてしまつたらしく、持ち前の馬鹿力でもつて、なんどこうことか子供の頭を鷙掴みにして持ち上げてしまつた。

宙づりにされジタバタと暴れる子供。

真名が雇い主に現在状況を念話で一方的に送つたところ、雇い主からの返答はすぐに来た。どうやら近右衛門からの拘束がちょうど終わつたところだつたらしい。内容はすぐに向かうというものだつ

た。

次いでもう一人にも送る。じゅらはなにやら職員室で拘束されている最中らしく、少し待つてくれとのことだ。

そうこいつしている間に明日菜が矛を収めたらしく、手を放して解放された子供が何事かを訴えるのを他所に、少女一人は遅刻するまいと再び校舎に向かおうとする。

だがそんな彼女達を呼び止める声が真名にも聞こえた。当然子供を置いて先に行こうとしていた一人は足を止め、声の方を見る。彼女達の頭上、真名の足元、中等部校舎から手を振る無精髭に灰白色のスーツの男性、タカミチ・T・高畑。2 Aの担任教師だ。タカミチに挨拶を返す生徒二人と、手を振つて答える子供。

そして、微かにだが聞こえてくるタカミチの声。

『麻帆良学園へようこそ。いい所でしょう？ ネギ先生？』

「やはりですか」

真名は背後から聞こえた声と、自身のよりも強力な認識阻害結界の展開を見てとり、振り返る。

そこには近衛木乃香の護衛を依頼した桜咲刹那と、彼ら（・・・）の監視を依頼した宮崎なごむがいた。

一人は真名に習つて身を乗り出し、下の四人を見る。

「桜咲はこんなものだらうけど、富崎は思つたより早かつたね」

「転移です。職員室で捕まっていたんですが、トイレに行くと言つて身代わりの式神を置いてきました。朝会とかやつて自分のこと知らせるとかと思つていたんですけど、まったくその気配がなかつたのであれば時間稼ぎでしょう」「学校で使えなくしたわけじゃなかつたのか

「学園長室だけですよ」

言ひながら、『テコパンでもするかのよつこな』むが彼らに向けて指を弾いた。

その先を視線で追うと、タカミチがネギ達のところに歩み寄つていくところだつた。

『大丈夫だよアスナ君、彼は頭がいいんだ。安心したまえ』

途端にクリアな音声が三人の元に届くよつになる。諜報魔法の一種のようだ。

『…………え、でも先生……そんなこと言われても…………』

『それに、今日から僕に代わつて彼が君達A組の担任になつてくれるんだよ』

ぎゅつ、と刹那が肩に掛けた竹刀袋の緒を強く握る。

「確定か。それにしても、うあー、彼すつごい魔力駄々漏れだね」「確かにすごい魔力だ。そういうば、この辺りはとつぐに富崎の結界内だろう? なんで自動で魔力抑制されていないんだい?」

「何も言われないままだつたらそうするつもりだつたんだけどね。登校途中で近右衛門から連絡があつて、『今から入つてくる大きな魔力は抑制や捕縛をしないでくれ』って釘刺されちゃつた。理由を

聞いたら『客』だからだつてさ

「客、ですか

「客に教師させるとか、食客とでも言つもつかな?」

「また古いね ん?」

「つて、わつ」

真名となごむの二人が慌てた様子で子供 ネギに意識を向ける。
ハ……ハツ……、という声と共に鼻穴を広げ徐々に顎を上げていく
という、次に何が起こるのか分かりやすいモーションでもって、彼
の魔力が膨れ上がりだしたのだ。

とつさになごむが術式を起動。ネギの魔力を抑制し始める。

それとほぼ同時にハクチソツとネギがクシャミをした。するとそ
こを起点とした魔力を伴う突風が起こり、彼の正面に立っていた神
楽坂明日菜を襲つた。

途端、明日菜のブレザーとスカートが弾け飛び、ちりぢりになる。

なごむは腕を突き出して横にいた刹那を制止すると、そっぽを向
いて見ないようにしつつ、彼らの周囲にも認識阻害結界を重ね掛け
する。

毛糸のクマ柄パンツがお披露目されたのをネギとタカミチが目撃
した。

怪我はなかつたがシャツと下着姿になつた神楽坂や、突然魔力を
抑制されたネギが騒ぎ始めた声を聞きながら、間に合わなかつたか
となごむが息を吐いた。

「刹那さんわかってると思うけどそのままストップね。とりあえず
強めに思考誘導認識阻害かけといったから、そつそつ簡単にバレない
と思う」

「……今のは魔法ですか」

真名やな」むのように魔力感知に長けていない刹那が問う。その視線は先ほどまで以上に鋭くなっていた。ギリギリと、全身から殺気が溢れ出している。

「うん。クシャミの拍子に魔力暴走起こして、風属性の武装解除が発動したんだよ。一応完全発動は抑えられたけど、全然間に合わなかつた。いくら元から学園結界の強力な認識阻害があつても、あれはありえないねえ。今も『魔力が？！』とか叫んでるし。

あーでも、近衛さんはあまり気にしてなさそうだね。なんとか誤魔化せてる？ ていうか目のやり場に困るから早いとこ上着貸してやりなよデスマガネ」

「魔力暴走はわかりますが、それが魔法になるといつのはありますか」

通常、魔法とは何かしらの詠唱や術式を通して行われるものを目指す。確かにネギや木乃香ほどの高い魔力と媒介、そしてそれを求める意志があれば、魔法と知らなくとも魔法的効果が引き起こされる可能性はあつた。だが先ほどのネギはただクシャミをしただけだ。背負つた杖に意志を通しておらず、詠唱もしていない。それなのにちゃんと属性を持つた魔法が発動するとは、刹那には考えられなかつた。

「生まれ持つた大量の潜在魔力に対して、その制御の訓練をほとんどしてこなかつたんだろうね。後は精霊との交信率の問題だよ。魔力が魔法的な覚醒をしており、かつ精霊魔法を多用することで、常に彼らと簡易なパスが繋がつていてる状態になつていてるんだ。早い話があの子の大量駄々漏れ魔力に精霊が群がつて来ていて、なにかしらの拍子の度に爆発するガスが彼の周囲に充满しているようなものなんだ」

神楽坂さん、攻撃魔法が発動してたら死んじゃってたかもね。どちらりとなごむが口にする。

「まあ、あの様子を見ているとわざとやつているんじゃないかと疑つてしまつよ。 うわ、今度は『魔法が？！』つて、うわー」

「漏れた魔力だけで身体強化と魔力障壁を常時展開していたし、あながち無いとも言い切れないな。それに神楽坂を追い越す速度で走つていたのに、彼は個人用の認識阻害結界を使つていなかつた」

なごむの呆れにつられたのか、朝から疲れてしまつたせいか、彼女にしてはあまりらしくないことに、真名がなごむを補足するようなことを言つた。

「学園結界があればそこまで不審に思われないだろうけど、あの格好でだと走つているだけでもちょっと引っ掛かる人もいそうだね」「そり、なのですか……」

さすがに魔力抑制が発動したことで見られていることを自覚し、刹那の殺気を浴びたことで位置も把握したのだろう。タカミチが一瞬、三人に気まずげな視線を向けた。

なごむ達から話を聞いた刹那は、タカミチとネギの二人を、夜の警備で外敵と遭遇したときとまったく同じ目で見下ろす。

タカミチは魔法使いではないが、麻帆良のN.O.2と讃れ高い凄腕の戦闘者だ。彼であればなごむ達同様、あのクシャミの危険性に気付いていそうなものだが、彼はすぐ側にいながらもネギのクシャミを止めようとはしなかった。

そう思うと、クラスメイトである明日菜のことがどうでもいいわけではなかつたが、もし木乃香にあの矛先が向いていたらと考えて

しまい、刹那はすぐにでも夕凪を鞄から抜き放ちたくて仕方がなかつた。

それでも抜かないのは、多少なりとも彼女なりに成長した証だらうか。

ネギ・スプリングフィールドは英雄の子だ。下手に傷を付ければ刹那の身どころか、木乃香にも危険が及ぶ可能性がある。彼に関する計画が麻帆良主導であればまだなんとかなるかもしないが、そのバックにある魔法世界組織主導となるとどうにもならない。

だが木乃香の護衛として、先ほどの魔力暴走は許容できるものではない。放置するには危険すぎた。あの秘匿意識の薄さや魔力制御の甘さでは、故意でも事故でも魔法バレや物理的危険性があるということではないか。

かといって刹那にあるのはこの一太刀を拠り所とした武のみ。傷付けることしかできない。故に刹那は、

「富崎さん」

なごむを利用もとい、頼つた。

「のままネギ・スプリングフィールドが教師となれば、近衛木乃香どころか確実に日時詩緒や長谷川千雨への魔法バレも起ころ。彼が彼女達の危機に対し用意をしていないわけがない。

名前を呼ばれただけでなごむはうんと頷き、あの子は危険だね、と返す。

だが、

「手を出さないよ。出す意味が無い」

「 なつ？！ なぜですか！」

なごむの口から続いて出た言葉を、刹那就理解出来なかつた。この状況で対処しなければ、ネギ・スプリングフィールドは確実に2 Aの担任教師になつてしまつ。そうなれば、認識阻害が効かずすでに麻帆良の異常を疑つてゐるらしき目時詩緒や長谷川千雨は、ネギがその異常となにかしらの関係があると思い、自分達の考えの確信を高めるだろう。あとは少々彼に注目しておくだけでいい。ネギがあのような調子では、すぐにも魔法を知つてしまふはずだ。そして巻き込まれるかもしない。クシヤミー一つで怪我どころか、死んでしまうかもしない。人払いや認識阻害が効きにくい分、巻き込まれる可能性がある二人は高いはずだ。

ネギの放置は、彼女達の安全を願うなごむにとつてありえない行為なのだ。

しかし刹那就の訴えをビート吹く風となごむは携帯を取り出し、登録されたダイヤルから目的の番号を見つけると発信。校舎のとある一角を見つめた。その間に真名に尋ねる。

「龍宮さん。しつかり撮れてます？」

「……なんで知つているんだい？」

「貴方の連絡先を彼らに教えたのが自分だからですよ」

刹那就がわけが分からぬといった顔をする横で、真名がその懐からボイスレコーダーや小型カメラ、魔法記録媒体を取り出す。

「ぱつちりだよ。依頼通り近衛木乃香の日常風景登校編が収まつてる」

刹那が田を剥き、息を呑んだ。

「さつすがプロ。ですがそれは近衛木乃香さんの護衛である桜咲さんが没収してあげて下さい。龍宮さんは後ほどバケツでんみつの刑です」

「くくっ、そうきたか」

「え、え？　え？」

なごむは見つめる。ネギ達のすぐ側、だがここからは影になつていて、見ようとしなければ見えない場所。そしておわりにはタカミチからも死角になつてている位置。

その視線に気付いた真名が同じ場所を見て、一時固まる。そして混乱を続ける刹那の名を呼び、顎をしゃくって同じ場所を見るように促す。

そこまでされて刹那も気付いた。

やつと相手が出たのか、なごむが携帯の通話口に語りかける。

「……うん。わかつた。それでいいのなら、そうしよう。……うん。うん。十分に証拠は揃つたから、後は予定通りつてことだ」

刹那がより一層の混乱と驚愕の表情でなごむに振り返り、真名がそつこにうとか、と呟く。

なごむの視線の先には、刹那達を見上げながら携帯を片手にする田時詩緒と、ちらりと屋上組を一瞥した以外はネギ達を厳しい表情で見つめている長谷川千雨の姿があった。

近衛近右衛門は焦つていた。

わざわざ理由をつけて木乃香の護衛から外しておいた桜咲刹那と、会つタイミングを担任教師任命後にするつもりであつた宮崎なごむが、就任前のネギ・スプリングフィールドを確認してしまつたからだ。しかもネギがクシャミで魔力暴走から武装解除を起こしたのを見られたうえ、タカミチの不注意で2 Aの担任にするつもりであることを知られてしまった。

だがまだこれだけであればどうにか出来ただろう。

桜咲刹那には政治力など皆無であり、あるのは木乃香への執着と神鳴流剣術くらいのものだ。そのうえ木乃香に負い目も持つており、近付こうとしない。クラスメイトの距離で満足している。それ以上の接近は避けている。だが執着はある。故に彼女の守護のためと言えば侵入者討伐にも無償で参加する。そして視野が狭く、木乃香を目の前の事態から守ることばかりで、全体を見て行動できるほどの賢さもない。西への報告も自身があちらで裏切り者扱いされていることを知つているせいで、恩義ある詠春に迷惑はかけまいと木乃香は無事という程度の最小限なものにしている。近右衛門にとつて彼女は都合が良い存在であった。いくらでも御せる。

宮崎なごむはそう簡単にいかないが、知るタイミングが多少悪かつただけともいえた。ネギが担任になるのは政治的な圧力による絡みからであり、近右衛門の権力ではどうしようもなかつたと押し切ればいい。契約の禁止項目である政治的な接触にふれる内容となるが、そこを突いてもエヴァの件で今のなごむは麻帆良を出られない。妥協した方が特であると彼はすぐに理解するはずだ。担任になるこ

とによる魔法的な接觸についても前担任のタカミチが元々魔法側だったのと、クラスメイトにも多数の魔法側の人間がいるのだから今更である。ネギの魔力暴走もなごむにわかりやすいよう、一時的な魔力封印などのペナルティを「えてやれば問題ない。そしてこれらを押し切るための理由に、ネギの魔力制御をなごむに教えてくれるよう頼めば、彼も納得しやすく一人の間に魔法使いとしての接点も出来る。しかも天才と名高いネギであれば、なごむの多胞体術式をすぐに理解出来るかもしねり。

だがそつは問屋が卸さなかつた。

「というわけで、自分は関東魔法協会を脱会します。あ、日時詩緒ならび長谷川千雨両名に関東魔法協会に所属する意志はなく、魔法的には自分の庇護下がいいとのことでしたので、今まで通り、魔法的政治的接触は厳禁ですのであしからず。

次は今回の魔法バレを引き起こしたネギ・スプリングフィールドと、積極的関与をした貴方方お二人、近衛近右衛門殿とタカミチ・T・高畑さんに関する処遇がどうなるのか知りたいのですが……」

「その意志は、変わらんのかのう？」

「変わりません。魔法的及び政治的接觸は明らかな契約違反です。関東に組みしても関東はこの要求を守れないどころか元から守る気などなかつたというのに、所属している意味はありませんから。今後は守護対象を守りやすいよう自由にさせていただきます。所属時の拘束が契約に支障をきたさない限りであれば、が関東魔法協会所屬の条件でしたので、支障を来すことが判明したため抜けるだけです」

日時詩緒と長谷川千雨がネギのクシャマリによる武装解除を起こしたのを見てしまい、さらにネギの魔法発言などを聞いたことで、彼

が背負っていた杖の存在もあって魔法を確信。魔法バレを引き起こしてしまったというのだ。

本来麻帆良にいる一般人相手であればこの程度、まだ誤魔化しは効くレベルである。だがこの二人は能力の件もあり、以前から麻帆良の裏や超常を疑っていた。認識阻害結界による意識誘導も効果が薄いまたは無いため、些細なことでも魔法へと繋がる状態であったのだ。そのように仕組んだ近右衛門であつたが、魔法バレのタイミングとしては最悪といえただろう。望んだ通りの結果とはとてもじゃないが言い難い状況となってしまった。

なごむには近右衛門からネギの魔力抑制を止めるよう指示がいつていた。そのネギが魔力暴走を引き起こし、それをなごむが抑制を発動させて多少なりとも軽減させている。その時そばにいたタカミチは明らかに魔力が高まっていたネギのクシャミを止めようとしなかつた。しかもそこに来て会話認識阻害などをかけずに魔法に関連する発言をネギが連発してしまっては、完全に近右衛門、タカミチ、ネギの三名による失態だ。せめてネギが会話認識阻害効果がある結界を張つていれば、いくら彼女達には効果がないといつても行動と意志は示せた。だがそれもなく、そして近右衛門の指示が無ければなごむは魔法バレを防げたという結論にも至るため、契約の内容上確かに支障を来すという判断になる。

近右衛門が求めていたはずの事故や、なごむの責任はどこにもない。近右衛門も、まさかネギが初日からここまで迂闊な行動をとるとは思つていなかつたのだ。とつたとしても、ここまで的確に悪い結果を生み出せるタイミングになるとは想定外に過ぎた。

せめてネギが担任になることをなごむに了承させてからであれば良かったのだが、現在はそれ以前の段階である。彼らが学園長室に来る前になごむが単身学園長室に乗り込んでしまつたため、ネギは別室にて A 副担任源しづなと共に待機。一緒に居た明日菜

と木乃香は詩緒と千雨、そして真名と共にすでに教室に向かってしまった。ここにいるのは近右衛門とタカミチ、なごむの三名だけだ。

だがこれだけであればまだ、なごむは関東を抜けるデメリットの方が大きい。なにせ彼は『闇の福音』の弟子を公言している。そんな状況で関東魔法協会を抜ければ、ここに所属している魔法使い達は彼が完全に『闇の福音』に与したと見るからだ。そうなつては彼の守護対象にも良い視線は向けられなくなる。最悪の場合、以前危惧した暴走もあり得るだろう。

近右衛門もそれがわからないなごむだとは思つていなかつたが、もしかしたらとも思つていた。最も大切にしているようである且時詩緒に魔法バレが起きたことで、冷静な判断力を欠いている可能性だ。

このままなごむが関東魔法協会から抜けてしまうと、近右衛門は彼に対してもつていた魔法的な指揮権を失うことになる。エヴァンジェリン一派も今まで以上に指揮から外れた状態になるかもしれません。そうなると正義の魔法使い達が暴走する可能性はさらに高くなり、退路を断たれたなごむは最悪の方向へ、麻帆良との敵対という方向へ舵を取るかもしれないのだ。

どちらにどつても損しかない。

故に近右衛門は努めて平静に、考え方すよつ語りかける。

「護衛権はどうするのじゃ？ 抜ければそれも契約の範囲内だったのじゃから、失効することになるのじゃぞ」

「おかしなことを言いますね。なくなるわけがないじゃないですか。これらは本来、自分との賠償契約、償いの一環として支払われた対価です。護衛権に伴う関東魔法協会所属は組織の力を借りられると思つてのことと、先ほど申し上げたとおり逆に護衛に支障を来すと判断したから抜けるだけです」

「確かに賠償契約じゃが、護衛権の内容は所属することで認めるといつものじゃ。この内容じゃと失効するぞい。それにエヴァの件はどうする？ 君は彼女の弟子じゃらう。幾ら抑えるための弟子じゃと言つても、協会を抜ければ君も、今回魔法を知った二人も、彼女と同じ悪の魔法使いと思われるかもしけんぞ。せめて所属はしつた方がいいと思うのじゃが」

「それくらいなら護衛権はなくても勝手にやるだけなので構わないのですが、うーん、確かにそうですね。そうなつてしまつては、そのような見方をする人達も出て来るでしょう。いくら説明してもそういう人は絶えませんから」

「なにも焦つて答えをださんでもいいじゃらう。今日はこれから編入の挨拶もあるのじゃし、時間もおしておる。今はまずじつくりと考えて」

手応え在りと見た近右衛門はこゝぞとばかりに押すが、

「ですが、それを抑えるのが関東魔法協会理事である貴方のお仕事ではないのですか、近衛近右衛門殿。ましてや今回の件は明らかに自分との契約に対する背信行為、いえ、賠償契約の加害者側から受けた一方的な破棄です。償う気がない相手に、こちらが妥協する理由がどこにあります？」

「いやなに、今回の件は本当に不幸な事故じゃつただけじゃ。いつも行き違いと勘違いが重なつただけでの。儂らもネギ君のことは天才だと聞いておつたから、このようなミスをするとは思つていなかつた。それに一応は他所から預かる魔法使いじゃから、客人じゃ。

「いやなに、今回の件は本当に不幸な事故じゃつただけじゃ。いくつも行き違いと勘違いが重なつただけでの。儂らもネギ君のことは天才だと聞いておつたから、このようなミスをするとは思つていなかつた。それに一応は他所から預かる魔法使いじゃから、客人じゃ。

いきなり魔力抑制をするわけにもいかんかった。彼を預かることになつたのも本国からの要請での、断ることも難しい。そこで出張も多く魔法先生でもあるタカミチ君のクラスにいれることで凌ごうと思うとつたのじゃよ。これは元々宮崎君との契約以前から決まっておつたことじやし、魔法先生が他の魔法先生に代わるだけじや。問題なかう」

「なるほど。前提からして今回の件は政治的接触の意志はなく、魔法的接触もまったくの事故であると。契約の破棄も背信の意志もないと。そういうことですか？」

「フォツフォツフォツフォツ、そういうことじや」

「んー、そうですか。ところで高畠先生、察するにネギ・スプリングフィールドと既知の仲であつたようですが、彼の魔力制御の甘さを知らなかつたのですか？ 知らなかつたとしても先ほどのクシャミは無視できないほどの魔力収束でしたよね。下手をすれば攻撃魔法が発動していくもおかしくないほどの収束でした。側にいたのに、どうして手を出さなかつたのですか？」

「すまないね、僕は生まれつきの体質で魔法が使えないんだ。だから魔法に関してはからつきしなんだよ。それに彼と僕は友人だけど、彼の故郷であるウェールズに行つた際に少し遊んだりする程度だからね、魔力制御のことも知らなかつたんだ」

近右衛門からの念話で言われた通りにタカミチは答える。

「彼は担任になつた場合、科目はどの授業を受け持つ予定だつたのですか？」

「出張の多い僕の代わりだから、英語だよ」

「ふむ。では事前の実力調査も何も無しに、天才という触れ込みだけの魔法使いの子供を教師として雇おうとしたと。しかもいきなり担任として。というか彼、教員免許はどうなつてているのです？ ど

うしてここに来ることになったのです？」

「あ、いや、もちろん最初の間は教育実習生だよ。それに彼は向こうの大学で教員免許は取つてあるんだ。来ることになった理由は、魔法学校の卒業課題が日本で教師をやることだったからなんだ」「教育実習生なのに教員免許を持つているだなんて不思議ですね。一体どこの英国大学で日本の教員免許なんてもとの発行許可を出してくれるのでしょうか？ 魔法学校に通いながら他の大学に行って履修したのですか？ それともその魔法学校で出してくれたのですか？ それに教育実習生に授業を持たせたら、生徒達の単位はもしかしてお一人も無免許ですか？」

「フォツ？！ も、もちろん持つとるわい」

「……僕のは職員室にあるけど、後で見るかい？」

「いえ、結構です。高畠先生は麻帆良の学校出身だと伺つてましたし、長年理事を務めている近右衛門殿と二人、いくらでも偽造できそうですから見るだけ無駄です。まあここは麻帆良です。自分も魔法使い側の人間である以上、その程度の犯罪行為でとやかく言いつもりは今更ありません。実力さえあればですが」

言外に麻帆良や魔法使いといつ存在は犯罪の温床であるという内容に、近右衛門はまたしてもフォツと奇声をあげる。

「ぐうう。……それで富崎君、今回の件は納得してくれたかの？」「するわけないじゃないですか」

あつさりと、すっぱりと、なごむは近右衛門の言葉を切つて捨てた。白い長眉毛の下、元からわかりにくい目を細めて近右衛門はなごむを睥睨する。

「やうかの、とはいここは魔法使いが多い。エヴァ然り君然り、どうにも一枚岩ではいかんもののじゃ。正直なところ、儂一人では御

し切れとらんのが現状じゃ。それでも多少の人望はあつての、そいつたもののお陰でこれまでやつてこられた。組織を動かすうえで必要なものの一つは、手と手を繋ぐ協力関係なのじゃよ、富崎君。その手が届かない環境に君を放り投げることこそが、儂は君との間に交わした契約への背信行為だと思つとつたのじゃがの「

少々脅しも込めて吐かれた言葉に、だがなごむはにひつと笑つて言い返す。

「そのような発言はせめて謝罪してからにして下さい。今回もまだいただいてませんよ？ それに彼が来る件が契約前から決まつていたのでしたら、そのことを事前に知らせなかつた時点で誠意もなにもあつたものじゃないです。自分としては手を繋ぐどころか、むしろ謝罪の件も含み糞ろにされていると、こちらが差し出した手をたき落とされたと感じますよ。今の自分はなにかおかしな事を言つていますか？」

「……こつとらんの」

「やつですよね。それに自分は謝罪よりも実利を求めます。それが今回は関東魔法協会の脱会及び自由な護衛権だつたとこつだけです。それがいただけるのでしたら、納得しましよう」

「……謝罪の件については、君がいらないうのならそれでいいじゃんつ。じゃがな宮崎君、今君が脱会すれば君にも麻帆良にも不利益しか

「わかりませんか、近右衛門殿。このままいけばネギ・スプリングフィールドはオコジョ刑ですよ」

それを聞いた近右衛門は、しばしの間目の前の少年に呆れた。

オコジョ刑とは、関東魔法協会が組みする魔法組織で一般人相手に魔法バレを起こした際、魔法使いに処される最も一般的な刑罰だ。内容はその名の通り、オコジョになる呪いを掛けられるというもの。正確にはオコジョ精霊と呼ばれる種類の喋るオコジョになるのだが、恩赦などがなければ基本的に一生涯そのままの姿で暮らすことになるある種の終身刑であり、ふざけた内容の割に文化人として生きていた者にとつて非常に重い刑罰ともいえた。

確かに魔法バレを起こせば、このオコジョ刑が一般的とされる。だがネギは英雄の子であり、最大の次期英雄候補だ。本国でも彼の将来に期待する者は多く、この麻帆良でもそれは同じである。ここにいるほとんどの魔法使い達が、ネギ・スプリングフィールドがオコジョ刑でその魔法使いとして生涯を終えることを願つていなし。そしてそれは麻帆良の自治を認められた理事の近右衛門も同じであり、刑を執行する本国メガロメセンブリアへ罪を犯したと連絡をいれるのも近右衛門の役割なのだ。

つまり彼が報告しなければ、ネギのオコジョ刑など起こりえないのである。そしてその罪もなごむの件のような例外は存在するため、報告の仕方如何では厳重注意程度で済んでしまう。

さらに報告が行き刑が執行されたとしても、ネギにはすぐにでも恩赦が与えられるだろう。それほどまでに彼の利用価値は高いと、本国の魔法使い達は考えていた。

ネギ・スプリングフィールドという存在にとつてオコジョ刑はあつてないようなものなのだ。

だからなごむの発言は、近右衛門にとつてその程度と鼻で笑えるレベルの脅しでしかなかった。

どこまでネギに関することを知っているのかはわからないが、おそらくはそういう背景を知らずにこの一言を攻めの一手中に使ったなごむに足りないものは、メガロ系列魔法使いとしての一般常識だ。

どれほど多くの魔法使いがネギに夢を見ているか知らない。やはり如何な天才も人の子、この世界の裏に関わったのはつい最近のことであり、知らないものは知らないのだろうと、呆れの後にはむしろ微笑ましいとすら近右衛門は思った。素材はいいのだ、みつちり儂が鍛えてやるうと

「それに例えオコジヨ刑を逃れても彼は当分の間、いえ、最悪の場合は一生涯、女性の敵と見なされるかもせんね。開き直れば別でしょうが」

「なごむが続けた言葉に、近右衛門はフオ？ と息を漏らした。ネギは見た目も愛らしい美少年だ。女性受けはすごぶるいいはずなんだ。

「どういづことかの？」

「えっと、ネギ・スプリングフィールドがここ麻帆良に入つてからの行動について報告が上がっています。満員電車内の女生徒へのタッチ、及びクシャミによる突風で集団スカート捲り。一般人の前で個人認識阻害結界なしでの魔力強化移動。神楽坂明日菜さんへの失恋占い。クシャミによる武装解除で衣服の損壊と強制野外露出。謝罪もなくそれを悪びれた様子もないまま魔法実在を察せる発言。そして件の魔法バレ。さらに隣の部屋ですが先ほど源しづな教諭の胸に顔を埋めた挙げ句、またしてもクシャミをしたようですね。現在は強制魔力抑制しているので魔法が発動するほどでもあります。でしたが、やはり魔力制御が甘くクシャミと同時に魔力の上昇を確認しています。抑制がなかつたら全裸にでもしてたんじやないですか？ これ。秘匿のひの字もないどころか、とんだセクハラ変態小僧ですね。完璧に強制わいせつ罪です。見目が良くて子供である点。学園結界の認識阻害効果。被害や目撃が個人に連続していない等の理由から偶然として見逃されており、許されているのでしょうか？」

けど、占い以外他の男性がやつていたら一瞬でお縄ですよ。正直羨ましいです。まあなんにせよですが、魔力暴走のしやすさ、女性の前でしかクシャミをしない、しかもエチケットとして手で抑えない、もちろん事前の魔力対処もしていない、謝罪もない等々、一連の流れを見れば多くの人間がわざとやつているんじゃないかと疑うでしょうね。

あ、これらを確認したのは自分の友人の一人で女性です。姿が見えないと想いますが今も彼を監視してくれています。記憶を覗く魔法を応用して現実に映像再現し、それを録画すればいいだけですので、彼女がいれば証拠資料は幾らでも作れます。

ところでですが、無所属になつた自分の庇護下に入つたおシオと千雨の二人は現在、表立つて魔法に関わるつもりはないそうです。今朝の件を見なかつたこと聞かなかつたことに対するのは吝かではないと言つてましたので、その場合はこれら資料を関係各所に提出したりする必要はなくなるため、彼女の記憶を映像として形にする必要もなくなるでしょう。一度形にするどこから漏れるかわからなりですし、成型してやるのも結構手間ですからね。ああでも、一つぐらいは作つておいた方がいいかもしません。何かあつたときのために。

「どう思います？」

近右衛門とタカミチの動きが止まっていた。

無数に生まれたなごむとその友人なる者への疑問、さらにたつた一～二時間の間に起こしたネギの失態の多さに、思考停止を余儀なくされたのだ。

しばしの間近右衛門達の思考停止は続き、やつとの思いで耳に残つていたなごむの最後の一文を反芻した近右衛門は絶望と光明を見出した。

形のある資料が残る。それは非常に拙いことだ。

なごむを御するために彼の守護対象に魔法バレを促すという魔法犯罪を、近右衛門はほとんどの魔法使い達には秘密にして行動してきた。報告されたネギの失態が全て事実であっても幾らでももみ消せるし、なんだかんだで子供のしたこと。確かに人気は落ちるが、失態を関東魔法協会内で公開されるだけであれば、なごむが言うほど大した傷にはならない。だがこれが証拠資料と共に外部に漏れればネギの黒歴史になるのは確実であり、近右衛門、ひいては麻帆良主導で魔法バレを引き起こした資料にもなる。彼が大人になつてからほじくり返された場合、現在負う傷よりも大きなものとなるだろう。

だが日時詩緒と長谷川千雨に魔法に関わるつもりはないという。

なら今回の件を黙つていればいいのだ。
なごむが言つているのはそういうことだ。

ネギが魔法バレをしたことも、詩緒と千雨が魔法を知ったことも、なごむが関東を抜けたことも、黙つていればいい。たつたそれだけでネギに失態はなく、近右衛門も不義理を犯さず、なごむは変わらず護衛が出来る。表面上は今まで通りだ。

すでに関東魔法協会内ではなごむを知らない者はなく、その過去歴も彼自身の意志により公開されている。『闇の福音』を抑えていることも、希代の魔法発明家であることも、魔法具発明家であることも、それを材料以外無償で『闇の福音』と共に麻帆良魔法使いに提供したこと、彼が守ろうとするものも、近右衛門となごむが契約を交わし関東に所属したことも、知られている。故に彼が関東魔法協会を抜けたことを知られても、詩緒と千雨が魔法を知ったことが知られても、理由を問いただされる。彼の実力はすでに周知のものとなつており、『闇の福音』の抑えであるという存在感は大きいからだ。なごむに追及がいけば、彼は資料を開くだろう。そして

そこからネギの失態と、近右衛門がなごむにした仕打ちが表沙汰になってしまいます。

「……その『友人』とお会いしたいのじゃが、いいかのう？」

「彼女の身の安全に関わるので拒否します」

「今話の信憑性については？」

「ネギ・スプリングフィールドの記憶でも覗いてみればいいのでは？」

ハツタリかもしれないような非常に疑わしい発言だが、少なくとも証拠資料作成は可能だろうと近右衛門はふんでいた。なごむが使う多胞体術式の基礎の基礎、現段階の近右衛門は理解というよりも丸暗記したようなものなので不可能だが、空間安定用多胞体術式を応用することで姿や魔力を完全に隠す魔法は作成可能だと考えたからだ。魔力魔法球の範囲設定や魔力漏れを無くしたりするのはあれの応用であり、転移魔法に使っているのは発展型だ。応用で済みそうな姿隠し程度、なごむであればすぐにでも作れるだろう。故に協力者が一人いれば十分に可能なのだ。最悪事実でさえあれば、ネギの記憶そのものを複写して証拠として提出すればいい。

非常に強力な、強力すぎるほどの魔法発明家である宮崎なごむ。そのうえ謀略もお手の物らしい。

「……宮崎君。君は、自分が一体何を相手にしようとしているか、わかつておるのか？」

声色はそれまでとさほど変わりはない。だがそこに含まれた威圧と魔力が近右衛門の声そのものを地に這わせる。向けられた相手を

押し潰そうと殺到する。

関東最強と謳われる近衛近右衛門からだけではない。その横に立つ麻帆良のＺ・Ｚ・タカミチ・Ｔ・高畑も両の拳をスラックスのポケットに収め、闘氣と眼光を研ぎ澄ませる。

生まれつき魔力も気も少なく、それらの無駄遣いを防ぐ為に攻撃に反応する自動展開型を作り常時展開型の障壁を張らないなごむは、指向化された魔力圧だけで相当な精神的苦痛を味わう。常時型を張ろとも戦闘経験も修羅場をくぐった回数も少ない彼では、放たれる殺氣を散らしきれない。

はずであった。

「んー？ 随分と大人げないですね。貴方こそ、ご自分達の現在状況を理解されていますか？ そのような力業でどうにか出来る相手だと、まだ考えているのですか？」

なごむはただ泰然とその場に在り続ける。冷や汗の一つもかかず、鼓動と呼吸の変調も来さず、纏う空気も変わらない。

予想外なことに、富崎なごむはそれら圧力をそよ風の如く受けきつていた。

「自分とエヴァの関係を、忘れていませんか？」

なごむはなにも変わらないはずなのに、変わらないからこそ、近右衛門達は怯んだ。

そしてそれを期に彼らが放つ重圧は薄くなりかけるが、それでも持ち直してそれまで以上の負荷を掛けようと意識を高めていく。

「……知つとるよ。知つとるからこそ、危惧しておるんじや」

「ではこれが如何に無駄であり、現状の最善がなにかも、わかりま

すよね

だがなごむは変わらない。動じない。

実際これらの行動は無駄としかいえないものであった。なごむが言つた通り、彼のバックには彼の悪名高き『闇の福音』『人形使い』『不死の魔法使い』『悪しき音信』『禍音の使徒』『童姿の闇の魔王』エヴァンジエル・A・K・マクダウェルがいる。打算か友好かはわからないが、成長の契約を履行中である彼女がなごむの危機に動かないわけがない。少なくとも近右衛門の味方にはならないだろう。

麻帆良にいるほとんどの魔法使いは知らないが、近右衛門は知っている。エヴァンジエルの魔力は現在魔力魔法球で全盛期に近い域まで再現可能であり、麻帆良全体でかかつてやつと彼女を倒せるかどうかといったところである。確かに同様のものを近右衛門と朱石教授が持っているし、対エヴァンジエル用などの特殊魔法具も用意されている。だがその魔法具作成技術をなごむに教授したエヴァンジエルが対策を練っていないわけがないし、そこに彼女の従者であるチャチャゼロと茶々丸、さらに正体不明の白髪人形までいる。なごむの友人とやらも謎だ。そして彼女達をさし置いても、眼前の富崎なごむには自動防御障壁と魔力抑制結界に捕縛魔法、そして強制転移魔法があるのだ。ここ学園長室では転移が使えないが、抑制や捕縛は可能であると近右衛門は経験から知っている。護衛のためになごむが用意したこれらがある限り、この場における絶対強者は近右衛門ではない。富崎なごむなのだ。

被害を顧みなければ、今の彼らは麻帆良の魔法使い達を殲滅出来る。

なごむにとつてもそれは避けたい事態であるはずだが、彼との契約を守らずに近右衛門が我を通したことで、彼も我を通さざるをえない状態になつたのだ。しかもそうならないよう、近右衛門が先手でなごむの弱みを作ろうとしたことが悪手になつていて。

彼の護衛対象達を人質に取るという選択肢もあつたが、現段階では不確定要素が強い。この話し合いが始まる前に彼が手を打つていなことは、今の近右衛門には思えなかつた。少なくとも今手を出すのはありえない。最大の護衛対象である日時詩緒はこの校舎内におり、彼の独自結界内だ。近右衛門の射程距離でもあつたが、手を出そうとすればすぐに対応されてしまう。そして手を出した瞬間に敵対は決定的なものになるだろう。

一斉に行動を起こせば父親あたりの数人は人質に出来るかもしれないが、その場合人質に出来なかつた数人を連れてなごむは麻帆良から逃げ出す可能性が高い。エヴァンジエルンに関しても事実を伝えれば全て先手を打つた近右衛門の非であるとして、彼の逃亡を麻帆良帰還を条件に黙認もあり得る。状況によつては彼女達が内部で離反行動をとるようになるだろう。

さらになごむを欲しがらないメガロ敵性組織などないことも問題だ。ネギ失態などの資料は彼らからすれば価値あるものとなるし、麻帆良への高い牽制力を掴むことになる。それになごむが自身の経歴や能力を公表しても、彼を求め利用するために保護を訴え申し出てくる者が数多く現れるだろう。

そしてそれすらもなごむは利用するはずだ。

後は士気の削がれた麻帆良対、なごむという大儀と力を得た組織群との戦いの始まりだ。

それが現在の小競り合いが激化する程度で済めばいいが、最悪に最悪が重なると魔法世界にまで飛び火し第一の大戦になるかもしれない。

それだけの事を起こせる器量をなごむは示している。

現段階で、すでに違和感なく関東最強と第一位が殺氣立つテーブルに着いていることが、それを如実に物語っていた。

故に近右衛門から手を出すことはありえない。破滅しかない。

どのみちここまで行動を起こした以上、近右衛門が脱会を認めても認めなくともなごむは関東魔法協会を抜けるだろう。そして近右衛門は彼への指揮権を失う。結果、近右衛門がネギのために起こす行動を、彼は護衛のために妨害することが多くなる。

さらに認めなかつた場合、ネギの失態と近右衛門の一方的賠償契約破棄が表沙汰になる。なごむが脱会したことが公表されるので『闇の福音』問題が発生し、なごむの守護対象の危険度が大幅に上がり、護衛行為にも表立つた妨害が生じるようになるはずだ。全体的に麻帆良での生活に支障を来すことになるだろう。そして魔法使いの誰かが彼の家族達に手を出してなごむは麻帆良を出奔、もしくはエヴァ達と完全に手を組み内部での反勢力化か、先の想像と同じ道となる。

だが認めればそれらは表沙汰にならず、脱会を知られないよう、守護対象の安全のためになごむが資料を公開することもなくなる。彼の護衛行為を表立つて妨害は出来なくなるが、近右衛門が秘密裏に何かするのには問題ない。

今の近右衛門に出来ることは決まつていた。

「………… よからう。富崎君の脱会を認めよう

「では」ひはは今回の件の秘匿を誓こましゅつ

な」「むが」「ちやうわまでしたと空になつたお菓子の大受け皿に手を合わせ、立ち上がる。

近右衛門はそんなんごむの行動を田で追いながら考えていた。

外に出られても、中に居られても困る存在。

無理に追い出せば下手な恨みを買いかねないついえ、相手はこひらかにに対する毒を持ち歩いている。かといってそのまま放置していくは、彼自身が毒となりネギに関連する計画に重大な損害をもたらしかねない。

なりばと手は

「……のへ、富崎君や」

威圧を解きながら、近右衛門は出口に向かつないむを呼び止めた。

「なんですか？」

立ち止まつたな」「むが振り返る。

「君は何のためにこのよつなことをしておる？・

「自分の大切な人を守るためにですよ」

「一方的にかの？」

「少なくとも千鶴とおシオからはそのよつに求められます

「以前から？」

「何仰います。先ほどからだといつのは、今の話じ合いでわかつて
いるでしょ？」「

対峙する一人の笑みが、僅かばかりにだが深くなる。

「では一人は今は同意の下として、そつではなかつたときや、現在同意を得ず勝手に守られてゐる者達の気持ちをどう思つ?」

「あまり良いものではないでしょうね。知らないところで勝手にやられるのは。しかも守らねばならない理由の一一部が自分の方にありますし。巻き込まれたように感じても仕方がないでしょ?」

「うか、うか、と一言一言黙むように、理解を示すように近右衛門」が話す。

「富崎君、提案なのじやが、富崎家の人物と田時詩緒、長谷川千雨には、絶対に手をださんし関わらせないようこちらでも尽力する代わりに、女子中等部2年A組で起きることを黙認して欲しいのじや。信用ならんと思うなら、今から田時詩緒、長谷川千雨、富崎のどか、そして君の四人を他クラスに変える手続きでもしょ?」

「えつとつまり、買収と厄介払いですか。そして2 Aでなにかをやるつもりであると。話の流れでいくとネギ・スプリングフィールドに関連することだ」

「君ならある程度、気付いておるのじや?」「ふむ。悪い話ではないですね」

「どうじや、検討してみてはくれんか。儂はの、孫娘の木乃香に魔法を教えたいのじや。以前渡した資料にも書いておいたが、あの子は生まれつきあの身に膨大な魔力を宿してある。じやがあの子の親が平和に暮らしてもらつたためと、魔法を秘匿して育てた。祖父である儂が関東の魔法の長で、父親が関西の魔法の長だというのに、あ

の子は魔法の危険性ビビリか存在すら知りん。あの子の父はそれを娘の平和を護るためじゃと思うどりゆうじやが、しかしあの子には血筋も才能もある。魔力の扱いに長けとる富崎君なら、このままで危険だとわかるじやろ？ いつかいつかと思つておると、来てしまつたいつかに命を落としかねない。儂はの、あの子に知つたうえで幸せになつてほしいんじや

「

「んー。自分の件や麻帆良学園結界の件、その他諸々を棚上げしてよくそんな事言えるものだと本当に感心しますが、実際に言つてることはわかりますし、実孫が可愛いのは仕方ないですしね。とても理解できますし、行動には同意します。第一に桜咲さん一人での護衛も破綻していましたしね。差し詰めネギ・スプリングフィールドを使う理由は、西の呪術会の長詠春殿の危機感を上げるため、東の魔法会の長である近右衛門殿が直接手を下したわけではないという証拠のため、言い方次第では当て馬にした。といったところですか。そして友人の忘れ形見である幼子を、甘い詠春殿は無体に出来ないと」

「……フォツ、フォツフォツフォツフォツ、富崎君は理解が早くて助かるわい

「近右衛門殿の目的の一つ（・・・・・）である近衛木乃香他数名を魔法使いに差し出す（・・・・・）ことで、自分の庇護対象は守られる。実に、悪い話ではないですね

「……フォ……本当に、君は理解が早いのう。それで、ビビりや？」

「えーっと、そうですね。」の話には幾つか問題点があります

まつ？」と近右衛門は白席の上で構え直す。

「第一に、自分は近右衛門殿との契約を信用できない。まあこれは自業自得ですね」

「じゃが君は利があれば受けるじゃまつ？ 少なくとも、先ほどまでの条件より君らの安全度は高くなるはずじゃ」

「ええ、もちろん。では第一に」

なじむが続けようとして、彼の制服ズボンから「ブーッブーッ」と音が鳴りだした。

彼は近右衛門達が見ている中で携帯電話を取りだし、画面を見て着信相手を確認する。

「幾つかあったのですが、一いつ旦で終つ」のようです。第一は、遅すぎた、です

そう言つて通話ボタンを押した。

第9話・東西

「朝倉あ、本当に今日新任の先生くるの一？」
「来るつて。そういう情報なんだから。それになんだか編入生もいるらしいよ」
「お姉ちゃん」「ないね」
「こないね～。よし、今の内に腰増やしこいつ！」
「これ以上は危ないよ～」
「そう言いながらも手を止めないんだよね」
「あらあら」
「先生つて男の先生かな？」
「さあ？ 編入生はなんだか男らしいよ」
「はあ？！ なによそれどうこうこと？」
「や、例の男子中の校舎工事で、一年後だかに一時編入させるんだつて。その準備のためらしい」
「ほへ～、そんなことになつてたんだ」
「お、男の人が来るんだ？」
「のどか安心して下さい。どんな男が来ても私が守つてみせます」
「男つていえば、今居ないけど、今朝桜咲さんが寮のロビーで男子と親しげに話してたらしいね」
「なにそれスクープ？！」
「ラヴ？！」
「ていうか寮つて女子寮で？」
「うん。ほら、寮監から許可もらつて冬休み中来てた男子がいるつて話しあつたじやん」
「あ～あ。私冬休み中実家帰つてたから、顔見られなかつたんだよね」
「彼は桜咲さん田当てだつたのか」
「せつちゃん春来てたんやねえ。……それにしても、あの子きいひ

「んなあアスナ」

「いいわよあんなガキこなくて！ でも、なにやつてんのかしぃ。
誰も来ないなんて」

「授業始まってる時間やもんな」

「まさかあのガキ、高畠先生になにか迷惑かけてるんじゅ や」

「

いつも以上に騒がしい教室の中、前の席で交わされる会話を耳に
挟みながら、長谷川千雨はこれからのことを考えていた。

自分達の魔法バレを装いつ計画を発案したのは他でもない、千雨だ。

なじむに麻帆良の裏のことを教えてもらつた当初であれば千雨個
人を守つてもらえていればよかつた。下手なことをすると、守るためにまとめられていたのもしぬれなかつたこのクラスメイト達を巻
き込みかねなかつたからだ。

だが詩緒が来て、このクラスを待ち構えているかもしれない運命
を知つて、それが真実だと確信して、千雨は決断した。

千雨が守つてほしいのは、この日常だ。

関わる気もない、後ろの席で傍観しているだけの非日常的な日常。
少し前まで大嫌いだった異様な日常。
今も苛立ちが募るばかりの日常。
だけど田が離せない日常。

この非日常こそが、すでに自身の日常。

千雨は彼女達個々人を嫌いなわけではなかつた。気が狂いそうな
ほどこの光景には悩まされていたが、彼女達全員を嫌いになどなら
なかつた。たしかに気が合ひそうにない人物も居るが、そんなのは

どこにだつてゐるのだ。麻帆良以外にもいるはずなのだ。

千雨は平穏を愛していたが、喧嘩を嫌つてゐるわけではなかつた。

無理解に恐怖していたが、無知を嫌惡していなかつた。

他者に怯えていたが、他人を壊したいとは思わなかつた。

孤独を好いていたが、たつた一人で生きていけるほど強くもなかつた。

自分の醜さを理解していたが、己の無力を嘆く氣もなかつた。

だからなむに頼んだ。頼み直した。巻き込むことになる詩緒にも頭を下げ、二人の知恵を貸してもらい、相談し、自分の目的を何度も再確認して、この結論に至つて、頼んだのだ。

千雨が守つてほしいのは、ここにある日常なのだ。だから自ら一歩を踏み出した。

なごむはただにつこりと笑つて手を取つてくれて、詩緒にはお人好しだと笑われ腕を引かれた。

ネギ・スプリングフィールドなる人物が麻帆良にやつてくることが決まつていた以上、この地に隠された物や陰謀がある以上、どこかで自分達は魔法に関わる事になる。生まれの関係上、才能の都合上、関わらないわけにはいかない者もいる。さらに近右衛門の千雨達に対する動きも予想以上に活発だつたため、自分達のせいで巻き込まれる人も出て来かねない。そんなことは許されないが、どちらにせよこのままいけばまったくの知らぬ存ぜぬは通じなくなる場面

が出て来るはずだ。そしてそんな場面で魔法に関わらないことに固執していると、守るものも護れなくなる可能性が高い。

確かにネギ・スプリングフィールドとこのまま関わる事でハッピーエンドを迎える可能性はある。詩緒からもそういうた世界観もありえ『た』と聞いている。現段階でだつてそれは否定出来ない。これから先もネギを中心としたハッピーエンドの可能性は変わらずにある。

だが千雨は不安だつたのだ。

幾つもの偶然がやつとの思いで作り上げる物語が、たつた一人の人物を中心としてでしか語られない世界が、必然性がどこにもない主人公という存在が、ハッピーエンドの後が、不安だつたのだ。

ネギという存在はすでにサル（詩緒）というハッピーエンド外の存在と接触している。

なごむという特異点はこの世界以外に存在しない。
千雨という個人は私しかいない。

この世界はハッピーエンドを迎えた世界じゃない。

なごむと詩緒の幸せを願う千雨はここにしかいない。

彼らと共に幸せになりたい長谷川千雨はこの私しかいない。

要は千雨は、現在の日常を護つて欲しかつたし、大切な人達を護りたかつたのだ。

千雨は彼女なりに幸せになりたかつただけである。

だからこそ千雨は考えた。自分に出来ることを考え抜いて一計を案じた。

千雨は二人と比べて圧倒的に無力であつたが、一度も魔法を使つ

たことがない『一般人』である自身のメリットをしつかりと自覚していた。いつまでも無能無価値でい続けるつもりはなかつた。

故に魔法バレを演出することにしたのだ。

魔法を知つていて、だが魔法使いではないために「魔法世界的な拘束力を行使されず、なによりも認識阻害や意識誘導が効かない『一般人』であるという価値。正しい意味で非日常と日常の境界に立つことができる」という意味。

なごむや詩緒がいれば確かにそれは靈むような価値と意味しか持たないが、それでもないよりはいい。あつた方がなごむも行動を起こしやすくなる。なによりも、なごむに全て任せっぱなしというのが千雨には少々癪だつたのだ。

その為にあのネギ・スプリングフィールドなる少年を利用した。

(でもまさか、ああいつた方向で酷いとはな……)

ネギの失態を、千雨も確認している。

詩緒からも話は聞いていたし、以前なごむによる超長距離遠見魔法で彼の存在を確認したこともあつた。その時から些細なことで魔法が暴発していたのだから、ここに来るまでに少しでも改善していくだろうかとも思ったのだが、まるでそんな様子はない。むしろ連発しているあたり酷くなっているのではないか。

千雨が見たときは従姉らしき女性が手慣れた様子で障壁を張りレジストしていたため、暴発した魔法が武装解除かどうかはわからなかつたが、一般人にはもちろん障壁など無く、内在魔力圧で押し返したりすることなども出来ない。第一彼ほどの魔力量でやられるとそこそこ上位の魔法使いでもないと完全防御は難しいらしい。

(たしか従姉のベッドに潜り込む癖があつたはずだが……まさか今

もその癖直つていないとかいわないよな……？　あの子供も色んな
もんの被害者なんだろうけど、魔力暴発といい、神楽坂ひん剥いて
も謝らなかつたところといい、さらにエロガキつてのは、本人の問
題だよな？　ああいう場合に魔力制御が最重要になることぐらい、
魔法使いじやない私でもわかるぞ。まさか魔法使い達はひん剥くこ
とを推奨して教えたのか？）

実際に来たネギ・スプリングフィールドが諸々の点を改善、もしくはその努力が見られれば、彼を悪し様にせずに行動する予定であつた。

ネギ・スプリングフィールドが担任になることや、おそらくは近衛木乃香達と同室に入れられていたであろう事実さえあれば、もつと穩便に魔法バレを演出することもできたのだ。そこからでも近右衛門達の千雨や詩緒における責任追及は可能であり、現在なごむが学園長室で行つているネギ・スプリングフィールド個人の失態追及など、徹底して行う必要はなかつた。

第一、この魔法バレ自体が千雨主導の計画の次段階に進むために必要なものだつただけで、千雨達の安全確保という点の本来の策としては、なごむと詩緒が用意していた関西の件だけでもよかつたのだ。

だがここまでやらなければいけない事態になつた。

あくまで以前遠見で見たのはネギの「ぐく一部の生活風景だけであり、詩緒の情報はすでに三年ほど前のものだ。小さな子どもであればほとんど別人といつていいいほど精神が成長するのに十分な期間であつたため、自分自身の感性を重要視する千雨は、直接本人を見てみないことには諸々の点で納得いかなかつた。

しかし確認した結果は散々なものだ。
たかが九歳。されど九歳。記憶を復元していないため話半分だが、

その頃の千雨となごむは周囲との折り合いの付け方をすでに学んでいたという。なごむの話では詩緒の前世も随分大人びていたようだ。だがネギは違った。数ヶ月で日本語を履修出来るほどの知性を持ちながらもそういう精神性を成長させなかつたのは、周囲にいた大人の責任なのか。それとも本人の資質の問題なのか。環境が精神の成長に及ぼす影響力が計り知れないことは、千雨も理解しているつもりだ。だがどう考へてもおかしいのだ。彼も魔法の秘匿に関する知識だけでも持つているはずなのに、そういう素振りが欠片も見られなかつた。麻帆良に来てからの行動しか追えていなかつたが、たつたの一時間ほどの間に彼がしてかした出来事に愕然とせざるを得なかつた。あれで個人用認識阻害を展開していなかつたというのだから、麻帆良に来るまでの道のりでどれほどの人間が彼の異常性に目を留めたのだろうかと、千雨は頭が痛くなつた。

失態どころの話ではない。これは醜態だ。

それに改善していかなければの話になるが、詩緒の話では彼はその精神性にさらに大きな問題点を抱えているはずなのである。

本質的にはそちらの精神的問題点の方が危ない代物であつたが、現段階でも一般人にとつて彼は火薬庫に等しい脅威なのだ。あんな暴発魔法や裏閨連発言をされたら、いくら麻帆良でも秘匿された事実に気付く者は気付く。それで魔法を指摘し、独断で記憶処理でもされようものなら、魔力制御が下手な彼では記憶が全部吹っ飛びかねない。廃人がそこら中に量産されてしまう。

そこまで考えておきながらも、好意的な意味でもしかしたら、とも千雨は思つてゐるのだ。今まで見た醜態は本当に偶然が重なつただけでしかなく、彼自身は悪い子ではないのかも知れない、と。

彼は彼の知らぬところで大人や千雨達によつて翻弄される、哀れな道化であることには変わりはないのだ。幼い子供である彼ばかり

に罰則を『えるなど、千雨には考えられなかつた。

だがそれでも、すぐさまにでも隔離する必要があると判断した。

関西からの連絡を待つてゐる余裕などなかつた。

ネギを拘束するための理由として魔法バレを早くに引き起こし、行動を逐一つづこんでもらつたのはそのためだ。

そうでもしなければネギの身柄を拘束など出来そつになかつたからだ。

千雨の中では、とつぐに近右衛門以下麻帆良魔法使い達は信用できない存在となつてゐる。

たしかにまともな人達もいるのだろう。だが少なくとも、麻帆良での魔法的な刑罰権を持つてゐるらしき近右衛門や高畠が素直にネギを処罰するとは、千雨にはとてもじゃないが思えなかつた。先ほどだつて高畠は、木乃香や明日菜をネギが今いる部屋と一緒に引き留めようとしていたのだ。それを学園長室に先行して入つていたなごむが高畠に念話を送つたことで、渋々彼は諦めたような状況であつた。どこに信用できる部分などあるだろうか。少しでも放置すれば、彼らはそこから率先して問題を起しそうな状況ではないか。

(……なんだかんだで、まだまともな方だと思つてたんだけどな、高畠先生は……。自分の娘同然の神楽坂を英雄の子に差し出すとか、一体何考えてんだよ。学園長もだ。そこまでして何を求めている？地位も栄誉ももう十分持つてるだろうが。

一人を守るためにネギと共に世界に出すつもりなのか？ そんなに上手くいくのか？

それとも、これが一人や世界に必要な事だと、そんなアホなこと又かすのかな）

大体の理由は見当が付いている。

麻帆良を統治する関東魔法協会の背景、メセンブリーナ連合で現政権に対する改革の気運が高まっているらしい。二十年前の大戦からほぼ持ち直し余裕が出て来たことで、一部の有識者達から主要政権組織であるメガロメセンブリア元老院に不満が出るようになつたのだ。それを抑えるために元老院は過去の大戦の英雄のような分かり易い栄光を、木偶人形を欲した。
カリスマ
アイドル

簡単にいえばそういうことだ。

そしてこの地には英雄が羽化するまでの時間を作るのにも、英雄そのものの履歴を作るのにも事欠かない事情がある。

西日本の裏を治める関西呪術協会との確執。

その西と東の間の子であり強大な魔力保有者でもある近衛木乃香。かつての英雄達のリーダーにしてネギの父、ナギ・スプリングフィールドが封じた『闇の福音』。

この地に居を構える英雄の弟子、タカミチ・T・高畑。

定期的に攻めてくる魔法犯罪者や多所属の魔法使い達。

そして魔法使い達の為に認識阻害が育んだ、歪で豊富な人材。

麻帆良の認識阻害は不可思議を不可思議と思わなくさせる効果がある。そしてそれに伴つて危機感を薄れさせ、潜在的に脳にある能力制限や現実性などの安全装置を緩くさせるなどの副次効果もあるのだ。結果、魔法使いやそれに類する者達と共に生活する内に一般人達の中にも制限が外れ、気や魔力に目覚める者や超感覚や思考力を得る者が現れるようになる。薄れてしまつた血筋の中に眠る超常をこの堀場の中に放ることで刺激を与え、目覚めさせる効果も期待できる。そして緩くなつた危機管理能力につけ込み、才能を開花させた者達をメガロの魔法使い側へと引き込むのだ。

メガロメセンブリア元老院が仕組んでいたり、確實に存在を知つ

ている事柄だけでもこれだけある。

これらを利用し尽くせば、英雄の息子を新たな英雄に迎えられ、その側を美しく才能溢れる少女達で飾ることは容易い。

歩く広告塔の出来上がりだ。

そしてそれ以外にも図書館島に隠れ住む英雄の一人であるアルビレオ・イマヤ、神楽坂明日菜の封印された過去、世界樹の下に眠る存在など、麻帆良はネタに溢れている。

おそらくは近右衛門や高畠の目的はネギの英雄化だけではなく、この隠されている事実達にも関係があるのだろう。

高畠が保護者となつてゐる神楽坂明日菜の正体などは、元老院にとって世界に秘匿したいうえに、喉から手が出るほど欲しいもののはずだ。それを先んじて英雄の従者として世界に知らしめることで、身柄を間接的に保護する意味合いは理解出来る。

関西とだつていつまでも喧嘩はしていられない。上手く使えば木乃香一人で多くの人間が救われる可能性は否定出来ない。

だがどちらも諸刃の刃だ。収める鞘に、握り手を保護する鐔に、剣そのものの扱い手に、ネギや近右衛門達は相応しいかと問われれば、千雨は首を振るしかない。

扱いを間違えた途端、剣は戦争の道具になる。理由になる。

そして学園長や高畠を見て、そのようなまだ千雨に納得出来る内容の思惑で彼女達をネギと接触させたかと考えれば、首を捻らざるえない。組織の長の判断としてみれば間違つたものだとは思わなかつたが、やり方がお粗末に過ぎる。

可能性はある。だがどうしてもその可能性を肯定出来ない。

千雨は彼らが裏切る姿しか見たことがない。
信用など出来ようはずがなかつた。

(ガキで他人の私が首をつつむようなことじゃないと言わればそれまでだけど、気に食わない。傲慢だ独善だってわかってるけど、苛つく。守りたいとか、お為^いかしもほどほどにしきつて自分でも思うけど)

ちりちりと、思考を焦がすよつた怒りが火を灯す。

それを直覺した千雨はぐつと一度まぶたを強く閉じてから、再度視界を開けさせた。

「なあなあアスナ、この間じいちゃんがなあ
「またやつたの？ お見合い。学園長も
「あははは、バカやなあアスナは
「そんなはつきり言わなくたっていいじゃない！
「アスナは高畠せんせえがあるもんな
「！」、「このか！」

そして前の席で騒いでいる近衛木乃香と神楽坂明日菜を見つめると、溜め息を吐いた。

彼女達やネギを取り巻く全ての問題。彼らに非があるかと云われれば、千雨はすぐさま否と唱えるだろう。

彼らをこのような状況に置いたのは周囲の大入達なのだ。ネギあたりは思考を放棄している節があることに對して多少の非はあるのかもしれないが、かといつてその責を今問われるべきは彼らであつてはならないと千雨は考える。

そして、その責を問われるべき大人達といつのは

(魔法使い、か。……はあ、結局これは私個人の火だつてこと

か。私が、魔法使いが憎いだけで、別にここにいることなんやん?)

ふと後ろから肩を叩かれていることに気付き、振り返ると、席を一つずらして千雨の真後ろに来ていた詩緒が手を添えて口を寄せてきていた。

話があるのでうと耳を傾ける。

だが詩緒は寄せてきていた手で千雨のメガネを奪い取ると、頭を押さえてぐりぐりと眉間に揉んできた。

「顔に出すぎだボケ。バカの考え休むに似たりだぜ」

「わつ、な、なにす」

「難しく考えてもいいけどな、そういうのあんまり意味ねえから。小じわが増えるだけだ」

振り払い睨みつけると、おどけた詩緒がいう。

「……経験者は語る、か?」

「ああ。オレも絶賛継続中だけどな、新たな判断材料を得て考えが変わるならありえるが、唸つてたってなにも変わりやしねえのはわかる。思考放棄は最悪だが、やることは変わりねえ。理由は一つじやなきやダメってわけじゃねえんだ。悩むのと考へんのとは別もんだ」

守りたいのも、相手が憎いのも、千雨の心であることは変わりないのだ。

そしてその答えが行き着く先は一つしかない。

「……結局、てめえがどうしたいか、か。…………あー、なんか心

の中読まれたみたいで癪だ。

「つづか、ああ、そつか。うあー

詩緒にはステータスの能力があるのだ。魔法など使わなくとも多少なら心象を読むぐらい、わけはない。

「ま、そうじにひけた。ちつたあ頭冷えたか？　じゃあ　そろそ
る出番だぜ？」

「言つが早いか、千雨の携帯が振動でもつて着信を告げる。

「ああ」

相手先を確認しながら一人で席を立ち、「トライレ」とだけ告げて未だ教師の来ない教室からわざと逃げ出すると、千雨は通話ボタンを押したのだった。

近右衛門達の田の前で通話先の相手と数言挨拶程度のやり取りを済ませると、なごむは学園長室の扉を開け、廊下周辺を目視確認及び探査魔法を発動。誰の田もないことを確認すると数種類の認識阻害結界を多重展開させ、懐から出した呪符を一枚、出てすぐの廊下床面に貼り付けた。
なごむが呪符から離れる。

再度通話相手と数言交わし合い、呪符になにかしらの魔法をかけると、その場が光に包まれ空間が歪んだ。

光の中心付近の遠近がずれ、たわみ、歪みが人の形をとる。徐々に光が消えていき、わずかに残っていたものが弾けて螢火が舞うようにならざるを立つてゐた。

来て早々に彼女は脇に立つていたなごむを納得いかないといつた顔で一睨みするも、いつもと変わらない薄い笑みで見つめ返されて逆にたじろぎ、逃げるようにならざるに近右衛門に顔を向けてると姿勢を正した。

「関西呪術協会特使、桜咲刹那です。失礼します」

刹那が一礼をして、開いたままであつた扉から学園長室に入る。

「……特使、とな」

展開が読めてきて顔色が蒼白から土氣色になつていく近右衛門が、わかつていながらも確認せねばならないこととして尋ねる。

「関西呪術協会長近衛詠春様から、関東魔法協会理事近衛近右衛門殿へ、現在近衛近右衛門殿に身柄を預けている近衛木乃香お嬢様の身辺警護について、早急に意見交換を願いたいとのことです。私はその窓口役として派遣されました」

そういう、刹那はすでにハンズフリー モードに切り替えておいてあつた自身の携帯電話を取り出すと、目的の相手に電話をかける。とそこでなごむが待つたをかけた。

「「めんちょつと待つて。こっち繋がつたままだつた。あ 詠春殿、こちちは切れますね。 あ、いえいえ、自分は足を貸していただけですからお気になさらず。 はい。 はい。 それでは、失礼します。 はい 桜咲さんどうぞ」

いわれてまたしてもなじむを睨んでいた、といつよりも瀟然とした表情で見詰めていた刹那が咳払いをし、番号をリダイヤルする。その間にもなじむはまたどこかに電話をかけ始めている。

刹那の相手はすぐに出た。

『もしもし。聞こえてますか』

「長、聞こえてないります。こちらの声の聞き具合も問題なやうでしようか？」

『あ、刹那君。聞こえていますよ。ただし声が割れていますね』

『ではこれでどうでしょつか』

『自分の声も届きますか？』

持ち方を変えたりしながら刹那が調節している横から、なじむが携帯片手に顔を出す。

『ああ、富崎君　　いえ、富崎さん。聞こえています』

「ではそろそろ名乗りをお願いいたします。近右衛門殿が置いてけぼりになつていまして」

『これはこれは、失礼しました。

関西呪術協会長、近衛詠春です。電話口からの不躾なものとなりますが、少々急を要する案件発生を確認いたしましたので、その事態に対する関東魔法協会及び協会理事近衛近右衛門殿からの説明と、それに伴う今後の両会の関係変化について関東魔法協会の意見も（・）交えたく思い、連絡させていただきました』

それまで硬直していた近右衛門の口から、小さくフオッと悲鳴が漏れた。

「麻帆良一般人を主体とした対魔法組織用第三者機関、『麻帆良自由自治会』の設立をここに発表します」

関西からの特使である刹那と共になぜか話が終わつたはずのなごむも席に着き、まだどこかしらに電話をかけながら彼がおこなった宣言に、近右衛門は今日何度目かになるかわからない悲鳴を上げた。

「だ、第三者機関じゃと？ それに一般人主体なら、魔法使いである富崎君は」「

とそこで学園長室のドアがノックされた。
ぎくりとなつて近右衛門の言葉が止まる。

それから気付く。この部屋には現在、近右衛門がかけた強力な人払いや防諜の結界が張つてある。それに先ほどなごむも部屋の前に数種類の阻害結界を張つていた。これだけやれば、潜入諜報に特化した術者でも近付くことさえ困難なものになるはずだ。

再度ノックが響き、今度は、失礼します、と声も届いた。
なごむは動かない近右衛門とタカミチを確認すると、手に付いたクツキーのカスをほろいながら席を立ち、扉を開ける。
勝手に開いた扉とその向こうにいたなごむとを見てから、扉の先に立っていた彼女達が名乗りを上げた。

「『麻帆良自由自治会』会長、長谷川千兩です。失礼します」
「『麻帆良自由自治会』副会長、日時詩緒だ。失礼するぜ」

礼をしてから入室してくる一人を、近右衛門とタカミチ、そして刹那がぽかんとした顔で出迎える。

一般人を主体としたの意味を、近右衛門が気付いた。

「儂は会の設立も、入室も、許可しておらんぞ。それに魔法に関わる気はなかつたのではないのかね」

「非公式でも別に構いませんよ。というより非公式にしか出来ないでしょうね。先ほどの契約がありますから。そういう組織がある、というだけです。近右衛門殿が認める必要はありません。それと表立つて関わる気はない、ですよ。麻帆良にありながら麻帆良魔法使いに関わられることがない一人は、この土地の第三者機関としてこれ以上ないと思いませんか。　ああ、ちなみに自分は平会員ですらありません。扱い的には外部に対する『強制力』と『窓口』、つまり変わらず一人を守護する壁役の道具となっていますのであしからず」

追随するよつに千兩も口を開く。

「私達はここで話を聞くだけです。なにか麻帆良一般人にとつて害ある事態が発生ないし、それについての意見を求められない限り、口出しはしません」

「なごむが契約を持ち出したということは、詠春達が一人を知つてしまつた現在も先ほど交わした秘匿契約は生かしておくつもりということだ。そして表立つて、ということはここは裏ということ。つまりなごむとしては、幾つか前提が揃えばこの東西長会談は、表沙汰にならない事態に出来るということだろう。だが言外に近右衛門の意見をなごむが聞き入れる気はないということとも伝えてきていた

し、なによりもこの発表タイミングなどは事前に計画されていたものだ。

完全に近右衛門ははじめられていたのだと、今更ながらに気が付いた。

もしこの点を突いても、先ほどからなじむは電話をかけていた。会の発表時もだ。あれで口裏を合わせたようなことを言われてしまえばどうしようもない。

だがここには秘匿対象となる詠春の耳と刹那の存在がある。近右衛門からすれば立派な契約違反だ。

「じゃがこれは契約」

『こちらの方々に出向を願つたのは私の方からです。刹那君からいだいた資料より彼女達の魔法バレはすでにわかつていましたので、その処遇がどうなったのか宮崎さんに先ほど尋ねてみたところ、なんらかの秘匿契約を行つたことと、現段階で記憶操作をする予定はないとの伺いました。それで今回の件の被害者意見になるかと思い、宮崎さんにこの場へのお呼び立てを願いました』

「……そうこうじやつたか」

そういう設定かと、詠春のスピーカー越しの発言内容に近右衛門は息を詰める。

たしかに先ほどなじむは電話先に一人の処遇結果を伝えていた。てっきりそのときは詩緒達とやり取りをしていたものと思っていたのだが、相手が違つたのだ。さつきの時点で気付いてもいいような内容だつたのに気付かなかつたのは、近右衛門の頭に血が上つていたからだ。

『そして田中詩緒さん、長谷川千鶴さん。これがお一方へお越しい

ただいた最大の理由なのですが……まずは自分が出向かず、その上電話口からの無礼をお許し下さい。

私達の問題に巻き込んでしまい、大変申し訳ございませんでした』

『気にはなつて。とりあえず関西呪術協会だつけか？からオレと千雨に魔法的政治的干渉が来ないよう完全秘匿してくれればいいぜ。もちろん魔法使い側に問題を見つけたら、オレ達はなごむを通して意見するけどな。そんでこの自治会のことも秘密にしておいてくれ。それでいい』

『関西呪術協会は、その通りに誓います。干渉不可のことでしたのが、魔法等とは関係ない謝礼についてはよろしいでしょうか？』

『それ以上はなごむを通してくれ』

『わかりました』

そのやり取りで、近右衛門はぐううと呻き、仕切り直す。

『……して婧殿。資料とな』

『この場では婧殿はやめて下さい。近右衛門殿』

『すまなかつた。詠春殿？』

『はい。では資料についてです。ご存知かとは思いますが、恥ずかしながら木乃香が関東に居ることを良しとしない者が、関西には大勢います。此度その者達の一部が暴走し、木乃香の誘拐を行おうとしていたようなのです。そのために傭兵を雇い、最終登用試験と実地調査もかねて木乃香の麻帆良での生活風景を記録させていたのですが、そこを刹那君が取り押さえ、証拠品の押収と計画の発覚となりました。資料とはこの押収した記録媒体などの証拠品のことです。刹那君から連絡を受けた私は、彼女から宮崎さんの超長距離転移の話を聞き、転移を依頼して証拠品を回収。回収した証拠品と傭兵の証言から依頼主を割り出し、先ほど今回の件の関係者は拘

束しました。そのためこちらの問題はなくなつたのですが、資料の内容が新たな問題となりました』

これまでの話を統合すれば嫌でもわかる。その資料の内容とは、

「……ネギ君かね？」

つまり今朝の、今も続くこの騒ぎの元凶であるということだ。

『はい。資料は木乃香が早朝寮を出るところから始まり、ネギ・スプリングフィールドとの接触及び、日時詩緒さん達の魔法バレ発覚までとなっていました。映像、音声、魔法媒体と、多角的な資料となっていましたので信憑性は非常に高いものと判断しています。

その内容に対し、私が個人としても関西呪術協会長としても頼み約束したはずの木乃香への魔法秘匿と魔法からの守護を、約束した相手である近衛近右衛門殿が破ろうとしている。私を含め、たまたま本山に今朝からいた数人の幹部達は、そのような印象を受けました』

やはり早い。対応が早すぎる。犯人確保と朝から本山にいる幹部達。なによりも刹那がなごむの手によって、おそらくは超長距離転移魔法によつて埼玉の麻帆良から、京都にある関西呪術協会の本山まで跳んで戻つて來たという事実。どうみても、やはりなごむと詠春には以前から繋がりがあつたことが窺える。それに詠春にこれほどまでの決断力はない。入れ知恵をされている。転移を頼み、知恵を借りてているということは、詠春の場合ある程度以上の信用もしていることになる。

ぐりぐりと煮え立つ思考をなんとか沈めながら、近右衛門は考える。

先ほどの段階でなごむの脱会を認めておいて正解だった。もしぬに考える時間を与えるか出奔を許してしまっていたなら、真っ先に関西と手を組み、関東が準備をする前に攻め入られていたかもしれない。しかもなごむが逃げ出す前に攻めてきていた可能性が高い。充分な証拠資料があるため、攻める理由には木乃香という関西の大義名分があればいいのだから、なごむ達による内乱中に後ろを突くという布陣だったのだと見える。

そして認めたからといってそれが完全に正解だったかといえば、それも違う。現状は見ての通りだ。これはあくまで実被害の少なさという点での正解だ。

ネギを迎えいれる準備のために関西の動向は近右衛門も注意を払っていた。だから一部の幹部が本山に集まっていたのは知っている。それでも今回の件については悟ることが出来なかつた。集まつただけではなにも出来はしないのだし、ここまで距離がありすぎて、ネギのことを察知していようと何かしらの策を実行するのも難しいと判断したためだ。西の本拠地である本山の実働部隊や、反関東派の派閥から部隊が動いた気配はなかつたはずだが、先ほどのを見る限りなごむがいれば超長距離転移が容易に可能となるのは明白。本山にいても不意打ちが出来てしまつため、動く必要など最初からなかつたのだ。そして転移の起点を呪符にしているということは、麻帆良外周の森林部に呪符を事前準備しておけば任意に転移が可能であることを示している。その準備が終わっていないわけがない。

魔法バレ契約と、関西による圧力。先の魔法バレ契約は言わずもがな、関西の件だけでもネギの話を起点になごむに有利な話の展開が可能だ。

田時詩緒と長谷川千雨の魔法バレに関西も関与している可能性について言及しようにも、資料上落ち度は完全に関東や近右衛門にあり、しかも先ほど詩緒と詠春の間で行われたやりとりは近右衛門がなじむと交わした契約と同内容だ。すでに責を負ったようなものといわれればそれまで。下手に藪を突けば関東まで更に厳しい契約変更もあるえる。関西の件と合わることで、それも容易になってしまっているからだ。

多段式の策は基本中の基本であるが、ここまで用意周到なのは実際の所そう出来るものではない。用意しても複雑に過ぎると不発になりやすいためだ。だからこういつた場合、複数の代案を用意する必要が出て来る。この他にもすでに不要となり破棄された策がいくつもあったのだろう。

もうはめられたどこの話ではない。完全に手の平の上だ。

近右衛門は天井を仰ぎ見て、朝酒が飲みたいと思つた。あと大魔法クラスのを数発ぶつ放したい、とも。

この後の展開も想像が付く。関西はその気になれば関東を落とせたというのに、そとはしなかつた。

『今回の件について、近右衛門殿からはなにかしらの釈明はありますか？』

「……………婿殿は…………」

天井を眺めながら近右衛門が口を開く。

「いつまでもあの子に魔法を秘匿できると思うておるか？』

『……思ひたかつたでした』

「そうか、そうか、と頷き、近右衛門はからからと笑つた。

「して、関西呪術協会からの要求は決まつておるのかの？」

木乃香の一件は口実に過ぎない。今回の本題は、なごむ達と関西が本気になれば麻帆良を即時落とすことも可能であるといつ示威行為だ。

詠春は先ほど、近右衛門がなごむとしたのと同じ田時詩緒や長谷川千雨、富崎なごむに関する秘匿を誓つた。あちらにもネギ失態などの証拠映像があるわけだが、もしそれを破り公開すれば、詩緒達の魔法バレからネギの失態や近右衛門の仕打ちが知られることになり、『闇の福音』問題やらなにやらが噴出。なごむと関東の関係は悪化することとなるが、同時に誓いを破つたということで関西となごむ達との関係はそれ以上に悪くなる。彼らの助力無しに現在の関西が単体で関東を落とすことは難しいため、秘密裏にとはいえ手を貸してもらつたうえに誓いをしたのだから、下手なことは出来なくなつたとみていい。だが関東となごむ達自治会が反目し合えば両者の後ろを突けるという利点は残つている。関西にとって、諸刃の剣な切り札の出来上がりというわけだ。

そしての切り札に描かれたジョーカーであるなごむの言動や関西の現在の動きを見る限り、この会談で発生した内容は表に悪い意味で伝わることはないはずだ。原因がネギを発端としているため、そのまま伝わつてしまふとなごむ達の秘匿事項も明るみに出るからだから彼らの秘匿に誓いをたてた詠春が出す要求も、完全に関東魔法協会や近右衛門個人に対する要求となり、その内容も両者間であれば不自然ではないものとなるはず。そのうえで今回の件を知る関

西の重鎮達を鎮めるだけの利を得なければならぬ。

となると要求の内容も自ずとわかつてくる。

木乃香の関西連れ戻し及びそれに関連した内容か、もしくは

『近衛木乃香に付ける護衛の増員。及び彼女に裏のことを教えるための人材を、麻帆良に派遣したいと思います。若干名木乃香と同年代の子を送りますので、木乃香も含め、その子達は東西の交流を目的とした交換生徒とし、教育者の一部はその保護者だと表向きはして下さい。

また、その者達は西洋魔法使いに対し悪感情を持っている者も含みます。彼らに関東魔法協会理事として、直接謝罪も願いたい』

それはつまり、木乃香を麻帆良に預けたまま、護衛団派遣に託けた戦力投入。上部での融和外交から浸透外交への変換。近右衛門の監視。直接謝罪を得たことと反関東派を送りつけることによる、関西の安定化。が行われるということ。

これは、なごむ達がいなくても関東を手に入れるための準備に他ならない。

また考え得る策として、木乃香を関西依りに教育し、近右衛門退陣後に麻帆良を彼女が治めるための布石ともみえる。

さらに詠春は交流のための交換生徒と言つた。

近右衛門は先に待つ言葉を想像し、どうしたものかと抱えきれない頭に手を添える。

『もちろん交換生徒として、西洋魔法使いの子供をこちらも迎えいれる用意をします。木乃香を預けたままにするため、それ相応の子を交換としましよう。

そうですね、ネギ・スプリングフィールド君と交換、という

『アーニング・カット』

第9話・東西（後書き）

薬味野菜、入荷と同時に再出荷？

第10話・飴玉

結論からいえば、ネギ・スプリングフィールドはこのまま麻帆良で教師をすることとなつた。

これは秘密会談の内容上、予定調和であつたといえるだろつ。

元々近右衛門も、詠春も、そしてなごむ達自由自治会も、ネギを現在の関西へ住ませるわけにも、麻帆良入りしてすぐに修行失敗でウエーブズに帰すわけにもいかなかつた。

他の件とは違い、これは関東と関西だけの問題には出来ないからだ。

木乃香の護衛派遣は関東と関西の問題なのでまだどうにかなる。木乃香が日本呪術を習うのも護衛に来た関西の術者が勝手にやることであり、近右衛門が関知していなかつたこととすればよい。だがそこにネギの関西身柄預かりが絡むと、本国から調査が入ることになるのは確実だ。そして修行を失敗したとして帰したとしてもネギの風評問題となるため、本国はそれを防ぐ為に代わりに修行場所に問題があつたとし、関東魔法協会は麻帆良の自治権を本国に没収されかねない。どちらにせよ、少なくとも本国には今回の一件を知られ、近右衛門の首は挿げ替えられことになるだろう。となれば現在行つている関西との秘密契約も、麻帆良自由自治会の秘匿も不可能となる。

故にネギを交換対象にするのはありえなかつた。彼はこのまま麻帆良にいさせるしかなかつたのだ。

だが木乃香を交換生徒の一人として麻帆良に残すには、それ相応

の交換対象が必要になる。

近右衛門としてはもうここまで来れば帰してしまいたいという思いもなはなかつたが、関西側が残すという以上、現在の状況ではそれを拒絶できない。

今、関西は関東を潰せるのだ。つまりこの場において関西は関東の上位者であり、今回の一件の勝利者であつた。搾取は勝者の当然の権利であり、搾取の内容や条件を選ぶのも勝者の権利であつた。そして関西が選んだのは関東の秘密的、間接的支配だ。そのため木乃香を関東に配置しておるのは、敗者である近衛近右衛門にとっても悪い話ではなかつた。

ネギが来たこのタイミングで木乃香を帰してしまつた場合、近右衛門の進退は窮まることになるからだ。それはつまり近右衛門が生家である関西を優先した、もしくは完全に関西との関係を断たれた、またはその両方ということであり、どちらにせよ本国からすれば彼の価値を一気に減少させるという意味しかなかつた。詰まるところ、やはり近右衛門は理事を首になる。そうなつてしまつては何もかもが泡と消えることになるだらう。

それに色々と損を被るのは関西も自由自治会も同じ事。

詠春がネギの交換を提案したのは、一方的な護衛団派遣や交流に託けた人質交換だけではなく、まだまだ関東から絞り取りますよというパフォーマンスであつた。

いくらなんども達がいないと成立しない内容とはいえ、取れるところは全て取らないと、関東を落とせた事實を知る関西の者達が黙つていないのである。

結局そのとき、詠春が近右衛門に呑ませた条件は交換生徒の数は当然同数として、さらに木乃香に釣り合わせるため、以下のようになつた。

関東魔法協会が所持している日本固有呪術資料や財産の譲渡及び、麻帆良を襲つてくる魔法使いや術師から得た過去から現在までの情報全て。そして木乃香護衛団が麻帆良の夜間警備にも加わるため、協力体制を築くために情報の提供は必須となるとして、今後の情報提供も当然であるとした。

これは、国内の麻帆良敵性存在を関西が懐柔することだ。

関東所持の日本固有呪術資料や財産とはつまり、かつて麻帆良や近隣にあつた呪術結社から土地や命と共に奪つたものに他ならない。そして関東魔法協会がその名を名乗つているとおり、関東方面に根付いていた呪術結社は関東魔法協会によつて粗方殲滅、もしくは強制合併か配下にされている。そういう怨恨を持つ者達も、過去関東に攻め入つて一派なのだ。ほとんどはとつゝの昔にその命脈を絶つて滅ぶか完全に取り込まれていたが、関西に逃げ落ちることで命と怒りを永らえた一族や、現在も細々とその呪を継承している者達は存在し、それら資料と財産の返還が為されれば彼らの慰撫になる。結果、国内における関西呪術協会を支持する声は大きくなるだろう。単純に、二十年前の大戦を発端とする反関東派関西陣の腹いせにもなる。

そのままやればその反関東派が勢いづいてしまうが、これら計画を主導したのがその大戦で関東の親元であるMMの下、英雄として戦つた詠春であることから素直に喜べず、勢いもそこまでは伸びない。

そして詠春は今回の一件で木乃香を利用し、その身柄は関東への試金石であり計略の起点であつたと幹部達に説明した。それまでうだつが上がらない姿から一変、首領としての器量を見せたのだ。

さらに関西呪術協会内部にあつた反関東派の一部が行つた今回の木乃香誘拐計画は未遂であり、その計画のお陰でこれ以上ないほど資料が集まつたとして、彼らに恩赦と罰 次の任務を言い渡す。

近衛木乃香の護衛兼教育係として敵地に潜り込む任を。

それがその日の関西呪術協会内で起きた出来事であり、その間麻帆良の方はどうと、表面上は酷く和やかに、そして怖ろしく賑やかに日常が進行していた。

すでに朝日と言つには少々昇りすぎている陽の光が差し込む学園長室で、近右衛門は口を開いた。

「…………修行のために日本で学校の教師を…………それは大変な課題をもろうたのぉ」

「…………あ…………は、はい。よろしく、お願ひします」

近右衛門の存在やその言葉に今さつき気が付いたかのように、ネギ・スプリングフィールドははつとして視線を泳がせながら受け答える。

そんな彼の様子など気にした風もなく、近衛近右衛門は話を進めていく。

「ほつほつほつほつ、まずは教育実習じや。そこの指導教員の源し

ずな君がフォローをしてくれるから。

じゃがの、ネギ君。この修行はおそらく大変じゃぞ。駄目だった
ら故郷に帰らなければならん。一度とチャンスはなくなるが、その覚
悟はあるのじゃな？

「は、はい！ やりますっ、やらせて下さー！」

話の流れに意識が追いついてきたのか、ネギの返答は先ほどの
のよりもしっかりとしたものになっていた。

「うむ。良い返事じゃ。それどじやな、諸事情によりそちらの宮崎
なごむ君もこの女子中等部で、今日から編入生として君が受け持つ
クラスに入ることとなつてゐる。ここでは数少ない歳近い男子同士、
仲良くしてやつとくれ」

ネギが振り返り、近右衛門が視線を向けた対象を見つける。そこ
にはネギよりも五つほど年上らしき少年が一人、少し離れた場所に
立つていた。

やあ、となごむが手を上げ、ネギも同じように返したといひで自
身の体に違和感を覚える。

いつもと比べていやに体が重いのだ。

その理由に気付いたネギが異変を口にしようとしたところで、近
右衛門が念話で原因を教えた。

『魔力封印じやよ』

突然の事に驚き、ネギは振り返つて近右衛門とタカミチの二人に
視線をやる。

と、二人は揃つて頷き、続けて近右衛門が理由を語つた。

『ネギ君は少々魔力制御が疎かになつてゐるようじゃからの。ちょうど修行の内容も一般人の教師をやることじや。だから教師の仕事中不必要な魔力は、一時封印することとなつたわけじや』

『……え、あ、でも……』

『仕事が終われば魔力は戻るようになつとる。ふらいベーとな時間は儂が魔力制御を教えるから。制御が出来るようになれば、封印もなくなる予定じや。なに、これでも儂はネギ君のおじいちゃんとも競い合つたライバル。大船に乗つたつもりでいなさい』

ネギの祖父は彼自身よく知る立派な魔法使いの一人だ。その実力も、彼が在籍していたメルディニア魔法学校でトップのもの。そんな祖父のライバルであつたとなれば近右衛門の実力も推して知るべしとなる。

そのような人物から直接指導がもらえる。

故に強くなることを望むネギはそれを聞いて内心小躍りしそうなほど喜び、勢いよく「はい！ よろしくお願ひします！」と声に出して返事をしていた。

「ほつほつほつ、それではそろそろ一時間目の授業が終わる頃、じや。二年A組は高畠君が担任でしづな君が副担任じや。ネギ君は担任補佐ということになり、出張が多い高畠君に変わつて英語の授業を担当することとなるが、当分の間は高畠君かしづな君が補佐としてつくことになるから。では、A組は一時間目を実習にしてあるから。一人とも、今の内に自己紹介とかしてきなさい」

「え、あ！ もうそんな時間だったんですか？！」

「そうじやよ。じゃからほれほれ、そのロープも脱いで早く向かつた方がよいぞ」

「教室まで案内しますね、ネギ先生。富崎君」

「は、はいっ」

「お願いします。では学園長先生、失礼しました」「し、失礼しました！」

しづなに連れられて二人が学園長室を出て行き、話し声が遠くなるのを聞きながら近右衛門は息を吐いた。吐きながらもネギに遠見の魔法を付けておくのも忘れない。下手をすればなごむ結界の魔力抑制が発動してしまいそうなものだが、授業風景を確認するのだけであれば結界に引っ掛からないことは、すでに確認済みであった。

「……これからどうしますか」

「当面は儂が修行をつけよう。富崎君も制御が出来るようになれば封印を解くと約束したのじゃし……大丈夫じゃひつ『いくつか抜け道も考へてある』」

会話と同時念話を送り、近右衛門はこめかみを押された。策はあっても、頭痛の種は変わらずにそこにあることになつたからだ。

関西との談合を終えた後、千雨達と刹那を教室に向かわせてから近右衛門はネギを呼びその記憶を魔法で確認した。認めたくはなかつたが、そこで見たものはなごむの発言内容と寸分違わぬものでしかなかつた。

仕方なしに近右衛門はネギの記憶を封印した。今回の件を秘匿するためと、気休め程度だが証拠資料として流用されないようにするためだ。

関西の要求を聞き終えた後、一応ネギの魔力封印を無かつたことにじょうとも考えたのだが、さすがに出来なかつた。今回の件を持ち出されては反対のしようがなかつたのだ。

理由も真つ当なものを用意されてしまつている。

先ほど近右衛門がネギに語ったものと同じ、日本で教師をすることがネギの修行内容であったため、魔力は必要なものというわけではない。という理屈だ。これと魔力制御が完璧になつたら封印は完全解除するにされたことで、これ自体はネギの魔法使いとしての教育の一環となるため、MMへ報告しても調査が来ることはないだろうと言わってしまった。

なごむ編入の件をなかつたことにしようともしたが、これも叶うことにはなかつた。

これからあのクラスは関西と関東の思惑が渦巻く堀縫となるのは決定している。関西からの要求により、新たな木乃香の護衛が一人ないし二人はあのクラスに入ることに決まつたからだ。そして詠春はなごむに頼み込み、その護衛枠の一つに彼をねじ込んだ。表向きは関東と関西の橋渡し役の一人として。実際は完全フリーで組織の思惑に左右されない、木乃香本人ではなくその一般人友人の守護役として。

富崎なごむは、自身を麻帆良自由自治会の正会員ではなく道具だと宣言している。それはつまり、自治会の行動決定権は会長である長谷川千雨や副会長である日時詩緒にしか存在せず、なごむの行動が会の方針に反さない限りは自由であるという事に他ならない。

自由自治会の基本方針は一般人主体対魔法第三者機関と宣言したとおり、一般的な視点からの麻帆良魔法組織群の監視だ。そこに千雨や詩緒が問題があると判断すればなんらかの形で介入していくことになる。

それが麻帆良にも関西にも公式に認められたものではないと言つても、一般人から見たその存在の正当性は当然のものであり、実行力や影響力に至つては完全に無視できないものとなつていてる。

そしてなごむが詠春から頼まれたのは木乃香本人ではなく、彼女

の一般人友人を守ることだ。

性格上第三者機関はその監視対象たる組織に組みすることは原則禁止とされているが、逆をいえば麻帆良自由自治会の場合、監視対象である魔法組織とは関係ない者が守られている（・・・・・）分にはなんの問題ない。しかもそれが無報酬で監視対象組織の損益を無視した内容となれば、誰にも文句などない。

上記はこじつけのような理屈であったが、近右衛門は談合の切欠となつた問題の立場上、詠春の要求を完全にはね除けることなど出来ない。そしてここに至るまでの信用問題上、一般人の安全保障が関西視点で行われたことに対し詩緒や千雨にも異論はなかつた。それに元から近右衛門はあのクラスになごむを入れようとしていたわけであり、視点を変えるとこの無報酬の護衛は近右衛門からも頼んだものと見ることも出来る。何かあつた際、近右衛門の立場が一方的に悪くなることはない。

こうなつてしまふと、まさかネギのために邪魔だからクラスに入れないなどと今更近右衛門が言えるわけもなく、これを覆す理由などなくなり、頷くしかなかつたわけである。

そして本来であればネギを一年A組の担任教師にする予定であつたのだが、その点も千雨が意見したことによつてお流れとされた。九歳の教育実習生が着任早々担任など違和感がありすぎる。せめて担任補佐などの役職から始めさせてほしい、と。

さらに最後に釘も刺されてしまった。このまま近右衛門は黙りで通し、後ほど勝手に決めてしまえばよいと思つていたネギの住居について、詩緒に問われたのだ。

まだ決めていないと返答したところ、彼の年齢や秘匿意識を考慮して大人の魔法関係者の部屋に入れろ、と言わてしまつた。もし一般人やそれに準拠する人物の部屋などにネギを入れようものなら

自由自治会は強行手段に出る、と宣言までされてしました。

監視という一点を突き、接点作りのためになごむと同室にするのを頼むといつ選択肢もなくなつたが、現状のなごむに頼んだ場合ネギにどのような影響がもたらされるのかが予測できず、そのような冒険は出来かねる。無論詩緒と千雨の魔法バレの件をネギに教えて得することも存在せず、むしろあの様子では焦つてまた失敗を重ね、さらに大事にしかねない。となると一人に近いなごむが魔法関係者であることを教えるのもまた危険。情に訴えかけようにもその前に常時完全魔力封印をされかねない。黙っていた方がいいだろう。

結局、魔力制御訓練のことも考え、近右衛門の住居で面倒を見るぐらいしか出来そうになかった。

はああーと、深く深く近右衛門は息を零し、マホガニー製の机に突っ伏したのだった。

「はい、ネギ先生。これクラス名簿ね」
「あ、はい、どうも」

そういうてしづながら渡されたクラス名簿に目を通したネギはある一点に来たところで目を留めた。

名簿欄の最後一つ手前、今日から編入となる宮崎なごむの前に名前を載せた、二ヶ月ほど前に途中転入してきた少女の写真に、ネギ

は首を傾げる。

(……あれ? 『の』の人、どこかで……)

「『の』があなた達のクラスよ」

考え事をしている間に教室に着いてしまっていたようだ。促されるままわざかに開いた扉の向こう、三十人の女子生徒達を見て、ネギはうつと怯んで後じさった。

自習となつていたらしいが、まともに自習をしている生徒の姿などほとんどない。皆好き勝手に席を立ち、お喋りやら商売やら整備やらしている。寝ている人の方がまだマジメに思えそうな光景だ。さすがにこれには数えで十の子供でなくとも怯むか、初対面でも怒りに顔を染めるところだろう。

「元気のいいクラスだから」

しづながそう言つが、あまりフォローになつていなかつた。だがそれでも後押しにはなつたのか、ネギはもう一度名簿にござつと目を通し、深呼吸をしてから覚悟を決めると、扉を開いた。

「失礼しま

途端、彼の頭上より降下強襲をかけるチョークたつぱり黒板消し。わずかに開いていた扉の間に挟んでものが落ちてきたのだ。それを頭で受け止め、広がつた炭酸カルシウム粉に鼻を刺激されたネギが盛大にクシャミをした。普段はあるはずの魔力による強化がないせいか、足腰にあまり力が入っていない状態でのクシャミの勢いで彼はおつとつと前に進み、

「へぶつ？！あぼお！あああああああー。『わやつふん
？！……つぶく』

次なる罠、足元にかけてあったロープに引っ掛けかり、頭からバケツを受け、どこから湧いて出たのかビー玉の群に転がされながら吸盤付矢に射られると、頭から教卓に激突して止まつたと思つたら、またビー玉の群でバランスを崩して鼻つ一面を床面に叩きつけた。

動かなくなつたネギに教室中から笑い声が襲いかかる。

「……これ普通トラウマものだろ……」

ぼそりと千鶴が呟いた一言は笑い声に書き消され、やつとのことで罠に掛かったのが高畑でもなければ編入生の同学年男子でもない、自分達よりも年下の子供だと気付いた少女達が静まりかえり、慌てて駆け寄る。

そんな中なじむは、「席について」と声を上げながら入るしづなと一緒に、見事に全作動した罠の名残を避けながら教室入りする。席についたままでいた数人がなじむの姿を確認して、目を見開く。主に高崎のどかやその友人達だ。

なじむは教卓の後ろに立つたネギの、さらに斜め後ろに控える。

「みんな、今日からこの子があなた達の新しい先生よ。といつても担任補佐ですけどね。自己紹介してもうつから席に着いて。や、ネギ先生」

しづなによつてまとめ上げられた生徒達は席に着き、ふらふらとしているネギに注目した。

「ええと、あ、あの……。ボク……ボク……今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。三学期の間だけですけどよろしくお願いします」

今魔法つて言いかけたな、と魔法関係者達から一斉に怒氣や冷視が集中する。

千雨などは頭を抱えてしまつていた。今朝の記憶が消されていることはなじむ伝にすでに知つてゐる。だが彼女が手に入れていた前情報では彼は魔法学校を飛び級の主席で卒業しているのだ。今朝の一件はもしや偶然の結果であつたのかもしれないなどとまだ思つていたが、憶えたての日本語で言い間違えかけるとはどれだけ魔法大好きなんだとつっこみたくなつた。どうやらこのままでは本格的に駄目そうであると、ある種絶望に近い感情を彼女は抱き始めていた。

そしてネギの血口紹介でしげしの間止まつていた時間が、一斉に動き出す。

「 キヤアアアアア ! かわいいいいいいいい ! 」

窓が割れんばかりの黄色い大歎声と、スタンダップと共に駆けだした少女達がネギに押し潰さんばかりに詰め寄つた。

「ね、何処から来たの？」

「ウエールズってどこ?」

「その、イギリスの……」

何歳なの?」

「か、数えで十歳……」

「麻帆良のど」に住んでるの」

「あ、ま、まだどこにも……」

お触りどころか抱きしめられたうえ怒濤の質問攻めという状況に翻弄され目を白黒させているネギを他所に、なごむは数人の知人友人達に小さく手を振り混乱の収束を待ちつつも、今朝の一件に直接巻き込まれた神楽坂明日菜の様子を窺つ。

彼女は怖ろしい形相でネギのことを睨みつけていたが、それだけであった。どうやらなにか行動を起こすほどの疑問は抱いていないらしい。むしろなごむが見ていることに気付き、睨み先が移つてしまつた。

だが特に気にせずなごむがいつも通り笑いかけると、一瞬さらには視線を鋭くされ、次の瞬間にはやるだけ無駄と悟ったように荒く鼻で息を吐き、彼女はネギ睨みに戻つた。

明日菜とは冬休み中の女子寮で数度会話を交わしていた。男だということで随分と警戒され、なごむは一方的に敵視されていたが。女子寮に男子といふことで警戒するのはわかるが、寮監の許可を取つてていることを何度も訴えたのに話を聞かず、暴力に走つてまで一方的に排除しようとするとにはさすがのなごむも閉口した。途中で寮監が戻つてこなければ、本当に叩き出されるところであつた。

そしてそんな彼女はクラス担任のタカミチ・T・高畑に対して恋愛感情を抱いており、失恋占いと共に彼の目の前で半裸にされるという事態に至つた原因かもしれないネギの存在が、気に食わないのだ。

そういうしている内に騒ぎは一旦の収束をみたのか、しづなが手を叩いて音頭をとり、立つていた生徒達を座らせる。

「紹介は終わつていませんよ。まだ先のことになるけど、今度男子中等部の校舎を補修工事することになったの。それで一年後くらい

を目処に男子生徒の一時受け入れが始まる予定となりました。彼はみんなに馴れてもらうための先行編入生となります。そ、富崎君もどうぞ」

「富崎なごむです。すでに何人か親しくさせてもらっている方もいますが、これから一年とちょっと、よろしくお願ひします」

今度は先ほどのネギのような歎声は起こらない。

代わりになごむを知っている者達からの、ああ彼か、というような声と、知らない者達が知っている者達に尋ねる疑問の声とが、ざわめきとなつて一斉に湧き上がる。

ついついとつた感じにいくつかの視線が富崎のどかのもともに向かっていたが、彼女はそれに気付くと恥ずかしそうに俯いてしまつていた。

このクラスの性質上大して氣にもされないし、その馴れ初めにやましいことなど何もなかつたのだが、片親同士の再婚で同じ年の姉弟になつたなど、年頃の少女には少々どころではなく恥ずかしい話題には変わりない。

そんな中、詩緒が手を振りながら満面の笑みで声をあげた。

「なごむつー なごむの席ここなつ、 リリツー」

そう言つて詩緒の隣、千雨のすぐ後ろの席ぱしゃと叩いて報せる。彼女が今朝千雨に声をかけたときに座つていた空席だ。

教室で何人かと話はするものの普段千雨としか行動を共にせず、このクラスでみると付き合いが悪い部類に入る彼女の行動に、教室中から奇異と興味の視線が集まる。

女子寮になごむが行っていた際、物資の受け渡しは寮監を通してかもしくはロビーで待ち合わせて行われていた。だがロビーでの待ち合わせは寮監の信頼を得た後半からのことであり、片手で足りる日数での出来事でしかなかった。

それに里帰りしている者が多い冬休み中だったということや、休み中の省エネのためにロビーの暖房が切られていたこともあって人があまり寄り付かなかつたため、なごむと詩緒達の関係はあまり知られていなかつた。

彼女に對してのものではないとはいえ、集まつた視線軌道上に座つていた千雨が振り返り、迷惑そうに詩緒を見やる。あのよつな会を発足しておきながらだが、今だつて彼女はこういつた場所で田立ちたくなはないのだ。

「しおちゃん知り合いなん?
「聞くだけ野暮な関係だ」

木乃香と詩緒の問答を聞いて、途端、おーやりきやーやり、親しくつてそういうことなどと騒がしくなる。

でもそれ実は答えになつていないよな、などと千雨が考えていると、詩緒と田が合ひ彼女がにやりと笑つてきた。嫌な予感が千雨を襲い、詩緒の口を封じようと動いたところで時すでに遅し。

「千雨の騎士様ナイトである」

彼女の口に手を伸ばしながらつこつこ「うおー!」と千雨が叫んでしまつたのも仕方ないこと。

しかしその千雨の態度は詩緒の言を半ば認めているようなものであり、さらに騒ぎは大きくなる。

だがそれもすぐに治まることとなつた。

詩緒の横から、「五月蠅い」と小さいながらも良く通るメゾソプラノの声が上がり、同時に怒氣と殺氣が教室中に充満したからだ。

魔法関係者達が冷や汗をかき、一般人達も背筋に走った冷たいものにぶるりと震える。

ネギの時の歎声や今の騒ぎのせいで、机に突っ伏して寝ていたエヴァンジェリンが起きたのだ。

眉を顰め、まだ眠いのか半眼となつた視線で教室中を睥睨する真祖の吸血鬼。

そんな彼女がなごむのことを見つけると視線だけでこっちに来いと命令し、はいはいとなごむは答えながら鞄から菓子袋を取り出しつつ側に寄る。

「バタースカツチ」

片言なエヴァンジェリンの要求に、なごむは片栗粉が塗されたローランバー色のあめ玉を一つ取り出し、あー、と開いた彼女の口の中に一つ入れてやつた。ん、と途端に彼女は相好を崩して笑顔になり、うつとりとした表情でまぶたを閉じて口内の甘味を楽しみだす。そんな主の姿をその従者は、「寝ぼけているマスター……ああ、そんなに頬を綻ばせて…… 録画中……録画中……」などと呴きながら見詰めている。

そしてなごむとエヴァンジェリンを見ていた詩緒も「ミルクミント」と言い、あー、と口を開ける。なごむは同様に袋から薄緑色のあめ玉を出して彼女の口に入れてやると、今度は千雨に、どうする

? とこいつのような視線を寄越した。

千雨はバツ、バツ、と勢いよく周囲を見回した。

教室中の視線が彼女に集まっていた。

爛々と、期待の籠もった視線が。

千雨が呻く。

「…………う、な、なんだよ、てめえら。」「、こっち見んじゃねえ…

…

睨みつけ、普段このクラスでは使つことのない乱暴な言葉づかい
で千雨が周囲を威嚇するが、顔が真っ赤なので誰も恐がらない。む
しろ微笑ましいとでも言いたそうな視線の度合いが強くなつた。

それらにたじろぎながら赤くなつた彼女は、俯いたと思つたら今
度は視線を上げて周囲を見たり、かと思えばまた俯いて次はなごむ
を見たりと、忙しく視線を迷わせ始める。最後には観念したの
か、詩緒達の方を向いて 教室の大半の視線には背を向ける形で、
俯いたままながら手を差し出した。

「……蜂蜜」
「はい」

言われるよりも先に出していたなごむが、その手に琥珀色のあめ
玉を乗せてやる。

千雨は手に浮いた汗で、手作り故に塗された片栗粉が溶けないよ
う、やつさと口に放つた。

それと同時に怒号が飛ぶ。

「何故な」「むが」「る?」

「あれ、エヴァに編入のことについてなかつたつけ?」

「聞いとらんわっ!」

寝ぼけから復活したエヴァンジロンの口びに驚いた千雨は、危うくあめを飲み込むところだった。

第10話・鉛玉（後書き）

——田中が終わらない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792w/>

ネギま！ 塩派！

2011年11月30日10時34分発行